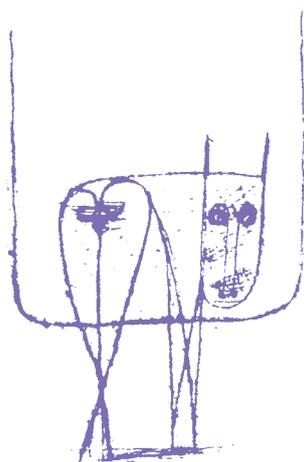

神奈川県立近代美術館
年2018報
ANNUAL REPORT



神奈川県立近代美術館

年2018報

ANNUAL REPORT

目次

[凡例]

- ・本年報に記載する人物は、原則として敬称略とする。
- ・各学芸員の役職は「職員一覧」(p.58)を参照のこと。

あいさつ	3
展覧会活動	
2018年度展覧会 会期・観覧者数一覧	4
葉山館	5
教育普及活動	
教育普及事業実績一覧	17
団体来館・視察受入状況	23
美術図書室	24
美術館紹介・広報 掲載実績	25
刊行物	27
神奈川県立近代美術館における専門講座、アウトリーチ事業、社会包摂事業の展開と成果	28
作品蒐集管理活動	
購入・寄贈・寄託状況	30
新収蔵作品一覧	30
館外貸出作品一覧	33
修復報告	34
修復作品一覧	39
美術館資料の保存と活用—2018年度のアーカイブ事業について	40
調査研究活動	
調査・研究報告	
後藤秀聖氏寄贈の原田直次郎関連資料について [三本松倫代]	41
戦前・戦中期の佐野繁次郎 [橋 秀文]	47
調査研究の発表・執筆等	51
外部資金の活用	52
「神奈川県まなびや基金」を活用した彫刻整備	53
講師派遣・外部委員等就任	54
運営・管理報告	
概況(沿革・所掌事務・施設の状況)	55
PFI事業の概要	55
収入・支出の状況	55
関係法規	56
組織	57
職員一覧	58

あいさつ

『神奈川県立近代美術館 2018 年度年報』を刊行いたします。

鎌倉別館は 2017 年 9 月で展覧会活動を休止し、2017 年度末には改修工事に入りました。2018 年度からは、2019 年度のリニューアル・オープンを視野に入れて、改修を進めると同時に、そのためのさまざまな調整を重ねました。また、敷地の狭さのためにやや窮屈な印象のあった野外彫刻の一部を葉山館へ移設し始めました。具体的には鎌倉別館のアプローチの途中に設置されていた小田襄の作品は、年度内に葉山に移されました。さらに、鑑賞後に庭園を眺めながら語り、くつろぐ場所としてカフェを増設いたしました。この彫刻の整備には、橋川雄一氏のご寄附にもとづく「神奈川県まなびや基金」を活用させていただきました。ここに篤くお礼申し上げます。

展覧会活動については、葉山館のみでの開催となり、企画展 4 本、同時開催のコレクション展 4 本を実現しています。

企画展「ブルーノ・ムナーリ こどもの心をもちつづけるということ」は、従来日本国内のコレクションによって構成されることの多かった、多才な造形作家であるムナーリの全貌をイタリア国内からの出品協力を得て、初期から晩年まで辿る本格的な回顧展となりました。イタリア未来派との結びつきや、20 世紀前半のさまざまな雑誌でのグラフィック・デザイナーとしての活動が、戦後の飛躍を準備したことが実感できる内容であり、そこに息子アルベルトのための絵本が誕生してくる展開も含めて生き生きと追体験することができました。表現そのものは写実的というよりもかなり抽象度の高いものでありながら、親子連れを含む、多くの来館者に恵まれました。ムナーリ本人が日本に注いだ親愛の情は、すでに我が国にしっかりと根づいていることが改めて確認できる機会となりました。ムナーリが日本に残してくれた遺産は、本展を機にさらに世代を越えて受け継がれてゆくことでしょう。

夏休みの開催となった企画展「国立民族学博物館コレクション 貝の道」は、大阪の国立民族学博物館の全面的な協力により同館コレクションから選りすぐった、「貝」を素材として活かした造形物を展示いたしました。人類は古来、貨幣、あるいは装身具として貝を利用してきました。本展では、とくにタカラガイが世界に広く流布してゆく経路に「貝の道」を見出し、それを反映する資料群に注目いたしました。また、葉山館に隣接する葉山しおさい博物館の協力を得て、美術史学、民族学、生物学などを横断する学際的な展示の試みでもありました。

秋には葉山館開館 15 周年として「アルヴァ・アアルト—もうひとつの自然」展をヴィトラ・デザイン・ミュージアムとアルヴァ・アアルト美術館などの全面的な協力によって開催することができました。近年のフィンランド・デザインの世界的な評価の高まりのなかで、アアルトは、その原点ともいべき基本形を提示した最重要な総合的クリエイターに数えられます。その本格的な回顧展を、生活と芸術のあるべき関係を探ることを目標としている葉山館で実現できたことは感慨深いものがあります。

最後の「堀内正和展 おもしろ楽しい心と形」では、当館とはもともと縁の深い彫刻家のひとり堀内正和の初期から晩年までの創作の展開を辿るとともに、そのきわめて意識的で知的な探求の過程を資料やマケットなどの充実した展示を加えて紹介しました。松本竣介とまさに同時代の彫刻家が近代彫刻にどのように挑んだかを、まるで作者の肉声に触れながら体験するような親密感の漂う展示となりました。

また、鎌倉での活動が減った分を補うべく教育普及活動にも注力いたしました。かながわ国際交流財団との共同による MULPA (マルパ) のプロジェクトを継続しつつ、多様な活動を行うことができました。地域に密着しつつ、より開かれた、だれもが参加することのできるユニバーサルな美術館の構築に向けて教育普及活動を今後もさらに充実させていく所存です。

最後になりましたが、普段より当館の活動にご理解とご協力をいただいている関係各位に心より感謝の意を表します。

2019 年 12 月

神奈川県立近代美術館長
水沢 勉

展覧会活動

2018年度展覧会 会期・観覧者数一覧

	展覧会名	会期	日数	観覧料		観覧者数（人）			合計	巡回先	
						有料	無料	うち 中学生 以下			
葉山館 企画展	ブルーノ・ムナーリ こどもの心をもちつづける ということ	4/7 6/10	57日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生	1,200円 1,050円 600円 100円	14,369	5,205	1,703	19,574	北九州市立美術館 岩手県立美術館 世田谷美術館	
	国立民族学博物館コレクション 貝の道	6/23 9/2	63日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生	1,200円 1,050円 600円 100円	5,474	3,343	1,485	8,817		
	アルヴァ・アアルト —もうひとつの自然	9/15 11/25	65日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生	1,200円 1,050円 600円 100円	24,897	7,835	1,859	32,732	名古屋市美術館 東京ステーションギャラリー 青森県立美術館	
	堀内正和展 おもしろ楽しい心と形	12/8 3/24	90日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生	1,200円 1,050円 600円 100円	4,663	3,357	485	8,020		
小計			275日			49,403	19,740	5,532	69,143		
葉山館 コレクション展	抽象の喜び	4/7 6/10	57日	一般 20歳未満・学生 65歳以上・高校生	250円 150円 100円	14,918	5,205	1,703	20,123		
	絵ってとまっているのかな？	6/23 9/2	63日	一般 20歳未満・学生 65歳以上・高校生	250円 150円 100円	6,350	3,343	1,485	9,693		
	描かれた「建物」	9/15 11/25	65日	一般 20歳未満・学生 65歳以上・高校生	250円 150円 100円	25,484	7,835	1,859	33,319		
	モダンなフォルム	12/8 3/24	90日	一般 20歳未満・学生 65歳以上・高校生	250円 150円 100円	5,515	3,357	485	8,872		
小計			275日			52,267	19,740	5,532	72,007		
合計（8展覧会）							101,670	39,480	11,064	141,150	

737

ブルーノ・ムナリ こどもの心をもちつづけるということ

BRUNO MUNARI Conservare lo spirito dell'infanzia

本展は、芸術からデザインそして児童教育に至るまで独創的な活動を繰り広げたブルーノ・ムナリ（1907-1998）の展覧会である。本展は、1985年にこどもの城（渋谷）における回顧展の際に実演されたワークショップを「ムナリを読み解く鍵」として、その全生涯にわたる作品約320点を紹介した。そのうち約150点は日本初公開となる作品で、未来派に関わっていた時代の作品、そして晩年の絵本原画など、これまで日本であまり知られてこなかったムナリの一面を含んでいる。また会期中毎週土曜日は、ムナリの絵本や遊具を手にとることができる場を設け、言葉を越えるムナリの表現や思想に触れられる機会を設けた。

主催：神奈川県立近代美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会

後援：イタリア大使館、イタリア文化会館

協賛：ライオン、大日本印刷、損保ジャパン日本興亜、日本テレビ放送網

協力：アリタリア-イタリア航空、日本通運

特別協力：特定非営利活動法人市民の芸術活動推進委員会、日本ブルーノ・ムナリ協会

出品協力：パルマ大学 CSAC

会期：2018年4月7日(土)～6月10日(日)

休館日：月曜日（4月30日は開館）

開催日数：57日

出品総点数：311点

総観覧者数：19,574人

担当学芸員：高嶋雄一郎、靱山昌夫

巡回先：北九州市立美術館、岩手県立美術館、世田谷美術館

関連企画

- 1) オープニング・トーク 4月7日(土)
講師：アルベルト・ムナリ（ジュネーブ大学名誉教授／ブルーノ・ムナリ子息）
- 2) 講演会「ブルーノ・ムナリーひとすに造形の言葉を求めて」
5月5日(土・祝) 講師：岩崎清（日本ブルーノ・ムナリ協会代表）
- 3) 担当学芸員によるギャラリートーク(大人むけ)
4月8日(日)、5月19日(土)
担当学芸員によるギャラリートーク(子どもむけ)
4月28日(土)、5月12日(土)
- 4) 先生のための特別鑑賞の時間 5月19日(土)
- 5) ワークショップ「毎週土曜日はムナリの遊具で遊ぼう」
会期中毎週土曜日、但し4月7日(土)を除く
- 6) 近代美術館入門講座(葉山町共催)「役に立たない」ブルーノ・ムナリ講座 4月21日(土) 場所：葉山町福祉文化会館 大会議室



ポスター



会場風景

撮影：永禮賢

カタログ

サイズ：26.0 × 19.0cm、384 ページ、販売価格：2,800 円（税込）

編集 集：高嶋雄一郎（神奈川県立近代美術館）、奥田亜希子（北九州市立美術館）、盛本直美（岩手県立美術館）、野田尚稔、塚田美紀（世田谷美術館）、岩崎 清（日本ブルーノ・ムナリー協会代表）、清水恭子（求龍堂）

編集 協力：有福一昭（有明教育芸術短期大学教授）

執筆 筆：酒井忠康、アルベルト・ムナリー、岩崎 清、盛本直美、奥田亜希子、塚田美紀、高嶋雄一郎、フランチェスカ・ザネッラ、ルカ・ザッファラーノ、有福一昭、野田尚稔

翻訳[伊文和訳]：田丸公美子

校 閲：高橋 賢

アートディレクション：加藤賢策（LABORATORIES）

デザイン：北岡誠吾（LABORATORIES）

印刷・製本：株式会社東京印書館

発行 日：2018年4月7日/初版

発行 者：足立欣也

発行 所：株式会社求龍堂

目次

あいさつにかえて（酒井忠康）

しぐさ——ブルーノ・ムナリーと「身ぶりの英知」（アルベルト・ムナリー）

Shigusa. Bruno Munari e l'Intelligenza del Gesto (Alberto Munari)

ブルーノ・ムナリー——視覚言語の海へ（岩崎 清）

プロローグ：未来派の頃 PROLOGO: IL PERIODO FUTURISTA

コラム 未来派

コラム カンバリ

絵はあらゆる箇所が生きている IL QUADRO VIVE IN OGNI PUNTO

コラム 具体芸術運動

コラム アルテ・プログラムマータ

子どもはすべての感覚で世界を認識している I BAMBINI STANNO

CONOSCENDO IL MONDO CON TUTTI I SENSI

コラム 絵本

コラム コンパツ・ドーロ

どんな素材にもファンタジアへのヒントがみつまっている OGNI MATERIALE

DA SUGGERIMENTI ALLA FANTASIA

コラム 直接の映写

考古学のアイデアを美術の領域に取り入れる TRASPORTIAMO IL

RICOSTRUZIONE NEL CAMPO DELL'ARTE

コラム 機械

コラム ジャンニ・ロダーリ

みんなの美術にたどりついたかったら SE SI VUOLE ARRIVARE A

UN'ARTE DI TUTTI

コラム 日本初個展

コラム オリジナルのゼログラフィアー

作品は無限の変化の一つとして出現する OGNI OGGETTO SI PRESENTAVA

COME UNA PARTE DI UN INFINITO MODULATO

コラム ダネーゼ

コラム ペアーノ曲線

どれほど多くの人が月を見て人間の顔を連想するか PENSATE QUANTA

GENTE VEDE UNA FACCIA NELLA LUNA

コラム ヴィジュアル・コミュニケーション

コラム 文字と記号

エピローグ：アートとあそぼう EPILOGO: GIOCARE CON L'ARTE

コラム こどもの城

ブルーノ・ムナリーと、パルマ大学コミュニケーション研究センター&アー

カイブ (CSAC) (フランチェスカ・ザネッラ)

Bruno Munari al Centro Studi e Archivio della Comunicazione (CSAC)

dell'Università di Parma (Francesca Zanella)

ブルーノ・ムナリー——変容し続けるかたちのクリエイター(ルカ・ザッファラーノ)

Bruno Munari. Creatore di forme in continua trasformazione (Luca Zaffarano)

日本におけるブルーノ・ムナリー (有福一昭)

ブルーノ・ムナリーの理論的再構成 (野田尚稔)

ブルーノ・ムナリー年譜 (奥田亜希子編)

主要文献目録 (盛本直美編)

出品作品リスト

関連記事

▼展評・解説など

・白坂由里「Art 『ブルーノ・ムナリー こどもの心をもちつづけるということ』 シンプルで遊び心満載。多面的なムナリーの魅力」『マリソル』2018年5月7日(第12巻第3号)、p.211

・高嶋雄一郎「『ブルーノ・ムナリー』展 ㊤ めくると意外な色と形」『読売新聞』2018年5月9日、30面

・高嶋雄一郎「『ブルーノ・ムナリー』展 ㊤ 木の描き方優しく解説」『読売新聞』2018年5月10日、30面

・高嶋雄一郎「『ブルーノ・ムナリー』展 ㊤ 軽やかに立つ紙の彫刻」『読売新聞』2018年5月11日、28面

・川上典季子「pen selection ART 自由な心が生んだ、美術やデザイン『ブルーノ・ムナリー こどもの心をもちつづけるということ』」『pen』2018年5月15日(No.451)、p.120

・下野 綾「ブルーノ・ムナリー展 今だからこそ分かる先見性 県立近代美術館 葉山」『神奈川新聞』2018年5月21日、6面

・高嶋雄一郎「ぎゅらりいモール 神奈川県立近代美術館 葉山「ブルーノ・ムナリー」から」『読売新聞』夕刊、2018年5月22日、7面

・水沢 勉「特別インタビュー アルベルト・ムナリー氏に聞く」『美連協ニュース』2018年8月(No.139)、pp.12-13

・[編集協力] 西山雅子、撮影：黒澤義教・赤井賢一、石井景子、神奈川県立近代美術館「没後20周年展覧会開催記念 ブルーノ・ムナリー 未来にはばたく空想力」『MOE』2018年11月2日(第40巻第12号)、pp.68-73

・太田岳人「CASABELLA JAPAN レビュー ブルーノ・ムナリー、その歴史的座標」『CASABELLA JAPAN』2018年11月15日(889号)、pp.25-27

▼展覧会紹介：5紙(11回) / 13誌(13回)

▼情報掲載：5紙(41回) / 19誌(32回)

▼ウェブ

・美術手帖「ブルーノ・ムナリーって、何者？学芸員に聞く、ユーモアを忘れないマルチ・アーティストの創作の裏側」

(<https://bijutsutecho.com/magazine/interview/14950/>)、他



カタログ

葉山館 展示室 1

738

コレクション展 抽象の悦び

From Museum Collection: Pleasure of Abstraction

20世紀を通じてダイナミックに展開した抽象絵画。日本でも、1920年代に村山知義が革新的な作品を発表し、1930年代には村井正誠らが独自の表現を切り拓いた。戦後は斉藤義重が《鬼》で概念の抽象絵画化を試み、アンフォルメル運動にかかわった今井俊満や堂本尚郎らが大作を生み出した。大正期から現代まで、日本の抽象美術の多様で豊かな表現世界を紹介した。

主催：神奈川県立近代美術館
会期：2018年4月7日(土)～6月10日(日)
休館日：月曜日(4月30日は開館)

開催日数：57日

出品総点数：37点

総観覧者数：20,123人

担当学芸員：橋 秀文、長門佐季

関連企画

- 1) 担当学芸員によるギャラリートーク 4月8日(日)、5月19日(土)
- 2) 葉山近代美術館講座(葉山町共催) 4月14日(土)
- 3) 先生のための特別鑑賞の時間 6月2日(土)

関連記事

▼情報掲載：1紙(1回)／2誌(5回)



チラシ



会場風景

撮影：永禮賢

739

国立民族学博物館コレクション 貝の道

The Collection of the National Museum of Ethnology—Shell Road

本展の狙いは、私たち人間は貝とどのような関係を育んできたのかを博物館と美術館の枠組を超えて問い直すことにあった。国立民族学博物館の学術協力を得、そのコレクションから約150点の貝細工を展示した。とりわけオセアニア、アジア、アフリカなど広域に分布するタカラガイに注目し、それぞれの地域、民族ごとに展開してきた多様な貝細工の道を辿った。本来、これらの貝細工は博物資料とされるが、美術館に展示することで、鑑賞者がその豊かで独自の造形的面白さや、人びとの手仕事の美を再発見し、それぞれの貝細工が生み出された社会・生活文化を理解できる工夫を行った。関連企画として、海に面した当館の立地を活かし、隣接する葉山しおさい博物館と連携を図りながら、貝をテーマにしたワークショップや、民族学、海洋生物学の識者による講演会やトークを行った。

主 催：神奈川県立近代美術館
 共 催：国立民族学博物館
 後 援：葉山町、葉山町教育委員会
 協 力：葉山しおさい博物館
 助 成：公益財団法人 野村財団
 会 期：2018年6月23日(土)～9月2日(日)
 休 館 日：月曜日（7月16日は開館）
 開 催 日 数：63日
 出 品 総 点 数：149点（標本資料33件）
 総 観 覧 者 数：8,817人
 担 当 学 芸 員：朝木由香、土居由美

関連企画

- 1) 講演会「タカラガイと貝の道」 8月4日(土)
 講師：池谷和信（国立民族学博物館教授、総合研究大学院大学教授）
- 2) 日本画ワークショップ「貝を描く、貝で描く」 7月7日(土)
 講師：内田あぐり（日本画家、武蔵野美術大学教授）
- 3) 葉山しおさい博物館とのコラボレーション企画
 ①「海の生き物を観察しよう」 7月1日(日)
 ②「貝の化石や生きた貝を顕微鏡で観察してスケッチしよう」 8月5日(日)
 講師（①②とも）：倉持卓司（葉山しおさい博物館）
- 4) 近代美術館と葉山しおさい博物館の2館をめぐるギャラリーツアー
 ①6月24日(日)、②8月18日(土)
 講師（①②とも）：朝木由香、倉持卓司
- 5) 館長トーク 6月23日(土) 話し手：水沢 勉
- 6) 担当学芸員によるギャラリートーク 7月14日(土)、9月1日(土)
- 7) 近代美術館入門講座（葉山町共催）「貝でつなぐ 美術館と博物館」
 6月30日(土) 会場：葉山町福祉文化会館 講師：朝木由香
- 8) 先生のための特別鑑賞の時間 7月14日(土)
- 9) 貝からスタンプワークショップ ①8月11日(土)、②8月12日(日)
- 10) 子供のためのギャラリートーク 8月24日(金)



ポスター



会場風景

撮影：阿部 健

カタログ

サイズ：24 × 17.5cm、64 ページ、販売価格：1,200 円（税込）
編集：朝木由香（神奈川県立近代美術館）
執筆：水沢 勉（神奈川県立近代美術館）、吉田憲司（国立民族学博物館）、池谷和信（国立民族学博物館、学術協力者）、朝木由香
翻訳：ポリー・バートン
デザイン：川村格夫
撮影：阿部 健
印刷：株式会社ポートサイド印刷
発行者：神奈川県立近代美術館

目次

あいさつ（水沢 勉）
あいさつ（吉田憲司）
貝をつなぐ（朝木由香）
タカラガイの道—貝に刻まれた人類史—（池谷和信）
出品リスト

Foreword (Tsutomu Mizusawa)
Foreword (Kenji Yoshida)
Threading Shells (Yuka Asaki)
The Cowrie Road: Shells Inscribed by Human History (Kazunobu Ikeya)
List of Works

関連記事

- ▼展評・解説など
- 池谷和信「ビーズに秘められた可能性 ③貝殻」『ビーズをアートに楽しむ情報掲載マガジン Bead Art & Embroidery』2018年7月1日 (Vol.26)、pp.62-65
 - 森田 睦「所蔵品貸し借り 展示に有利 貸し手 作品活用、自館 PR 借り手 新しい客層を開拓」『読売新聞』2018年7月12日、21 面
 - 下野 綾「貝の道展 近美葉山 造形美の豊かさ」『神奈川新聞』2018年7月30日、6 面
 - 結城昌子「今月の ART」『家庭画報』2018年8月1日(9月号)、p.264
 - 池谷和信「国立民族学博物館の収蔵品 48 貝殻から見た神像付き椅子」『文部科学 教育通信』2018年8月27日号(No.442)、n.p.
 - 朝木由香「〇〇してみました世界のフィールド」『国立民族学博物館コレクション 貝の道』を旅して『月刊みんぱく』2019年1月1日(第 43 巻 第 1 号)、pp.10-11
- ▼展覧会紹介：4 紙（4 回）／4 誌（4 回）
- ▼情報掲載：5 紙（44 回）／15 誌（22 回）
- ▼ウェブ 8 件
- 美術手帖「ART NAVI」(<https://bijutsutecho.com/exhibitions/2008>)
 - 情報サイト MIRAI (https://kizunamirai.com/detail.php?c_key=24f8bfe7d6234c2d623dbb83f9d20fd228adceab)、他
- ▼テレビ番組 1 件
- NHK 首都圏ニュース「世界各地の貝細工の装飾品展」2018年8月2日
- ▼ラジオ番組 2 件
- J-WAVE「GOOD NEIGHBORS (PART 1) ナビゲーター：クリス智子」2018年8月13日
 - 湘南ビーチ FM「DAILY ZUSHI HAYAMA」7月31日
- ▼動画サイト 2 件
- YouTube番組「アトライター木谷節子の美術館に行ってきました！夏休みは葉山へ！神奈川県立近代美術館『貝の道』」(<https://youtu.be/L4K8HMQaWY>)、他



カタログ

740

コレクション展 絵ってとまっているのかな？

From Museum Collection: Is Painting Still?

絵画や版画、写真などを中心に、静止した「平面作品」に表現されたダイナミズムや静謐さといった「動き」をテーマとする所蔵品展。「いぶきとうごき」、「リズムとテンポ」の2セクションに分けて、色彩の響合、反復性、自然描写やフォトリアリズム、図形楽譜や詩画集などの特徴ある作品を展示した。

主催：神奈川県立近代美術館

会期：2018年6月23日(土)～9月2日(日)

休館日：月曜日（7月16日は開館）

開催日数：63日

出品総点数：20点

総観覧者数：9,693人

担当学芸員：三本松倫代、高嶋雄一郎

関連企画

- 1) 館長トーク 6月23日(土) 話し手：水沢 勉
- 2) 担当学芸員によるギャラリートーク 7月22日(日)、8月19日(日)
- 3) 先生のための特別鑑賞の時間 6月23日(土)

関連記事

▼情報掲載：2紙(2回)／9誌(14回)



会場風景

撮影：阿部 健

741

神奈川県立近代美術館 葉山 開館15周年記念 アルヴァ・アアルト—もうひとつの自然

Alvar Aalto—Second Nature

本展覧会は、生誕120年となるフィンランドの建築家アルヴァ・アアルト（1898-1976）のヴィトラ・デザイン・ミュージアムとアルヴァ・アアルト美術館が企画した国際巡回展であり、日本では約20年ぶりとなる本格的な回顧展として開催された。ヴィープリの図書館などのオリジナルの図面、《スツール60》などの家具、照明器具、ガラス器、建築模型などによって、モダニズムに自然の要素を取り入れ、人々の暮らしをより良くすることを追及して、建築のみならず家具デザインの展開に画期的な役割を果たしたアアルトの生涯と創造を紹介した。また、関係企業の協力を得て、太平洋を望む展示室にアアルトの代表的な家具等を並べて、自然と調和したアアルトのデザインを体験できる特設コーナー「アアルトルーム / Aalto Room」を併設し、ワークショップを実施した。本展覧会の実績により、担当学芸員は神奈川県教育委員会職員功績賞と神奈川県職員功績賞を受けた。

- 主 催：神奈川県立近代美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会
- 協 賛：ライオン、大日本印刷、損保ジャパン日本興亜、日本テレビ放送網、インターオフィス
- 協 力：ルフトハンザ ドイツ航空、ルフトハンザ カーゴ AG、フィスカース ジャパン
- 後 援：フィンランド大使館

An Exhibition by the Vitra Design Museum and the Alvar Aalto Museum

Main partners: artek and vitra

Global sponsor: Microsoft

Main sponsor for the Japanese tour: iittala

会 期：2018年9月15日(土)～11月25日(日)

休 館 日：月曜日(9月17日、9月24日、10月8日は開館)

開催日数：65日

出品総点数：227点

総観覧者数：32,732人

担当学芸員：靱山昌夫、高嶋雄一郎

巡 回 先：名古屋市美術館、東京ステーションギャラリー、青森県立美術館

関連企画

- 1) ゲスト・トーク 11月10日(土)
講師：和田菜穂子(建築史家)
- 2) 記念講演会「家具から探るアルヴァ・アアルト」11月18日(日)
講師：島崎 信(武蔵野美術大学名誉教授)
聴き手：濱田信行(家具修理工房“Sitwell”主宰)
- 3) 館長トーク 9月15日(土) 話し手：水沢 勉
- 4) ワークショップ「自分だけのアアルトルームをつくらう」
9月2日(日)～11月25日(日)、但し11月3日(土・祝)を除く
- 5) 担当学芸員によるギャラリートーク
9月29日(土)、10月13日(土)、10月27日(土)
- 6) 先生のための特別鑑賞の時間 10月13日(土)



ポスター



会場風景

撮影：Petri Artturi Asikainen

カタログ

サイズ：25.5 × 20.5cm、385ページ、販売価格：3,800円（税込）

編集：和田菜穂子（建築史家、国際展巡回展日本展担当コーディネーター）

執筆：水沢 勉（神奈川県立近代美術館）、マーク・ツェントナー（ヴィトラ・デザイン・ミュージアム館長）、マテオ・クリース（ヴィトラ・デザイン・ミュージアム館長）、トンミ・リンダ（アルヴァ・アアルト財団 マネージング・ディレクター）、ヨッヘン・アイゼンブラント（ヴィトラ・デザイン・ミュージアム チーフキュレーター）、和田菜穂子、靱山昌夫（神奈川県立近代美術館）、林アンニ（アルテック）、松本 淳（建築家）、垣野義典（東京理科大学工学部建築学科准教授）、鷹野 敦（鹿児島大学大学院理工学域工学系准教授）、中村暁子（名古屋市美術館）、三宅理一（建築史家、東京理科大学客員教授）、坂 茂（建築家）、藤本壮介（建築家）、堀部安嗣（建築家）

翻訳：靱山昌夫、中村暁子、柚花 文、池田 亨、宇井久仁子、三木はるか、クリストファー・スティヴンズ

フィンランド語監修：宇井久仁子

装丁・デザイン：色部デザイン研究室

印刷・製本：株式会社アイワード

発行者：佐藤今朝夫

発行所：株式会社国書刊行会

目次

再生の起点—「もうひとつの自然」を求めて（水沢 勉）

ごあいさつ（マーク・ツェントナー、マテオ・クリース）

ごあいさつ（トンミ・リンダ）

アルヴァ・アアルト—もうひとつの自然（ヨッヘン・アイゼンブラント）

第1章 選択的親和力 Elective Affinities

「北のフィレンツェ」を目指して—ユヴァスキュラの労働者会館（和田菜穂子）
アアルトの足跡を辿る旅—ユヴァスキュラ、サウナツァアロほか（和田菜穂子）

第2章 多感覚的空間 Multisensory Spaces

建築家アイノ・アアルト（和田菜穂子）

ヴィーボルク市立図書館（ヴィープリの図書館）の歴史（靱山昌夫）

第3章 芸術と生活 Art and Life

第4章 より良いものを毎日の生活に Better Things for Everyday Life

新たなスタンダードを打ち立てたアアルト家具（林アンニ）

アートとテクノロジーの力を社名に込めたアルテック（林アンニ）

アアルト設計の規格化住宅「A.A. システム」に見え隠れするもの（松本 淳）

アアルトのまちづくり—ロヴァニエミの市民センター（和田菜穂子）

第5章 総合的建築 An Architecture of Synthesis

自然環境に編み込まれた秩序—ヘルシンキ工科大学（現アアルト大学）（垣野義典）

アアルトの鼻歌—サウナ建築（鷹野 敦）

アアルト建築の生み出される場—自邸とスタジオ（中村暁子）

光が織りなす芸術空間—オールポーの美術館（和田菜穂子）

アアルトと日本（和田菜穂子）

芦原義信とフィンランド、そしてアルヴァ・アアルト（三宅理一）

坂 茂 インタビュー アルヴァ・アアルトの設計手法に見られる「融通性のある規格化」について

藤本壮介 インタビュー 藤本壮介とアアルトの森のような建築

堀部安嗣 講演録 アルヴァ・アアルトの建築が伝えるもの

アルヴァ・アアルト略年譜

フィンランド地図

建築・プロジェクトリスト 1919-75

主要参考文献

作品リスト

Tsutomu Mizusawa, Starting Points for Regeneration: In Pursuit of "Second Nature"

Marc Zehntner and Mateo Kries, Foreword

Tommi Lindh, Foreword

Jochen Eisenbrand, Alvar Aalto - Second Nature

Texts on Chapters

関連記事

▼展評・解説など

・川上典李子「pen selection ART 自然との対話が生んだ、現代建築。『アルヴァ・アアルト—もうひとつの自然』『pen』2018年9月15日（No.459）、p.205

・木村尚貴「近代北欧デザインの源流 フィンランドのアアルト回顧展」『朝日新聞』2018年10月9日夕刊、4面

・靱山昌夫「『アルヴァ・アアルト—もうひとつの自然』展①サナトリウム患者に配慮」『読売新聞』横浜版2018年10月13日、32面

・靱山昌夫「『アルヴァ・アアルト—もうひとつの自然』展②心地よい「弾力性ある家具」」『読売新聞』横浜版2018年10月14日、28面

・靱山昌夫「『アルヴァ・アアルト—もうひとつの自然』展③心遣いが息づく図書館」『読売新聞』横浜版2018年10月16日、26面

・下野 綾「県立近代美術館葉山 アルヴァ・アアルト もうひとつの自然 人間味あふれるデザイン」『神奈川新聞』2018年10月29日、5面

・今井歴矢「たおやかな界面 神奈川県立近代美術館 葉山 開館15周年記念 アルヴァ・アアルト—もうひとつの自然」『いけ花龍生』2018年11月1日（第703号）、pp.21-23

・窪田直子「『アルヴァ・アアルト—もうひとつの自然』展 合理的で温かいデザイン」『日本経済新聞』2018年11月21日、44面

▼展覧会紹介：2紙(4回)／12誌(12回)

▼情報掲載：7紙(45回)／13誌(26回)

▼ウェブ

・美術手帖「フィンランドを代表する建築家アルヴァ・アアルトの個展が葉山で開催。建築から家具、器までを紹介」(<https://bijutsutecho.com/magazine/news/exhibition/16283>)、他

▼テレビ番組

・NHK E テレ 日曜美術館アートシーン 10月21日(日)



カタログ

葉山館 展示室 1

742

コレクション展 描かれた「建物」

From Museum Collection: Buildings in Pictures

同時開催の「アルヴァ・アアルト—もうひとつの自然」展にあわせ、当館のコレクションから「建物」をテーマに作品を紹介した。建築は、歴史や国によってさまざまな形を示し、都市の風景を構成する重要な要素となっている。近代化する東京近郊の街並みを描いた松本竣介や、1920年代パリの下町を描いた佐伯祐三のように、建物のある風景を生涯のテーマとした画家も多く存在する。また、ピーテル・ブリューゲルの作品に現れる擬人化された奇想天外な建物や、ヘンリー・ムーアの〈ストーン・ヘンジ〉、ジョバンニ・バッティスタ・ピラネージの〈空想の牢獄〉シリーズなどから見てとれるように、建築は芸術家の空想力を刺激するテーマとしても重要なものであった。本展では、旅先で出会った建築物や遺跡、記憶の中や架空の世界など、古今東西の「建物」が登場する絵画や彫刻作品および資料、計63点を展示し、造形としての面白さだけでなく、作品にあらわれた作者や時代の思想について考察した。

主催：神奈川県立近代美術館
会期：2018年9月15日(土)～11月25日(日)
休館日：月曜日(9月17日、9月24日、10月8日は開館)
開催日数：65日
出品総点数：63点
総観覧者数：33,319人
担当学芸員：西澤晴美、長門佐季

関連企画

- 1) 館長トーク 9月15日(土) 話し手：水沢 勉
- 2) 担当学芸員によるギャラリートーク
9月29日(土)、10月13日(土)、10月27日(土)
- 3) 先生のための特別鑑賞の時間 11月10日(土)

関連記事

▼情報掲載：7誌(14回)



会場風景

743

堀内正和展 おもしろ楽しい心と形

HORIUTI Masakazu: Curious Minds, Joyful Forms

日本の抽象彫刻を代表する作家のひとりとして、次世代の彫刻家たちに大きな影響を与えた堀内正和(1911-2001)の回顧展。抽象彫刻の分野において触覚的な感覚を意識的に取り入れ、身体の一部や身の回りにある形をヒントに作品を制作した。《ウィンクする MiMi ちゃん》(1967年)や《指の股もまた股である》(1968年)といった、鑑賞者が覗き込むことで完成する「のぞき(NOZOKI)」の逆読みから命名された「IKOZON」彫刻では、独自のエロスやユーモアが存分に発揮されている。本展では、具象から抽象へと変化を遂げた1950年代に着目しつつ、初期から晩年までを42点の彫刻作品と堀内の思考の過程で生み出された紙彫刻(ペーパー・スカulpture)を80点、その他資料を展示し、機知とユーモアあふれる作品を創り出した作家の思考を紐解いた。

主 催：神奈川県立近代美術館
助 成：公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団
会 期：2018年12月8日(土)～2019年3月24日(日)
休 館 日：月曜日(12月24日、2019年1月14日、2月11日は開館)、12月29日～2019年1月3日
開催日数：90日
出品総点数：172点
総観覧者数：8,020人
担当学芸員：長門佐季、西澤晴美

関連企画

- 1) 「講演会 堀内正和と辻啓堂」2019年2月24日(日) 尾崎信一郎(鳥取県立博物館 副館長)
- 2) 担当学芸員によるギャラリートーク
2019年1月19日(土)、2月9日(土)、3月9日(土)
- 3) 先生のための特別鑑賞の時間 第9回 鑑賞編 「堀内正和展 おもしろ楽しい心と形」2019年2月2日(土)
- 4) ワークショップ「曲線で折る 立体折り紙体験」講師：三谷 純(筑波大学大学院システム情報系教授)2019年1月27日(日)
- 5) 近代美術館入門講座(葉山町共催)「堀内正和のおもしろしさ」12月15日(土) 場所：葉山町福祉文化会館 大会議室



ポスター



会場風景

撮影：佐藤克秋

会場配布リーフレット

サイズ：21.0×14.8cm、16 ページ、無料配布

執筆：水沢 勉、堀内正和

編集：長門佐季、西澤晴美（神奈川県立近代美術館）

デザイン：三木俊一（文京図案室）

印刷・製本：ニューカラー写真印刷株式会社

発行年：2018 年

発行：神奈川県立近代美術館

目次

「堀内正和展 おもしろ楽しい心と形」開催にあたって（水沢 勉）

はにわのころ一心と形（堀内正和）

線一内なるリズム（堀内正和）

巫山悪戯彫刻—僕の IKOZON 理論（堀内正和）

ひとをだまくらかす楽しみ（堀内正和）

見つけた形（堀内正和）

年譜

出品リスト

関連記事

▼展評・解説など

- ・外崎晃彦「かながわ美の手帖 県立近代美術館葉山館「堀内正和展 おもしろ楽しい心と形」幾何学抽象に遊び心 想像力が広がる世界」『産経新聞』2019 年 1 月 20 日、29 面
- ・下野 綾「くだらないことを大真面目に 県立近代美術館葉山 堀内正和展 おもしろ楽しい心と形」『神奈川新聞』2019 年 1 月 28 日、13 面
- ・藤島俊会「神奈川の文化時評 美術 堀内正和展—おもしろ楽しい心と形 人を“だます”ユーモア彫刻」『神奈川新聞』2019 年 2 月 4 日、13 面
- ・広瀬 登「アートの扉 堀内正和 紙彫刻 1960-90 年代 あふれる遊び心」『毎日新聞』2019 年 2 月 18 日夕刊、3 面
- ・大西若人「堀内正和展 おもしろ楽しい心と形 作品自体に愛すべき「人柄」」『朝日新聞』2019 年 2 月 26 日夕刊、4 面
- ・長縄 宣「ふらっとアート日和 心動かされるユーモアの形象」『まんまる』2019 年 3 月、178 号、p.37
- ・星野清一「街角アート 彫刻家の愛した幾何学」『新美術新聞』2019 年 4 月 1 日、5 面

▼展覧会紹介：1 紙（1 回）／10 誌（10 回）

▼情報掲載：4 紙（45 回）／14 誌（37 回）



リーフレット

744

コレクション展 モダンなフォルム

From Museum Collection: Forms in the Modern Art

同時開催の「堀内正和展」に合わせ、「1. モダンとモダニズム」、「2. モダンに描く、モダンを描く」、「3. モダンと「近代」」の3章を立てて日本近代美術を中心にモダニズムを再考。1,2章では大正から第2次世界大戦前までの油彩やグラフィック、3章では1950-60年代の動向について、抽象表現主義絵画や写真、旧鎌倉館の家具や模型などを紹介した。

主催：神奈川県立近代美術館

会期：2018年12月8日(土)～2019年3月24日(日)

休館日：月曜日(12月24日、2019年1月14日、2月11日は開館)、12月29日～2019年1月3日

開催日数：90日

出品総点数：49点

総観覧者数：8,872人

担当学芸員：三本松倫代、橋 秀文

関連企画

- 1) 担当学芸員によるギャラリートーク
2019年1月19日(土)、2月2日(土)、3月2日(土)
- 2) 近代美術館入門講座(葉山町共催) 2019年1月26日(土)
- 3) 先生のための特別鑑賞の時間 2019年2月23日(土)

関連記事

- ▼展評・解説など
- ▼展覧会紹介：1誌(1回)
- ▼情報掲載：1紙(1回) / 11誌(35回)
- ▼テレビ番組
 - ・「フランス人がときめいた日本の美術館 第29回 日本近代美術の展開を辿る『神奈川県立近代美術館』」BSイレブン 2019年4月26日、TOKYO MX 2019年5月9日



会場風景

撮影：佐藤克秋

教育普及活動

教育普及事業実績一覧

受講・参加プログラム(講演会・ギャラリートーク・学校連携プログラム等)

事業名	事業内容				事業実績		
	テーマまたは内容	講師等	実施日	実施場所	参加方法等	受講人数	
講演会	「ブルーノ・ムナリー こどもの心をもちつづけるということ」記念講演会 ※図1	「ブルーノ・ムナリー—ひたすらに造形の言葉を求めて」	岩崎 清(ブルーノ・ムナリー協会代表)	H30.5.5	葉山館 講堂	先着順	80名
	「国立民族学博物館コレクション 貝の道」講演会 ※図2	「タカラガイと貝の道」	池谷和信(国立民族学博物館教授、総合研究大学院大学教授)	H30.8.4	葉山館 講堂	先着順	43名
	「アルヴァ・アアルト—もうひとつの自然」記念講演会	「家具から探るアルヴァ・アアルト」	島崎 信(武蔵野美術大学名誉教授) 聴き手:濱田信行(家具修理工房"Sitwell"主宰)	H30.11.18	葉山館 講堂	自由参加	24名
	「堀内正和展 おもしろ楽しい心と形」講演会 ※図3	「堀内正和と辻晋堂」	尾崎信一郎(鳥取県立博物館 副館長)	H31.2.24	葉山館 講堂	先着順	30名
オンライントーク	「ブルーノ・ムナリー こどもの心をもちつづけるということ」オープニング・トーク	「ブルーノ・ムナリー」展を記念したトーク	アルベルト・ムナリー(ジュネーブ大学名誉教授・ブルーノ・ムナリー子息)	H30.4.7	葉山館 講堂	先着順	86名
ゲスト	「アルヴァ・アアルト—もうひとつの自然」ゲスト・トーク	「アルヴァ・アアルト」展を記念したトーク	和田菜穂子(建築史家)	H30.11.10	葉山館 展示室	自由参加	48名
ワークショップ	「ブルーノ・ムナリー こどもの心をもちつづけるということ」毎週土曜日はムナリーの遊具で遊ぼう	ムナリーがデザインした子ども向けの遊具に触れるプログラム	高原茉莉奈、吉田有瑠子	H30.4.14	葉山館 エントランス	自由参加	20名/40名
	「ブルーノ・ムナリー こどもの心をもちつづけるということ」毎週土曜日はムナリーの遊具で遊ぼう	ムナリーがデザインした子ども向けの遊具に触れるプログラム	鈴木敬子、八木めぐみ	H30.4.21	葉山館 エントランス	自由参加	28名/39名
	「ブルーノ・ムナリー こどもの心をもちつづけるということ」毎週土曜日はムナリーの遊具で遊ぼう	ムナリーがデザインした子ども向けの遊具に触れるプログラム	高原茉莉奈、吉田有瑠子	H30.4.28	葉山館 エントランス	自由参加	53名/39名
	「ブルーノ・ムナリー こどもの心をもちつづけるということ」毎週土曜日はムナリーの遊具で遊ぼう	ムナリーがデザインした子ども向けの遊具に触れるプログラム	鈴木敬子、八木めぐみ	H30.5.5	葉山館 エントランス	自由参加	109名/109名
	「ブルーノ・ムナリー こどもの心をもちつづけるということ」毎週土曜日はムナリーの遊具で遊ぼう	ムナリーがデザインした子ども向けの遊具に触れるプログラム	高原茉莉奈、吉田有瑠子	H30.5.12	葉山館 エントランス	自由参加	54名/57名
	「ブルーノ・ムナリー こどもの心をもちつづけるということ」毎週土曜日はムナリーの遊具で遊ぼう	ムナリーがデザインした子ども向けの遊具に触れるプログラム	鈴木敬子、八木めぐみ	H30.5.19	葉山館 エントランス	自由参加	56名/80名
	「ブルーノ・ムナリー こどもの心をもちつづけるということ」毎週土曜日はムナリーの遊具で遊ぼう	ムナリーがデザインした子ども向けの遊具に触れるプログラム	高原茉莉奈、吉田有瑠子	H30.5.26	葉山館 エントランス	自由参加	50名/125名
	「ブルーノ・ムナリー こどもの心をもちつづけるということ」毎週土曜日はムナリーの遊具で遊ぼう	ムナリーがデザインした子ども向けの遊具に触れるプログラム	鈴木敬子、八木めぐみ	H30.6.2	葉山館 エントランス	自由参加	83名/107名
	「ブルーノ・ムナリー こどもの心をもちつづけるということ」毎週土曜日はムナリーの遊具で遊ぼう	ムナリーがデザインした子ども向けの遊具に触れるプログラム	高原茉莉奈、吉田有瑠子	H30.6.9	葉山館 エントランス	自由参加	161名/147名
	「国立民族学博物館コレクション 貝の道」海の生き物を観察しよう	葉山しおさい博物館とのコラボ企画	倉持卓司(葉山しおさい博物館)	H30.7.1	一色海岸	自由参加	69名
	「国立民族学博物館コレクション 貝の道」日本画ワークショップ「貝を描く、貝で描く」 ※図4	「貝」をテーマにした日本画の創作系プログラム	内田あぐり(日本画家、武蔵野美術大学教授)	H30.7.7	葉山館 講堂	事前申込制	21名
	「国立民族学博物館コレクション 貝の道」夏のたね'18 オリジナルトートバッグ	トートバッグに貝がら模様のスタンプを押す造形ワークショップ	高嶋雄一郎、八木めぐみ、吉田有瑠子	H30.7.21~8.24	葉山館 エントランス	自由参加	1,114名
	「国立民族学博物館コレクション 貝の道」貝の化石や生きた貝を顕微鏡で観察してスケッチしよう	葉山しおさい博物館とのコラボ企画	倉持卓司(葉山しおさい博物館)	H30.8.5	葉山館 講堂他	事前申込制	12名
	「国立民族学博物館コレクション 貝の道」子ども向けワークショップ	貝がらスタンプを使った造形ワークショップ	高嶋雄一郎、八木めぐみ	H30.8.11	葉山館 エントランス	自由参加	17名
	「国立民族学博物館コレクション 貝の道」子ども向けワークショップ	貝がらスタンプを使った造形ワークショップ	高嶋雄一郎、八木めぐみ	H30.8.12	葉山館 エントランス	自由参加	17名
	「アルヴァ・アアルト—もうひとつの自然」自分だけのアアルト ルームをつくろう	ハガキにアアルトの家具のシールを貼ってインテリアをデザインするプログラム	実施担当: 靄山昌夫 協力: アルテック株式会社	H30.9.2~11.25 (11.3を除く)	葉山館 展示室	自由参加	3,200名
	「描かれた建物」「高い建物」をつくろう	「描かれた建物」展にちなんで「高い建物」をつくる創作ワークショップ	八木めぐみ、吉田有瑠子	H30.10.19	葉山館 講堂	事前申込制	52名
	「堀内正和展 おもしろ楽しい心と形」曲線で折る 立体折り紙体験	「堀内正和展」にちなんで立体折り紙のワークショップ	三谷 純(筑波大学大学院教授)	H31.1.27	葉山館 講堂	事前申込制	18名
	「堀内正和展 おもしろ楽しい心と形」造形ワークショップ「○と□」	「堀内正和展」にちなんで丸と四角の紙を組み合わせて形をつくるワークショップ	鈴木敬子、八木めぐみ、吉田有瑠子	H31.3.16, 3.17, 3.23, 3.24	葉山館 エントランス	自由参加	122名
	造形ワークショップ	「ポータブル・アート・ミュージアム」を使った創作系プログラム	八木めぐみ、吉田有瑠子	H30.7.31	葉山館 講堂	事前申込制	11名
ギャラリートーク	「ブルーノ・ムナリー こどもの心をもちつづけるということ」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	高嶋雄一郎	H30.4.8	葉山館 展示室	自由参加	45名
	「ブルーノ・ムナリー こどもの心をもちつづけるということ」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	高嶋雄一郎	H30.4.8	葉山館 展示室	団体来館	21名 (都内高等学校)
	「ブルーノ・ムナリー こどもの心をもちつづけるということ」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	高嶋雄一郎	H30.4.10	葉山館 展示室	団体来館	39名 (一般団体)

事業名	事業内容			事業実績			
	テーマまたは内容	講師等	実施日	実施場所	参加方法等	受講人数	
ギャラリートーク	「ブルーノ・ムナリー こどもの心をもちつづけるということ」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	高嶋雄一郎	H30.4.17	葉山館 展示室	団体来館	10名 (一般団体)
	「ブルーノ・ムナリー こどもの心をもちつづけるということ」担当学芸員による子ども向けギャラリートーク	学芸員による作品解説	高嶋雄一郎	H30.4.28	葉山館 展示室	自由参加	30名
	「ブルーノ・ムナリー こどもの心をもちつづけるということ」担当学芸員による子ども向けギャラリートーク	学芸員による作品解説	高嶋雄一郎	H30.5.12	葉山館 展示室	自由参加	18名
	「ブルーノ・ムナリー こどもの心をもちつづけるということ」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	高嶋雄一郎	H30.5.13	葉山館 展示室	団体来館	25名 (横浜市内 中学校)
	「ブルーノ・ムナリー こどもの心をもちつづけるということ」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	高嶋雄一郎	H30.5.19	葉山館 展示室	自由参加	30名
	「ブルーノ・ムナリー こどもの心をもちつづけるということ」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	高嶋雄一郎	H30.6.8	葉山館 展示室	団体来館	9名 (藤沢市内 高等学校)
	コレクション展「抽象の悦び」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	橋 秀文	H30.4.8	葉山館 展示室	自由参加	18名
	コレクション展「抽象の悦び」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	橋 秀文	H30.4.17	葉山館 展示室	団体来館	10名 (一般団体)
	コレクション展「抽象の悦び」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	橋 秀文	H30.5.19	葉山館 展示室	自由参加	13名
	「国立民族学博物館コレクション 貝の道」& コレクション展「絵ってとまっているのかな？」館長トーク	館長による開催展覧会解説	水沢 勉	H30.6.23	葉山館 展示室	自由参加	11名
	「国立民族学博物館コレクション 貝の道」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	朝木由香、土居由美	H30.7.1	葉山館 展示室	団体来館	60名 (都内大学)
	「国立民族学博物館コレクション 貝の道」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	朝木由香、土居由美	H30.7.5	葉山館 展示室	団体来館	81名 (葉山町内小学校)
	「国立民族学博物館コレクション 貝の道」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	朝木由香	H30.7.13	葉山館 展示室	団体来館	8名 (一般団体)
	「国立民族学博物館コレクション 貝の道」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	朝木由香	H30.7.14	葉山館 展示室	自由参加	12名
	「国立民族学博物館コレクション 貝の道」担当学芸員による子ども向けギャラリートーク	学芸員による作品解説	土居由美	H30.8.24	葉山館 展示室	自由参加	11名
	「国立民族学博物館コレクション 貝の道」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	朝木由香	H30.8.31	葉山館 展示室	団体来館	11名 (県内教育施設)
	「国立民族学博物館コレクション 貝の道」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	朝木由香	H30.9.1	葉山館 展示室	自由参加	23名
	「国立民族学博物館コレクション 貝の道」近代美術館と葉山しおさい博物館の2館をめぐるギャラリーツアー	葉山しおさい博物館とのコラボレーション企画	倉持卓司(葉山しおさい博物館学芸員)、朝木由香、土居由美	H30.6.24	葉山館 展示室、葉山しおさい博物館	自由参加	15名
	「国立民族学博物館コレクション 貝の道」近代美術館と葉山しおさい博物館の2館をめぐるギャラリーツアー	葉山しおさい博物館とのコラボレーション企画	倉持卓司(葉山しおさい博物館学芸員)、朝木由香、土居由美	H30.8.18	葉山館 展示室、葉山しおさい博物館	自由参加	9名
	コレクション展「絵ってとまっているのかな？」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	三本松倫代	H30.7.22	葉山館 展示室	自由参加	6名
	コレクション展「絵ってとまっているのかな？」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	三本松倫代	H30.8.19	葉山館 展示室	自由参加	12名
	「アルヴァ・アアルト—もうひとつの自然」& コレクション展「描かれた「建物」」館長トーク	館長による開催展覧会解説	水沢 勉	H30.9.15	葉山館 展示室	自由参加	34名
	「アルヴァ・アアルト—もうひとつの自然」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	梶山昌夫	H30.9.19	葉山館 展示室	団体来館	45名 (一般団体)
	「アルヴァ・アアルト—もうひとつの自然」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	梶山昌夫	H30.9.29	葉山館 展示室	自由参加	42名
	「アルヴァ・アアルト—もうひとつの自然」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	梶山昌夫	H30.10.2	葉山館 展示室	団体来館	9名 (一般団体)
	「アルヴァ・アアルト—もうひとつの自然」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	梶山昌夫	H30.10.13	葉山館 講堂	自由参加	37名
	「アルヴァ・アアルト—もうひとつの自然」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	高嶋雄一郎	H30.10.20	葉山館 展示室	団体来館	33名 (横浜市内大学)
	「アルヴァ・アアルト—もうひとつの自然」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	梶山昌夫	H30.10.27	葉山館 講堂	自由参加	44名
	「アルヴァ・アアルト—もうひとつの自然」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	梶山昌夫	H30.11.8	葉山館 展示室	団体来館	12名 (一般団体)
	「アルヴァ・アアルト—もうひとつの自然」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	梶山昌夫	H30.11.13	葉山館 展示室	団体来館	6名 (一般団体)
コレクション展「描かれた「建物」」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	西澤晴美	H30.9.29	葉山館 展示室	自由参加	8名	
コレクション展「描かれた「建物」」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	西澤晴美	H30.10.13	葉山館 展示室	自由参加	6名	
コレクション展「描かれた「建物」」担当学芸員によるギャラリートーク *図5	学芸員による作品解説	西澤晴美	H30.10.27	葉山館 展示室	自由参加	12名	

事業名	事業内容				事業実績		
	テーマまたは内容	講師等	実施日	実施場所	参加方法等	受講人数	
ギャラリートーク	「堀内正和展 おもしろ楽しい心と形」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	長門佐季	H31.1.19	葉山館講堂	自由参加	20名
	「堀内正和展 おもしろ楽しい心と形」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	長門佐季	H31.2.9	葉山館講堂	自由参加	3名
	「堀内正和展 おもしろ楽しい心と形」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	長門佐季	H31.3.9	葉山館講堂	自由参加	20名
	コレクション展「モダンなフォルム」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	三本松倫代	H31.1.19	葉山館展示室	自由参加	16名
	コレクション展「モダンなフォルム」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	三本松倫代	H31.2.2	葉山館展示室	自由参加	9名
	コレクション展「モダンなフォルム」担当学芸員によるギャラリートーク	学芸員による作品解説	三本松倫代	H31.3.2	葉山館展示室	自由参加	3名
県立社会教育施設公開講座	県立社会教育施設活用講座「連続講演会・明治150年を超えて」/第1回	「岐路に立ったモダニスト 久米民十郎をめぐって」	五十殿利治(筑波大学特命教授、独立行政法人国立美術館理事)	H30.11.24	鎌倉商工会議所会館	事前申込制	18名
	県立社会教育施設活用講座「連続講演会・明治150年を超えて」/第2回	「戦争と画家の身体―浜田知明を中心に」	小沢節子(日本近現代史研究者)	H30.12.8	鎌倉商工会議所会館	事前申込制	19名
	県立社会教育施設活用講座「連続講演会・明治150年を超えて」/第3回 *図6	「江戸から明治へー芳崖・由一・天心テーマに口演す」	河野元昭(静嘉堂文庫美術館長、東京大学名誉教授)	H30.12.22	鎌倉商工会議所会館	事前申込制	19名
	県立社会教育施設活用講座「連続講演会・明治150年を超えて」/第4回	「近代を逸脱する建築―宗教・慰霊施設や伊東忠太を例に」	五十嵐太郎(建築史・建築批評家、東北大学大学院教授)	H31.1.12	鎌倉商工会議所会館	事前申込制	23名
	県立社会教育施設活用講座「連続講演会・明治150年を超えて」/第5回	「芸術・音楽の終焉」	三輪眞弘(作曲家、情報科学芸術大学院大学(IAMAS)教授)	H31.1.26	鎌倉商工会議所会館	事前申込制	15名
先生のための特別鑑賞の時間	先生のための特別鑑賞の時間/第1回鑑賞編	「ブルーノ・ムナーリ」展鑑賞、担当学芸員による解説、意見交換等	高嶋雄一郎、八木めぐみ	H30.5.19	葉山館	事前申込制	25名
	先生のための特別鑑賞の時間/第2回鑑賞編	コレクション展「抽象の喜び」鑑賞、担当学芸員による解説、意見交換等	橋 秀文、八木めぐみ	H30.6.2	葉山館	事前申込制	11名
	先生のための特別鑑賞の時間/第3回鑑賞編	コレクション展「絵ってとまっているのかな？」鑑賞、担当学芸員による解説、意見交換等	三本松倫代、吉田有瑠子	H30.6.23	葉山館	事前申込制	10名
	先生のための特別鑑賞の時間/第4回鑑賞編	「貝の道」展鑑賞、担当学芸員による解説、意見交換等	朝木由香、土居由美、八木めぐみ	H30.7.14	葉山館	事前申込制	8名
	先生のための特別鑑賞の時間/第5回特別編「野外彫刻を使った鑑賞プログラム」 *図7	野外彫刻などを活用した様々な鑑賞プログラム	高嶋雄一郎、八木めぐみ	H30.9.22	葉山館	事前申込制	4名
	先生のための特別鑑賞の時間/第6回鑑賞編	「アルヴァ・アアルト」展鑑賞、担当学芸員による解説、意見交換等	棚山昌夫、吉田有瑠子	H30.10.13	葉山館	事前申込制	16名
	先生のための特別鑑賞の時間/第7回鑑賞編	コレクション展「描かれた「建物」」鑑賞、担当学芸員による解説、意見交換等	西澤晴美、吉田有瑠子	H30.11.10	葉山館	事前申込制	5名
	先生のための特別鑑賞の時間/第8回特別編「美術作品をどのように見て、語り、評するか？」	第58回神奈川県女流美術展鑑賞と作品評価・意見交換等	棚山昌夫、八木めぐみ	H30.12.1	横浜市民ギャラリー	事前申込制	12名
	先生のための特別鑑賞の時間/第9回鑑賞編「堀内正和展 おもしろ楽しい心と形」	展覧会鑑賞、担当学芸員による解説、意見交換等	長門佐季、吉田有瑠子	H31.2.2	葉山館	事前申込制	10名
	先生のための特別鑑賞の時間/第10回鑑賞編 コレクション展「モダンなフォルム」	展覧会鑑賞、担当学芸員による解説、意見交換等	三本松倫代、八木めぐみ	H31.2.23	葉山館	事前申込制	6名
葉山美術講座	葉山美術講座/第1回	「木下奎太郎と〈パンの会〉を中心に」	橋 秀文	H30.6.6	葉山館講堂	先着順	14名
	葉山美術講座/第2回	「木下奎太郎の〈百花譜〉が生まれるまで」	橋 秀文	H30.6.27	葉山館講堂	先着順	16名
	葉山美術講座/第3回	「村山知義のドイツ(1)」	三本松倫代	H30.8.8	葉山館講堂	先着順	14名
	葉山美術講座/第4回	「村山知義のドイツ(2)」	三本松倫代	H30.8.15	葉山館講堂	先着順	30名
	葉山美術講座/第5回	「舞台美術家・朝倉拱の絵画(1)」	西澤晴美	H30.10.3	葉山館講堂	先着順	25名
	葉山美術講座/第6回	「舞台美術家・朝倉拱の絵画(2)」	西澤晴美	H30.10.17	葉山館講堂	先着順	21名
	葉山美術講座/第7回	「古賀春江(1)」	長門佐季	H30.12.12	葉山館講堂	先着順	19名
	葉山美術講座/第8回	「古賀春江(2)」	長門佐季	H30.12.19	葉山館講堂	先着順	16名
	葉山美術講座/第9回	「劉生の父、岸田吟香(1)」	高嶋雄一郎	H31.2.6	葉山館講堂	先着順	17名
	葉山美術講座/第10回	「劉生の父、岸田吟香(2)」	高嶋雄一郎	H31.2.20	葉山館講堂	先着順	14名
地域連携	ミュージアム・トリップ(鎌倉市立第一中学校連携授業)事前学習	オリエンテーション及び展覧会見学	三本松倫代、鈴木敬子	H30.5.23	鎌倉市立第一中学校		14名
	ミュージアム・トリップ(鎌倉市立第一中学校連携授業)	展覧会鑑賞及び質疑応答	三本松倫代、鈴木敬子、高嶋雄一郎	H30.6.7	葉山館		14名
	ミュージアム・トリップ(鎌倉市立第一中学校連携授業)	展覧会鑑賞及び質疑応答	三本松倫代、鈴木敬子、朝木由香	H30.6.28	葉山館		12名
	ミュージアム・トリップ(鎌倉市立第一中学校連携授業)	展覧会鑑賞及び質疑応答	三本松倫代、鈴木敬子	H30.9.6	鎌倉歴史文化交流館、鎌倉市鎌木清方記念美術館、鎌倉市川喜多映画記念館		12名

事業名	事業内容				事業実績		
	テーマまたは内容	講師等	実施日	実施場所	参加方法等	受講人数	
地域連携	学校連携団体来館(横須賀市立中学校特別支援学級合同見学会)	展覧会鑑賞、ワークショップ	靱山昌夫、高原茉莉奈、鈴木敬子、八木めぐみ、吉田有璃子	H30.7.5	葉山館		19名 (横須賀市内中学校)
	遠足来館(県立鎌倉養護学校)	展覧会・野外彫刻鑑賞	鈴木敬子、吉田有璃子	H31.2.7	葉山館		7名
	ミュージアムめぐりスタンプラリー×鎌倉アート&カルチャーMAPコラボ企画 5館の学芸員によるトークセッション	「鎌倉市 市制 80 周年記念 1939 年とその時代」	三本松倫代、浪川幹夫(鎌倉歴史文化交流館学芸員)、今西彩子(鎌倉市鶴木清方記念美術館学芸員)、阿部久瑠美(鎌倉市川喜多映画記念館学芸員)、金子智哉(鎌倉国宝館学芸員)	H31.3.2	鎌倉歴史文化交流館	事前申込制	47名
地域連携(葉山町)	近代美術館入門講座(葉山町共催連続講座)／第1回	「コレクション展「抽象の悦び」について」	橋 秀文	H30.4.14	葉山町福祉文化会館	自由参加	25名
	近代美術館入門講座(葉山町共催連続講座)／第2回	「役に立たない「ブルーノ・ムナリー講座」	高嶋雄一郎	H30.4.21	葉山町福祉文化会館	自由参加	32名
	近代美術館入門講座(葉山町共催連続講座)／第3回	「貝でつなぐ 美術館と博物館」	朝木由香	H30.6.30	葉山町福祉文化会館	自由参加	30名
	近代美術館入門講座(葉山町共催連続講座)／第4回	「アルヴァ・アアルトの建築と家具デザイン」	靱山昌夫	H30.9.29	葉山町福祉文化会館	自由参加	49名
	近代美術館入門講座(葉山町共催連続講座)／第5回 *図8	「堀内正和のおもしろ楽しさ」	長門佐季	H30.12.15	葉山町福祉文化会館	自由参加	29名
	近代美術館入門講座(葉山町共催連続講座)／第6回	「コレクション展「モダンなフォルム」	三本松倫代	H31.1.26	葉山町福祉文化会館	自由参加	18名
出張授業	逗子市立久木中学校	美術館の概要紹介、「Museum Box 宝箱」を使ったワークショップ	三本松倫代、鈴木敬子、吉田有璃子	H30.6.12	久木中学校	授業数4	132名
	逗子市立逗子中学校	美術館の概要紹介	三本松倫代、鈴木敬子、吉田有璃子	H30.7.3	逗子中学校	授業数2	115名
	横浜市立瀬ヶ崎小学校	「堀内正和展」にちなんだ丸と四角の紙を組み合わせて形をつくるワークショップ	鈴木敬子、吉田有璃子、八木めぐみ、芦刈 歩	H30.12.11～12.13	瀬ヶ崎小学校	授業数8	245名
	県立鎌倉養護学校	来館に向けた事前授業	鈴木敬子、吉田有璃子、八木めぐみ、芦刈 歩	H31.1.17	県立鎌倉養護学校	授業数1	14名
むすんでつなぐプロジェクト (インクルーシブ事業)	造形ワークショップ	「ポータブル・アート・ミュージアム」を使った創作系プログラム	靱山昌夫、鈴木敬子、吉田有璃子	H30.8.21	ハッピーテラス衣笠教室		12名
	造形ワークショップ *図9	「ポータブル・アート・ミュージアム」を使った創作系プログラム	高嶋雄一郎、高原茉莉奈、八木めぐみ	H30.8.23	ハッピーテラス衣笠教室		14名
	写真ワークショップ	「あなたとポートレート～あなたらしく、わたしらしく～」	鈴木建男(写真家)	H31.2.16	葉山館講堂	事前申込制	18名
公益財団法人かながわ国際交流財団連携事業 「社会参加の教育実践事業」(MELP)	親子で楽しむ「ブルーノ・ムナリー展」外国にルーツを持つ子供たちとの交流 *図10	「ポータブル・アート・ミュージアム」を使った創作系プログラム	靱山昌夫、三本松倫代、高嶋雄一郎、鈴木敬子、八木めぐみ	H30.6.3	葉山館講堂	事前申込制	22名
	講演会 *図11	「美術がもたらす『心』への作用」	川畑秀明(慶應大学文学部准教授)	H30.11.17	葉山館講堂	事前申込制	27名
	写真ワークショップ「多文化コース・フォトセッション in 三浦半島」	「外国につながる若者たちの写真撮影による交流」	大藪順子(フォト・ジャーナリスト)	H31.3.3	葉山館講堂	事前申込制	26名
実習・研修等受入	博物館学芸員実習	計7日間／4大学(県内・県外・都内)	三本松倫代	H30.8.14～9.5	葉山館		4名 (延べ24名)
	インターン研修	(1)計24日間／1大学(横浜市内)	長門佐季	H30.7.20～H31.1.12	葉山館		1名 (延べ24名)
		(2)計20日間／1大学(千葉市内)	高嶋雄一郎	H30.9.5～H31.3.22	葉山館		1名 (延べ20名)
	高校生インターンシップ	計4日間／4校(県内)の受入	高原茉莉奈	H30.7.24～7.27	葉山館		6名 (延べ16名)
	中学生職業体験	計6日間／5校(葉山町内、横須賀市内、逗子市内)の受入	八木めぐみ、吉田有璃子	H30.11.8～11.22	葉山館		17名 (延べ25名)
	教員研修	1日／教育施設から教員の受入	高嶋雄一郎	H30.7.24	葉山館		21名
他館学芸員の研修	計4日間／県内美術館から学芸員の受入	三本松倫代	H30.8.14～8.17	葉山館		3名 (延べ12名)	
受講人数総数							8,669名



図1.「ブルーノ・ムナーリ こどもの心をもちつづけるということ」展
記念講演会「ブルーノ・ムナーリ—ひたすらに造形の言葉を求めて」
講師:岩崎 清
日時:5月5日(土・祝) 午後2時~3時30分
場所:葉山館 講堂



図2.「国立民族学博物館コレクション 貝の道」展
講演会「タカラガイと貝の道」
講師:池谷和信
日時:8月4日(土) 午後2時~3時30分
場所:葉山館 講堂



図3.「堀内正和展 おもしろ楽しい心と形」
講演会「堀内正和と辻普堂」
講師:尾崎信一郎
日時:2019年2月24日(日) 午後2時~3時30分
場所:葉山館 講堂



図4.「国立民族学博物館コレクション 貝の道」展
日本画ワークショップ「貝を描く、貝で描く」
講師:内田あぐり
日時:7月7日(土) 午後2時~4時30分
場所:葉山館 講堂



図5.コレクション展「描かれた「建物」」
担当学芸員によるギャラリートーク
日時:10月27日(土) 午後2時~2時30分
場所:葉山館 展示室



図6.県立社会教育施設公開講座 第3回
「江戸から明治へ—芳崖・由一・天心テーマに口演す」
講師:河野元昭
日時:12月22日(土) 午後1時30分~3時30分
場所:鎌倉商工会議所会館 ホール



図7. 先生のための特別鑑賞の時間 第5回
特別編「野外彫刻を使った鑑賞プログラム」
日時:9月22日(土) 午前10時-12時30分
場所:葉山館 講堂



図8. 近代美術館入門講座(葉山町共催)
「堀内正和のおもしろしさ」
日時:12月15日(土) 午前10時-11時
場所:葉山町福祉文化会館 大会議室



図9. むすんでひらいてプロジェクト(インクルーシブ事業)
造形ワークショップ「ポータブル・アート・ミュージアム」
日時:8月23日(木) 午後3時-5時
場所:ハッピーテラス衣笠教室



図10. かながわ国際交流財団連携事業(MULPA)
ワークショップ「親子で楽しむブルーノ・ムナーリ展」
日時:6月3日(日) 午前12時-午後3時
場所:葉山館 講堂



図11. かながわ国際交流財団連携事業(MULPA)
講演会「美術がもたらす『心』への作用」
講師:川畑秀明
日時:11月17日(土) 午後2時-3時45分
場所:葉山館 講堂

「Museum Box 宝箱」貸出

内容	件数等
貸出総個数	88個
貸出先	12校
貸出回数	延べ12回
利用総人数	858名
内訳概要	小学校：7校／延べ7回
	中学校：1校／延べ1回
	高校：1校／延べ1回
	大学：3校／延べ3回
地域	横浜市5ヶ所、葉山町2ヶ所、鎌倉市1ヶ所、逗子市1ヶ所、横須賀市2ヶ所、東京都1ヶ所

団体来館受入状況^{〔註〕}

団体種別	件数等
教育機関等	幼稚園：3園／延べ4回136名
	小学校：2校／延べ2回137名
	中学校：6校／延べ6回105名
	高校：6校／延べ6回110名
	大学：6校／延べ6回345名
	特別支援学級等：3校／延べ3回55名
一般	地方公共団体*2・生涯学習センター等の団体：5団体／延べ5回177名
	病院・福祉団体：2団体／延べ2回33名
	芸術家協会等の団体：3団体／延べ3回89名
	他美術館からの団体：1団体／延べ1回45名
	旅行会社・観光等の団体：5団体／延べ8回177名
	その他団体：8団体／延べ8回216名

〔註〕

- このデータは事前申込による団体来館受入数に限る。
- 外郭団体を含む。
- 4月8日、10日、17日、5月13日、6月8日、7月1日、5日、13日、8月31日、9月19日、10月2日、20日、11月8日、13日の団体来館受入時には、学芸員がギャラリートークを行った。
- 7月31日、10月19日の団体来館受入時には、ワークショップを実施した（3.4.については「教育普及事業実績一覧」pp.17-20参照）。

視察受入状況

年	月日	来館者	人数	視察場所
2018年 (平成30年)	11月1日(木)	甲斐市議会	28人	葉山館
	11月16日(金)	草津町	40人	葉山館
	11月20日(火)	座間市教育委員会	10人	葉山館
2019年 (平成31年)	2月17日(日)	教育自然学研究会	20人	葉山館

美術図書室

藤代知子

1) 資料の収集・整理

- ・蔵書数(システム登録 2019年3月末現在) 95,374冊
- ・2018年度新規図書・AV・図録登録数 4,007冊

2) システム環境整備

- ・蔵書検索システムを WebiLis V3 へ更新
- ・美術図書館連絡会の美術図書館横断検索サイトリニューアルにともなう OPAC と横断検索の調整

3) 特別コレクション

- ・青木茂文庫の登録・整理

4) 閲覧サービス

- ・年間入室者数 6,577名(開館日1日平均24名)
- ・年間複写枚数 1,613枚(開館日1日平均6枚)
- ・年間レファレンス受付件数 166件
- ・入室者状況

美術図書室の利用では、展覧会別で「アルヴァ・アアルト—もうひとつの自然/コレクション展「描かれた「建物」」が1日平均33名、「ブルーノ・ムナーリ こどもの心をもちつづけるということ/コレクション展 抽象の悦び」が1日平均32名と多かった。

展覧会観覧者数に対する美術図書室入室者数の比率は「国立民族学博物館コレクション 貝の道/コレクション展 絵ってとまっているのかな?」が16.4%と最も高かった。

- ・レファレンス状況

レファレンス受付件数では、「国立民族学博物館コレクション 貝の道/コレクション展 絵ってとまっているのかな?」開催期間中が最も多く、計63件であった。

当年度のレファレンスとして、「箱根をテーマとした絵画の調べ方」「井上長三郎の資料」「《石人》が所蔵された経緯」「葉山の別荘についての資料」「瀟湘八景を描いた画家は誰か」「鈴木竹柏の資料」「内田巖《トランプ》が掲載されている資料」「ベン・ニコルソンの資料」「若林砂絵子の資料」「山口蓬春の戦争画が掲載されている資料」などがあつた。

5) 展覧会関連資料の展示

美術図書室では、展覧会関連資料を「特集コーナー」としてわかりやすくまとめ、来室者が手にとって閲覧できるようにしている。展覧会を見る前や後に、作家や作品の情報を得たり、更に知りたい内容を深めたりできると、来室者に好評を博している。

- ・「ブルーノ・ムナーリ こどもの心をもちつづけるということ」ムナーリの著書、絵本、ことばを紹介する資料を中心に展示した。なかでも、須賀敦子訳『太陽をかこう』(至光社、2002)、谷川俊太郎訳『きりのなかのサーカス』(フレーベル館、2009)、藤本和子訳『闇の夜に』(河出書房新社、2017)といった絵本は、こどもから大人まで幅広い年代が手に取って読む姿がみられた。そのほか、著書の阿部雅世訳『ムナーリのことば』(平凡社、2009)、個展カタログの『ブルーノ・ムナーリ展』(こどもの城、

1985)など計23冊を展示した。

- ・「コレクション展 抽象の悦び」

抽象絵画を広く紹介する資料と、出品作家作品集の2種類を展示した。

前者は、板橋区立美術館 [ほか] 編『日本の抽象絵画 1910-1945』(読売新聞社 / 美術館連絡協議会、1992)、菌部雄作『抽象絵画の世界 その限界と可能性』(六花社、2006)などを展示し、後者は、村井正誠作品集刊行委員会編『村井正誠作品集』(美術出版社、1974)、菅井汲 [画]、ジャン＝クラランス・ランペール文、永盛克也訳『菅井汲』(リプロポート、1991)、窪島誠一郎『天折画家ノオト 20世紀日本の若き芸術家たち』(アーツアンドクラフツ、2012)など計11冊を展示した。

- ・「国立民族学博物館コレクション 貝の道」

隣接する葉山しおさい博物館との連携をふまえ、相模湾の貝類を紹介する池田等 / 倉持卓司『海洋生物図鑑 2貝類 葉山・芝崎ナチュラルリザーブ』(葉山しおさい博物館、2005)、『相模湾の貝類』(葉山しおさい博物館、2010)や、貝のなかでも今回の展示で注目したタカラガイをテーマとした上田信『貨幣の条件 タカラガイの文明史』(筑摩書房、2016)、貝とそれを集める人々をとりあげた石本君代 / 奥谷喬司執筆『ニッポン貝人列伝 時代をつくった貝コレクション』(LIXIL出版、2017)、さまざまな貝と貝細工が紹介されている資料、H. スティックス [ほか] 著、奥谷喬司訳『貝 その文化と美』(朝倉書店、1980)など計23冊を展示した。

- ・「コレクション展 絵ってとまっているのかな?」

出品作家の作品集である *Lee Ufan: Gemälde, 1973 bis 2001*, Kunstmuseum Bonn, 2001、相模原市民ギャラリー編『上田薫展 自然その一瞬の輝き』(相模原市教育委員会、2003)、宮城県美術館 / ミモカ美術振興財団編『花人中川幸夫の写真・ガラス・書 いのちのかたち』(求龍堂、2006)、高橋信行著『Takahashi Nobuyuki』(grambooks、2007)、群馬県立館林美術館 / 神奈川県立近代美術館編『鶴岡政男展 生誕100年』(東京新聞、2007)など計16冊を展示した。

- ・「アルヴァ・アアルト—もうひとつの自然」

アアルトを主題とした資料、SD 編集部編『アルヴァ・アアルト 現代の建築家』(鹿島出版会、1978)、セゾン美術館 / デルファイ研究所編『アルヴァー・アアルト 1898-1976 20世紀モダニズムの人間主義』(デルファイ研究所、1998)、小泉隆文写真『アルヴァ・アアルトの建築 エレメント&ディテール』(学芸出版社、2018)、鈴木敏彦ほか『アアルトからはじめるデザイン基礎 北欧の巨匠に学ぶ図法』(彰国社、2018)をはじめとして、フィンランドを広く紹介する資料、アスコ・サロコルピ著、向後英一訳『現代フィンランド建築』(コガ形象社、1972)など計19冊を展示した。

- ・「コレクション展「描かれた「建物」」

出品作家資料である神奈川県立近代美術館編『山本正道 今日作家たちIV '92』(神奈川県立近代美術館、1992)、神奈川県立近代美術館編『シルヴィア・ミニオ＝パルウエルロ・保田 遺作展「空の明るさ」』(神奈川県立近代美術館、2004)、東京国立近代美術館 / 宮城県美術館 / 広島県立美術館編『燦光展 生誕100年』(毎日新聞社、2007)、石橋財団石橋美術館 / 神奈川県立近代美術館編『古賀春江の全貌 新しい神話のはじまる。』(東京新聞、2010)、『五姓田義松 最後の天才 没後100年』(神奈川県立歴史博物館、2015)など計15冊を展示した。

・「堀内正和展 おもしろ楽しい心と形」

堀内の著書である『堀内正和展 マケット・彫刻』(『ギャラリー16』、1990)、『堀内正和の彫刻 増補新版』(河出書房新社、1995)、『ερηκη (ユーレーカ) 堀内正和作品資料集成』(美術出版社、1996) や、インタビュー記事掲載の雑誌『現代彫刻』40号(聖豊社、1980.6)をはじめ、酒井忠康『彫刻の庭 現代彫刻の世界』(小沢書店、1982)など計31冊を展示した。

また、展覧会会場では、2016年度に美術図書室へ寄贈された堀内正和文庫が紹介された。

・「コレクション展 モダンなフォルム」

出品作家資料である京都国立近代美術館編『里見勝蔵展 生誕100年記念 情熱の画家・フォーヴの旗手』(京都国立近代美術館 [ほか]、1995)、『ダンス! 20世紀初頭の美術と舞踊』(栃木県立美術館、2003)、アルプ美術館バーンホフ・ローランズエック [ほか] 編『ハンス・アルプ展』(東京新聞、2005)、パナソニック電気汐留ミュージアム編『建築家坂倉準三 モダニズムを住む 住宅・家具・デザイン』(アーキメディア、2009)、『石垣栄太郎展 生誕120年記念』(和歌山県立近代美術館、2013)など計18冊を展示した。

6) 明治150年 小展示

明治150年に関連した小展示を美術図書室で行った。

2018年4月7日から6月10日までは、雑誌『冒険世界』第3巻第1号附録より「小杉未醒《マラソン競走雙六》」を展示し、展示日数57日、計1,828名の来室者があった。

2018年6月23日から9月2日までは、「科学の貝 風刺の貝」をテーマとして、「小林清親《亜西亜の貝産物》」『團圓珍聞』第513号(国書刊行会、復刻版、1986)、池田等著、細谷角次郎絵『細谷角次郎貝類圖繪』(遠藤貝類博物館、2003)を展示し、展示日数63日、計1,450名の来室者があった。

2018年9月15日から11月25日までは、「明治の街燈 瓦斯燈、電気燈、石油燈など」をテーマとして、「小林清親《浅草蔵前夏夜》」『清親 光線画の向こうに』(町田市立国際版画美術館、2016)、岸田劉生「新古細句銀座通」東京日日新聞社編『大東京繁昌記』(中外書房、復刻版、1966)、北原白秋「公園の薄暮」『東京景物詩 及其他』(日本近代文学館、復刻版、1985)、『白秋全集3』(岩波書店、復刻版、1985)の挿絵《桐の花》、雑誌『方寸』第3巻第3号(三彩社、復刻版、1972)の倉田白羊《越中島》、雑誌『方寸』第4巻第2号(三彩社、復刻版、1973)の石井柏亭《瓦斯槽》を展示し、展示日数65日、計2,149名の来室者があった。

2018年12月8日から2019年3月24日までは、「明治期の図画教育と「用器画」教科書」をテーマとして、多賀章人『図法一斑』(西宮松之助、1881-1882)、大原鉦一郎『高等小学用器画 卷之一』(大日本図書、1893)、平瀬作五郎編『中等教育用器画法』(成美堂、1895)、井汲陸二郎『中等用器画法説明』(金港堂書籍、1898-1901)、小島憲之・川村孝『用器画教科書』(晩成処、1911-1912)を展示し、展示日数90日、計1,150名の来室者があった。

7) 広報普及

- ・2018年10月30日から11月1日まで開催された「第20回図書館総合展/アートミュージアム・アンヌアーレ2018」の展示企画「こんなにあります!あなたも使える専門図書館」に参加した。海外含む全国の専門図書館73館の一覧と紹介が掲

示されるブースで、美術図書室の紹介パネル展示・利用案内の設置を行った。

また、美術図書館連絡会としてブース出展し、加盟各館の紹介掲示・利用案内配布・横断検索の実演を通して普及活動につとめた。

美術館紹介・広報 掲載実績

1) 美術館紹介記事

齊藤大起「かながわの本 日本の初期モダニズム建築家 建物に宿る思想を描く」『神奈川新聞』2018年4月8日、5面「海沿いの高台に建つ美術館 神奈川県立近代美術館 葉山館 美術館に併設された絶景レストラン オランジュ・ブルー」『1Day プチハイク 首都圏発』2018年4月15日、pp.58, 60

「春の旅 第二弾はごはん、おみやげ付きの「葉山女子旅きっぷ」で逗子・葉山エリアを満喫 神奈川県立近代美術館 葉山」『産経新聞社 くらしの百科』通巻713巻、2018年4月15日、p.6

丸山ひかり「ニュースQ3 美術館はおしゃべりOK? 会話を歓迎する日を設ける主な美術館」『朝日新聞』2018年4月19日、37面

「皇室別邸集中の葉山 最初是有栖川宮家 御用邸創設きっかけに 高松宮家が継承、跡地は県立近代美術館」(撮影・外崎晃彦)『産経新聞』2018年4月30日、13面

藤森照信「極私的鎌倉建築歩き 私の鎌倉百景 番外編 風致地区にモダン建築、今だったら絶対に作れない 旧神奈川県立近代美術館鎌倉館本館」『ミセス』通巻762号、2018年5月7日、p.117

「美術館にいこう 空と海に突き抜けた絶景とアートが共存 神奈川県立近代美術館 葉山」『大人の週末』第16巻第7号、2018年7月1日、p.91

森田 睦「所蔵品貸し借り展示に利点 貸し手 作品活用、自館PR 借り手 新しい客層を開拓」『読売新聞』2018年7月12日、21面

「美智子さまの「愛と憩い」巡る涼旅へ 旧宮邸の風情を伝えて 神奈川県立近代美術館 葉山」『女性自身』第61巻第29号、2018年8月7日合併号、p.23

寛 ゆう「とっておきギャラリー/ミュージアム 神奈川県立近代美術館・葉山 海と山とモダンアートの交響曲」『織研新聞』2018年10月19日、p.11

杉全美帆子他「美を楽しむ 杉全美帆子と相棒記者出田のおとなのための美探訪 神奈川県立近代美術館 葉山 おもてなし感たっぷり」『東京新聞』2018年11月13日、15面

「今度ここ行こう! 神奈川県立近代美術館葉山」『SANSAN』第33巻第3号、2019年3月、p.7

2) 収蔵作品・作家ほか紹介記事

外崎晃彦「かながわ美の手帖 横須賀美術館「青山義雄展 きらめく航跡をたどる」マティスが認めた才 鮮やか色彩美の世界」『産経新聞』2018年3月18日、29面

「話題の展覧会 美術館「求道の画家 岸田劉生と椿貞雄」久留米市美術館」『美術の窓』No.435、2018年4月20日、p.152

平野甲賀「もじ転> その⑤ 村山知義のロマン」『なごみ』
通巻 461号、2018年5月1日、p.56
「私の10点 若江漢字」『ギャラリー』第397号、2018年5
月1日、pp.9-23
「展覧会 INFORMATION 久留米市美術館 求道の画家 岸
田劉生と椿貞雄 2018年4/7(土)～6/17(日)」『つくりびと』
Vol.71、2018年6月、p.15
白石知子「追悼 浜田知明さん 戦場経験人間の本質刻む
生と死の極限 版画・彫刻で」『読売新聞(福岡版)』2018年
7月21日、27面
土佐信道「追悼 山口勝弘 職人氣質を忘れるな」『美術手
帖』No.1068、2018年8月1日、pp.252-253
「特別展 闇に刻む光 アジアの木版画運動」『あじびニュー
ス』Vol.74、2018年10月1日、p.2
田中 淳「松本竣介没後70年・大川美術館開館30周年記念
松本竣介 アトリエの時間 アトリエで過ごした思索の時間に
思いをはせる」『新美術新聞』No.1484、2018年10月1日、p.2
小川 雪「1920年(大正9年) ダダイズム日本上陸 自由求
め常識疑う魂いまも」『朝日新聞』2018年9月19日、4面
「ミュージアム・ナビ 山口蓬春記念館」『神奈川新聞』2018
年11月2日、4面
李 美那「『日韓近代美術家のまなざし——『朝鮮』で描く』展
における『在朝鮮日本人美術家』をめぐって」『神奈川大学評論』
第91号、2018年11月30日、pp.100-108
「話題の展覧会より 闇に刻む光 アジアの木版画運動
1930s-2010s」『版画芸術』No.182、2018年12月1日、p.119
「美術館・博物館 神奈川県立近代美術館 葉山 「堀内正
和展 おもしろ楽しい心と形」」『東京新聞』2018年12月6日、
23面
窪田直子「『メディア』として社会映す 「闇に刻む光 アジアの
木版画運動 1930s-2010s」展」『日経新聞』2018年12月7日、
44面
「全国美術館 展覧会ダイジェスト 荘司福・荘司貴和子展(仮
称) 平塚市美術館」『美術の窓』No.444、2019年1月20日、
p.174
寺久保文宣「松本竣介没後70年記念特集「松本竣介と現代
を生きる画家たち」特集冒頭文「日本洋画の詩人、松本竣介」
『文化展望』第68号、2019年1月31日、p.37
会田誠「現代美術家・会田誠の死ぬまでにこの目で見たい日
本の絵 100 close up 3 ポートレート」『BRUTUS』No.863、
2019年2月1日、pp.84-85
太田治子「太田治子の湘南の名画から紡ぐストーリー 第
三十六回 ゾウの背中 古賀春江「サーカスの景」から」『か
まくら春秋』No.587、2019年3月1日、pp.48-49
笠 理砂「『昭和御大典繪巻』(神奈川県立近代美術館 山口
蓬春文庫蔵) その図様の注解と合作絵巻制作の背景につ
いて」『山口蓬春記念館研究紀要』第9号、2019年3月、
pp.11-35
大西若人「福沢一郎 批評の絵筆 大規模個展 東京で開催
中 戦前の逮捕・晩年には文化勲章/国家や社会見つめ続け」
『朝日新聞』2019年3月26日、4面
藤島俊会「平成プレーバック 美術館 平塚市美術館 荘司
福 荘司貴和子展 院展の巨匠 創画の新星」『神奈川新聞』
2019年3月30日、4-5面

3) ホームページ閲覧数(2018年4月～2019年3月)
ホームページ訪問者数 総数 735,824
参照ページ 総数 3,546,196
2018年7月25日更新公開で美術館公式ウェブサイトの
リニューアルを行った。

刊行物

1) SEEdS 夏のたね '18 チラシ

編集・発行：神奈川県立近代美術館
デザイン：川村格夫
印刷：株式会社 野毛印刷社
14.8×14.8cm、二つ折1枚、多色
無料配布
2018年7月発行



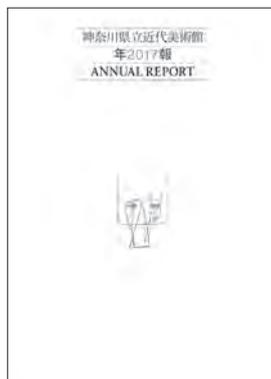
2) 美術館たより『たいせつな風景』27号

特集：葉山開館15周年記念号 葉山—今ここ
編集・発行：神奈川県立近代美術館
制作：朝日オフセット印刷株式会社
デザイン：飯村哲也デザイン事務所
20.9×14.5cm、12ページ、多色6図
無料配布
2018年10月発行
葉山での十五年(水沢 勉) / たいせつな風景(田中 浪) / カマクラから来たミュージー—神奈川県立近代美術館に捧ぐ(建島 哲) / 世界の美女襲来(谷川晃一) / 表紙作品解説 ホセイン・ゴルバ《愛の泉》(高嶋雄一郎)



3) 2017年度年報

編集・発行：神奈川県立近代美術館
印刷：有限会社リーヴル
29.7×21cm、68ページ、多色1図、単色147図
無料配布
2018年11月発行
あいさつ / 展覧会活動 / 教育普及活動 / 作品蒐集管理活動 / 調査研究活動 / 運営・管理報告



4) 美術館たより『たいせつな風景』28号

特集：松本竣介
編集・発行：神奈川県立近代美術館
制作：朝日オフセット印刷株式会社
デザイン：飯村哲也デザイン事務所、合田 彩
20.9×14.5cm、12ページ、多色1図、単色8図
無料配布
2019年3月発行
はじめに(水沢 勉) / 松本竣介と神奈川県立近代美術館(松本 莞) / 松本竣介 その魅力をさぐる(天童荒太) / 松本竣介と写真(甲斐義明) / 表紙作品解説《橋(東京駅裏)》(長門佐季)



5) 神奈川県立近代美術館アーカイブリーフレット

編集・発行：神奈川県立近代美術館
翻訳：小川紀久子
デザイン：三木俊一(文京図案室)
撮影：佐藤克秋
印刷：株式会社 野毛印刷社
21.0×14.8cm、8ページ、両開き観音折、多色6図
無料配布
2019年3月発行



神奈川県立近代美術館における専門講座、アウトリーチ事業、社会包摂事業の展開と成果

杉山昌夫

専門講座「葉山美術講座」

平成 29 年度に開始した学芸員による専門講座「葉山アート・アカデミー」が不定期開催であったのを改め、新たに「葉山美術講座」として偶数月の水曜日に講師となる学芸員が 2 回ずつ各々の研究分野について講義することとし、平成 30 年度は 6 月から平成 31 年 2 月まで 10 回開催して延べ 186 名が受講した(図 1)。8 回の開催で延べ 75 名が受講した前年度に比べると、1 回当たりの受講者数が倍増しており、これは定期開催と認知度の上昇によるものと考えられる。平成 31 / 令和元年度についても、平成 30 年度と同等のプログラムを組んでおり、「葉山美術講座」の定着と近隣住民に限らない受講者の参加を期待している。



図 1. 葉山美術講座第 5 回「舞台美術家・朝倉摂の絵画 (1)」
実施日:10月3日(水)
場所:葉山館 講堂

アウトリーチ事業「近代美術館入門講座」等

同様に平成 29 年度から葉山町との共催で開始した「近代美術館入門講座」は、同年度が 6 回の開催で延べ 154 名が受講したのに対して、平成 30 年度は 6 回の開催で延べ 183 名が受講し、葉山町に順調に根付きつつある。今後は県立の社会教育施設として、アウトリーチの幅を広げること検討している。

そのひとつの試みとして、平成 22 年度以来、美術館内で開催してきた「先生のための特別鑑賞の時間」の、平成 30 年 12 月開催の回を特別編「美術作品をどのように見て、語り、評するか?」として、神奈川県女流美術家協会と共催で、横浜市民ギャラリーにて開催中の第 58 回神奈川県女流展の会場にて実施した(図 2)。「先生のための特別鑑賞の時間」は本来、学校等の先生方に美術館で開催中の展覧会を学芸員の解説付きで鑑賞してもらい、鑑賞教育について意見交換をする機会を提供するものであるが、この特別編では、教育の場では必ずしも方向の一致しない「表現の多様性(個性)」と「評価」という課題を、展覧会出品者の前で参加者と議論した。その目論見には、作り手が受け取り手の反応を目の当たりにすることも含まれていた。このように、美術館の外で開催するだけでなく、その場で活動する人々への働きかけも試みたのである。



図 2. 「先生のための特別鑑賞の時間」第 8 回
特別編「美術作品をどのように見て、語り、評するか?」
実施日:12月1日(土)
場所:横浜市民ギャラリー

社会包摂事業「MULPA」「むすんでひらいてプロジェクト」等

公益財団法人かながわ国際交流財団が幹事となり、神奈川県立近代美術館、茅ヶ崎市美術館、平塚市美術館、横須賀美術館、相模湾・三浦半島アートリンクが参加して平成 28 年度から実施している社会包摂(インクルーシブ)事業「MULPA」に対して、平成 30 年度から当館独自の社会包摂事業を「むすんでひらいてプロジェクト」として整理することとした。

まず、神奈川県立近代美術館での MULPA の活動は、外国に繋がりを持つ青少年を対象としたふたつのワークショップを実施した。一方の「親子でたのしむ「ブルーノ・ムナーリ展」」は、異なる外国に繋がる——異なる社会グループの——外国人学校 2 校の生徒を招き、当館とデザイナーが開発した教材「ポータブル・アート・ミュージアム」を用いたグループワークを通して相互の理解を図るワークショップであった。もう一方の「多文化ユース・フォトセッション in 三浦半島」は、さまざまな外国に繋がる若者たちを招いて、写真撮影を通して交流してもらうワークショップで、参加者が撮影した写真を次年度に展示し、参加者の自己肯定感を高めることが目標である。その他、当館における MULPA 事業として、認知機能に対する美術の作用について専門家による講演会を開催した。

「むすんでひらいてプロジェクト」としては、横須賀市内の発達障がいを持つ児童生徒のための放課後等デイサービスに出向いて「ポータブル・アート・ミュージアム」を用いたワークショップを開催し、児童生徒、その保護者、指導員との信頼関係を築いた後に、美術館に招いてポートレート撮影のワークショップを実施した。このワークショップには、博物館学芸員実習生(大学生)等、博物館施設に関心をもつ青年にも参加してもらい、お互いに普段交渉する機会の少ない——異なる社会グループの——児童生徒と青年とがポートレートを撮り合うことで交流を深めた(図 3)。アートを通して異なる社会グループを繋ぐことが、「ともに生きる社会かながわ憲章」を踏まえた神奈川県立近代美術館の社会包摂事業の特色である。

同様に、地域連携のひとつとして団体来館として受け入れた「横須賀市立中学校特別支援級合同見学会」でも、事前調整を重ねて、博物館学芸員実習生も参加する「ポータブル・アート・ミュージアム」のワークショップを実施して、特別支援級生徒と大学生との相互理解を図った(図 4)。これを実現した普及課の特別支

援学級合同見学会ワークショップ・チームは、神奈川県教育委員会職員功績賞と神奈川県職員功績賞を受けた。



図3. むすんでひらいてプロジェクト
写真ワークショップ
「あなたとポートレート～あなたらしく、わたしらしく～」
実施日:2019年2月16日(土)
場所:葉山館 講堂



図4. 横須賀市立中学校特別支援級合同見学会
実施日:7月5日(木)
場所:葉山館 講堂

新しい教材「〇と□」と共生社会

「堀内正和展」関連イベントとして、新しい教材「〇と□(まるとしかく)」を用いて、エントランスロビーでドロップイン形式のワークショップを実施した。「〇と□」は2色の正方形の紙から円を切り抜いたものと、その円に半径の切込みをいれたものの2種類、各色2組を1セットとしたもので、これらを組み合わせてひとつの平面や立体の造形作品を作る教材である(図5)。神奈川県立近代美術館では、知的障がい者を雇用する近隣の社会福祉法人にその製作を委託した。展覧会会期中の計4日、122人が参加したワークショップでは、教材が社会福祉法人の作業所でひとつひとつ作られたものであることを説明し、また社会福祉法人の職員がその様子を見学した(図6)。このように、ふたつの異なる色と形からなる新しい教材「〇と□」は、ワークショップ参加者による教材の作り手への理解と作り手自身の自己肯定感を高め、共生社会実現への一助となることを意図している。

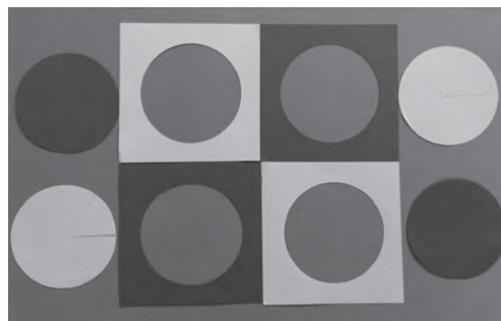


図5. 新しい教材「〇と□」



図6. 「堀内正和展」造形ワークショップ「〇と□」
実施日:2019年3月17日(日)
場所:葉山館 エントランス

しゅうしゅう
作品蒐集管理活動

2018年度 購入・寄贈状況 2019(平成31)年3月31日現在
(作品)

購入件数	2件
新規寄贈件数	32件
管理替件数	1件
収蔵総件数	14,958件

2018年度 寄託状況 2019(平成31)年3月31日現在
(作品・資料)

寄託総件数	1,053件
-------	--------

(資料)

新規寄贈件数	373件
--------	------

2018年度 新収蔵作品一覧

[凡例]

・寸法の単位はcmである。イメージ寸法と支持体寸法は、「/」で区切り記載した。
・署名年記は、書き込みの位置を示して記した。文字が判別できない場合は「□」で補った。

購入

作家名	作品名	制作年	材質・技法	寸法/縦・高(cm)	横・幅(cm)	厚・奥行(cm)	署名年記・書込み等	備考
神奈川県立近代美術館賞								
彫刻・インスタレーション								
大井真希	cantabile	2018	陶	115.0	85.0	59.0		第57回神奈川県美術展
油彩画・アクリル画など								
馬繰紀子	いのち	2018	油絵具、カンヴァス	194.0	259.0		右下:N.Matsunagi	第58回神奈川県女流美術家展

管理替

油彩画・アクリル画など								
塚本 茂	アミアン風景	1965	油絵具、カンヴァス	112.4	145.3		右下:S. tsukamoto 裏面:アミアン風景 昭和四十年 塚本茂筆	神奈川県地域福祉課より移管

寄贈

〈栗田政裕氏寄贈〉

版画(日本)								
栗田政裕	『イマジオ & ポエティカ』第50号	2018	木口木版、紙	22.0	18.0			ボックスウッドクリエーション、 限定99部うち36 木口木版2葉: 《三面シバ神像》、《カイラーサナー タ寺院》

〈川崎洋幸氏寄贈〉

油彩画・アクリル画など								
下川 勝	ささやく宙	1971	アクリル絵具、水彩絵具、 グワッシュ、金泥、紙	15.0	19.7		裏面下:昭和46年作 1971 下川勝「ささやく宙」	

〈ホセイン・ゴルバ氏寄贈〉

素描・水彩画など								
ホセイン・ゴルバ	『イエス:だれもがかれを見捨てた、弟子たち さえも』表紙	1984	水彩絵具、インク、 テンペラ、紙	37.3	25.0			画中:H.GOLBA 1984
ホセイン・ゴルバ	『イエス:だれもがかれを見捨てた、弟子たち さえも』1	1984	水彩絵具、インク、 テンペラ、紙	35.4	24.8			裏面:H.GOLBA/ 1984/BOLZANO
ホセイン・ゴルバ	『イエス:だれもがかれを見捨てた、弟子たち さえも』2	1984	水彩絵具、インク、 テンペラ、紙	35.4	24.9			裏面:H.GOLBA/ 1984/BOLZANO
ホセイン・ゴルバ	『イエス:だれもがかれを見捨てた、弟子たち さえも』3	1984	水彩絵具、インク、 テンペラ、紙	35.6	25.2			裏面:H.GOLBA/ 1984/BOLZANO
ホセイン・ゴルバ	『イエス:だれもがかれを見捨てた、弟子たち さえも』4	1984	水彩絵具、インク、 テンペラ、紙	35.2	25.0			裏面:H.GOLBA/ 1984/BOLZANO
ホセイン・ゴルバ	『イエス:だれもがかれを見捨てた、弟子たち さえも』5	1984	水彩絵具、インク、 テンペラ、紙	35.4	25.0			裏面:H.GOLBA/ 1984/BOLZANO
ホセイン・ゴルバ	『イエス:だれもがかれを見捨てた、弟子たち さえも』6	1984	水彩絵具、インク、 テンペラ、紙	35.4	24.9			裏面:H.GOLBA/ 1984/BOLZANO
ホセイン・ゴルバ	『イエス:だれもがかれを見捨てた、弟子たち さえも』7	1984	水彩絵具、インク、 テンペラ、紙	35.4	25.2			裏面:H.GOLBA/ 1984/BOLZANO
ホセイン・ゴルバ	『イエス:だれもがかれを見捨てた、弟子たち さえも』8	1984	水彩絵具、インク、 テンペラ、紙	35.2	24.8			裏面:H.GOLBA/ 1984/BOLZANO
ホセイン・ゴルバ	『イエス:だれもがかれを見捨てた、弟子たち さえも』9	1984	水彩絵具、インク、 テンペラ、紙	35.4	24.8			裏面:H.GOLBA/ 1984/BOLZANO
ホセイン・ゴルバ	『イエス:だれもがかれを見捨てた、弟子たち さえも』10	1984	水彩絵具、インク、 テンペラ、紙	25.3	17.4			裏面:H.GOLBA/ 1984/BOLZANO

作家名	作品名	制作年	材質・技法	寸法/縦・高(cm)	横・幅(cm)	厚・奥行(cm)	署名年記・書込み等	備考
〈櫻井由子氏寄贈〉								
彫刻・インスタレーション								
櫻井敏生	千重子	1969	木	20.0	12.9	19.0	後:TOSHIO/サ	
櫻井敏生	店員B	1973	黒御影石	27.0	24.0	28.0		
櫻井敏生	MINA	1997	セメント	39.0	17.0	20.2		
櫻井敏生	YUZUKI	2006	木(樺)	33.0	21.5	33.0	左側面:サ'06/TOSHIO	
〈中島 風氏寄贈〉								
彫刻・インスタレーション								
中島幹夫	早曉の海	2017	ガラス、黒大理石	27.5	31.5	40.0		
〈橋 秀文氏寄贈〉								
油彩画・アクリル画など								
佐野繁次郎	裸婦	1932	油絵具、カンヴァス	76.0	138.0		右中:1932 S.Sano	
〈松田美枝子氏寄贈〉								
油彩画・アクリル画など								
有馬さとえ	女性像	1948-1951年頃	油絵具、カンヴァス	90.0	70.0			
有馬さとえ	月上る頃	1955年頃	油絵具、カンヴァス	80.0	100.0		左下:ありまさとえ	
〈水沢 勉氏寄贈〉								
版画(日本)								
柄澤 齊	『SHIP』1 我等かよわき小舟もて	2004	木口木版、紙	13.5/19.2	10.5/13.2		右下:Karasawa 冊子奥付:齊	16頁未綴じ冊子口絵 刊行:梓丁室 初刷150部
柄澤 齊	『SHIP』2 桜の森の満開の下(坂口安吾による)	2004	木口木版、紙	10.0/19.2	9.0/13.2		右下:Karasawa 冊子奥付:齊	同上
柄澤 齊	『SHIP』3 肖像XLII 日和崎尊夫 B	2004	木口木版、紙	13.5/19.2	10.5/13.2		右下:Karasawa 著名右 に印あり 冊子奥付:齊	同上
柄澤 齊	『SHIP』4 天津速駒	2004	木口木版、紙	13.2/19.2	7.7/13.2		右下:Karasawa 冊子奥付:齊	同上
柄澤 齊	『SHIP』5 孤峰孤舟図	2004	木口木版、紙	17.1/19.2	6.7/13.2		左下:齊 著名下に印 あり 冊子奥付:K	同上
柄澤 齊	『SHIP』6 天津速駒II	2004	木口木版、紙	13.0/19.2	9.5/13.2		右下:Karasawa 冊子奥付:齊	同上
柄澤 齊	『SHIP』7 CARNATION(グリュエーネヴァルト『イーゼンハイム祭壇画』による)	2005	木口木版、紙	8.5/13.3	10.0/19.5		右下:Karasawa 冊子奥付:齊	同上
柄澤 齊	『SHIP』8 オルフェウス	2005	木口木版、紙	14.5/19.2	9.5/13.2		右下:Karasawa 冊子奥付:齊	同上
柄澤 齊	『SHIP』9 Distance	2005	木口木版、紙	19.5/19.2	10.5/13.2		右下:Karasawa 冊子奥付:齊	同上
柄澤 齊	『SHIP』10 桃慈童	2005	木口木版、紙	10.0/19.2	9.7/13.2		右下:齊 冊子奥付:齊	同上
柄澤 齊	『SHIP』11 陀羅尼経盟海霊(だらしきょうちかいのわたつみ)	2005	木口木版、紙	12.7/19.2	11.0/13.2		右下:Karasawa 著名右 に印あり 冊子奥付:齊	同上
柄澤 齊	『SHIP』12 Landmark	2005	木口木版、紙	12.0/26.4	13.5/9.4		右下:Karasawa 冊子奥付:齊	同上
柄澤 齊	『SHIP』13 肖像XLIII アンリ・ルソー B	2006	木口木版、紙	10.0/19.4	9.5/13.2		中央下:Karasawa 冊子奥付:齊	同上
柄澤 齊	『SHIP』14 肖像XLIV 織田信長 B	2006	木口木版、紙	12.2/19.4	8.2/13.2		中央下:Karasawa 冊子奥付:齊	同上
柄澤 齊	『SHIP』15 肖像XLV 麗子像 B	2006	木口木版、紙	8.4/13.3	14.2/19.0		右下:Karasawa 著名右 に印あり 冊子奥付:齊	同上
柄澤 齊	『SHIP』16 肖像XLdVI 芳一 B	2006	木口木版、紙	12.5/19.2	10.0/13.2		右下:齊 冊子奥付:齊	同上
柄澤 齊	『SHIP』17 肖像XLVII お岩 B	2006	木口木版、紙	14.0/19.4	11.7/13.2		右下:Karasawa 冊子奥付:齊	同上
柄澤 齊	『SHIP』18 水に在りて水を捜す	2006	木口木版、紙	13.0/19.2	8.2/13.2		右下:Karasawa 冊子奥付:齊	同上
柄澤 齊	挿絵本『影法師』	2005	木口木版、紙、手彩色	15.0	12.0		奥付:齊	10頁未綴じ冊子(口絵1点、 挿絵10点) 刊行:梓丁室 初刷150部
〈宮崎とみ系氏寄贈〉								
彫刻・インスタレーション								
ズビエク・セカル	頭部	1962	ブロンズ	28.5	28.5	19.0		
油彩画・アクリル画など								
ベン・ニコルソン	three forms Euboea	1968	ミクストメディア(絵具、セラフナイトまたは鉛筆、ハードボードに貼られた紙)	37.3	43.4		裏面中:NICHOLSON 1968	

作家名	作品名	制作年	材質・技法	寸法／縦・高(cm)	横・幅(cm)	厚・奥行(cm)	署名年記・書込み等	備考
-----	-----	-----	-------	------------	---------	----------	-----------	----

関連資料

〈石川俊雄氏寄贈〉

矢内原伊作	アルベルト・ジャコメッティ	1955-1960	写真	29.5	20.0			
矢内原伊作	樹は立っている	1955-1960	墨、紙	24.2	27.2			樹は立っている／白い 花々を／たゆみなく／ 赤い実へと／熟れさせ ながら／伊作 [印]

〈馬場淳子氏寄贈〉

仲田定之助	仲田定之助 関連資料一式 (全 367 点) : 日記、アルバム、手紙、葉書、写真、印刷物等							
-------	--	--	--	--	--	--	--	--

〈水沢 勉氏寄贈〉

柄澤 齊	Praeludium	2006	木口木版、紙	5.0/24.0	9.6/19.2		中央下:H.K	「イメージの迷宮に棲む 柄澤齊展」図録 (刊行: 栃木県立美術館、神奈川県立近代美術館、日本経済新聞社) に付帯
柄澤 齊	Postludium	2006	木口木版、紙	6.2/24.0	8.3/19.2		同上	同上
柄澤 齊	収穫	2008	木口木版、紙	7.0/17.7	6.0/16.7		右下:H.K	「小宇宙への情熱—美浦康重版画コレクション」図録 (刊行: 神奈川県立近代美術館) に付帯
柄澤 齊	『版画家にとって光とは闇とは—レンブラントに添って—』	2011	印刷、紙	21.0	15.0			国立西洋美術館「レンブラント 光の探求 闇の誘惑」展の講演録 (2011 年 4 月 2 日開催) 刊行: 梓丁室

館外貸出作品一覧

開催初日が2018年4月1日から2019年3月31日までの展覧会に限る
(巡回展の場合は、第一会場の会期による)

件数	点数	作家名(作品名)	「展覧会名」会場(会期)
1	1～9	クエイ兄弟《鹿(デコール《「粉末化した鹿の精液の匂いを嗅いでください」の背景画)》	「クエイ兄弟 ファントム・ミュージアム」岡崎市美術館(4月7日～5月20日)
		フランチェスコ・スタロヴィエイスキ《ヴロツワフ現代劇場、ベルトルト・ブレヒト『肝っ玉おっ母とその子どもたち』》	
		ロマン・チェシレヴィチ《ワルシャワ国立オペラ劇場、ダッラピッコラ『囚人』》	
		ヘンリク・トマシェフスキ《ポーランド—民衆芸術が魅力のポーランドに行こう》、《スタジオ劇場(テアトル・ストゥディオ)、ヴィトカツイ》、《ドラマ劇場(テアトル・ドラマティチュニ)、W. ゴンブローヴィチ『結婚』》	
		レシェク・ホウダノーヴィチ《デサ・ワルシャワとプラハ・アート・センター主催の展示・販売会『チェコ・スロヴァキアの芸術家の絵画、ガラス細工、陶器』》	
		ユゼフ・ムロシュチャク《ワルシャワ・オペレッタ劇場『食学生』》	
		ヤン・レニツァ《大劇場(テアトル・ヴィエルキ)、アルバン・ベルク『ヴォツェック』》	
2	10～11	金沢重治《梅》、《初夏の景(妙本寺境内)》	「第1期所蔵品展 特集:金沢重治」横須賀美術館(4月7日～7月8日)
3	12	寄託作品(油彩)	「名作誕生一つながる日本美術」東京国立博物館(4月13日～5月27日)
4	13	相笠昌義《日常生活・交差点にて・待つ人》	「収蔵品展062 日常生活・相笠昌義のまなざし」東京オペラシティ アートギャラリー(4月14日～6月24日)
5	14	高山辰雄《夜》	「人間・高山辰雄展——森羅万象への道」世田谷美術館(4月14日～6月17日)、大分県立美術館(7月7日～8月19日)
6	15～19	和達知男《謎》	「Hello World. Revising a Collection」ベルリン美術館群国立美術館ハンブルガー・バーン・ホフ現代美術館(4月28日～8月26日)
		村山知義《現在の藝術と未来の藝術》(仲田文庫)	
		寄託資料3点	
7	20	藤田嗣治《ちんどんや 職人と女中》	「没後50年 藤田嗣治展」東京都美術館(7月31日～10月8日)、京都国立近代美術館(10月19日～12月16日)
8	21～27	川上冬屋《花卉図》(青木文庫)	「明治150年記念 真明解・明治美術」神奈川県立歴史博物館(8月4日～9月30日)
		高橋由一《江の島図》	
		本多錦吉郎《相州鎌倉由比濱》、《中禅寺湖夜景》	
		結城正明《HIPPOCRATES》(青木文庫)	
		高橋源吉《高橋由一履歴》(青木文庫)	
		寄託作品(日本画)	
9	28	山口蓬春ほか《昭和御大典絵巻》(山口蓬春文庫)	「秋企画展 山口蓬春とやまと絵—初公開!《昭和御大典絵巻》を中心に—」山口蓬春記念館(9月29日～11月25日)
10	29～39	松本竣介《工場》、《立てる像》	「松本竣介 アトリエの時間」大川美術館(10月13日～12月2日)
		井上長三郎《静物》	
		鶴岡政男《死の静物(松本竣介の死)》	
		松本竣介差出 麻生三郎宛書簡 2通	
		末松正樹旧蔵 松本竣介書簡 末松正樹宛 5通	
11	40～41	フランシスコ・ゴヤ・イ・ルシエンテス『気まぐれ』(8点) 1,19,34,41,43,61,62,63、『戦争の惨禍』(8点) 1,12,28,29,33,39,69,78	「生誕100年記念特別展 堀田善衛—世界の水平線を見つめて」高志の国文学館(10月17日～12月17日)
12	42～65	上野誠《1932年メーデー》、《メーデー》、《ポスター「平和を守る 原爆展」》、《ポスター「やまびこ学校」》	「闇に刻む光 アジアの木版画1930s-2010s」福岡アジア美術館(11月23日～2019年1月20日)、アーツ前橋(2月2日～3月24日)
		陳葆真《双十節での闘い》、《光は目の前に》	
		陳煙橋《負傷者の叫び》	
		陳耀唐《逮捕される》	
		黄聊化《国民党反動軍兵士の絶望》	
		力軍《恐ろしい検査—台湾二・二八事件》	
		羅清楨《どこへ行く》	
張望《行先は》			
		鄭野夫《連環画「水災」》(8点) 1,4,7,8,11,12,15,16	
		鍾歩青《妊婦》、《窯を作る》	
13	66～67	堀文子《霧氷》、《初秋》	「生誕100年 堀文子展 旅人の記憶」奥田元小・小由女美術館(12月18日～2019年1月20日)
14	68	イサム・ノグチ《広島原爆慰霊碑のためのマケット》	「イサム・ノグチと長谷川三郎—変わるものと変わらないもの」横浜美術館(2019年1月12日～3月24日)
15	69～74	福沢一郎《よき料理人》、《鳥》、《『雑記帳』母子》、《『雑記帳』山の素描》、《『雑記帳』群像》、《『雑記帳』失楽園》	「福沢一郎展 このどうしようもない世界を笑いとばせ」東京国立近代美術館(2019年3月12日～5月26日)

修復報告 1

増田絵画修復工房 増田久美

作者：朝倉 摂

作品名：告発 61

制作年：1961年

材料・技法：日本画絵具他、ベニヤ板

寸法(mm)： 修復前 作品 1296×1819×33

額付き 1847×1326×50

修復後 作品 1295×1821×33

額付き 1850×1325×45

修復前の所見

支持体は木枠にベニヤ板を取り付けた手製のパネルである。ベニヤ板は3層構造で厚みは約3mm、画面側から木枠に釘で固定されていた。右側と左側下部のベニヤ板は変形して画面側に膨らんでおり、木枠と中棧から外れて浮き上がっていた(図4、5)。木枠の組みやベニヤ板を固定している釘は、錆が進行し腐食しているものが多かった。

画面には蜘蛛の巣等が付着し、非常に汚れていた(図1)。ベニヤ板に赤色の砥の粉下地が施され、金箔が貼られた上に彩色されていた。黒色絵具で描かれた茨の部分は、石膏と思われる硬い白色の盛り上げの上から彩色され、塗り残しが多く見られた。盛り上げ部分は下層との接着面が少なく、先端が細く尖がって折れたり欠損している箇所が多かった(図9)。剥落と浮き上がりは、白色の盛り上げ部分に集中していた他、支持体のベニヤ板が変形している箇所にも多く生じていた。

裏面には裏蓋として、厚み約1.5mmのベニヤ板が取り付けられていた。ベニヤ板は下部から3分の1程の箇所まで2枚が継がれ、木枠と中棧には鉄製の小鋸で固定されていた。冠水によって引き起こされたと考えられる、しみや反り変形、割れが生じていた。下部にあった2箇所の四角い切り取り窓は、取り扱いの時に手をかけるためのものと思われた(図2)。

額はラワン材と思われる木板が木枠側面に釘で取り付けられていた。下側と左右側の木板の下部には白色のカビが付着して割れや腐食が見られ、脆弱な状態であった。固定の釘は錆びて崩れているものが多く、下辺では木板が作品の木枠から外れていた。また、作品の厚み33mmに対して木板は50mmあり、裏蓋から10mm以上飛び出していたため、固定が不安定で画面側に斜めに傾いていた。

修復方針

- ・ 絵具層の剥落や浮き上がりの主な原因となっている、支持体のベニヤ板の変形を平らに戻し、木枠と中棧に固定して安定させる。
- ・ 画面の汚れを除去し、絵具層が剥落している部分には充填、補彩処置を行う。
- ・ 額の木板と裏蓋は状態が悪く重量もあり、作品の取り扱いを難しくしていることから、取り外して新調する。

修復処置

1. 絵具層 ドライクリーニング(乾式洗浄)

金箔も含めて絵具層は水に対して非常に溶解しやすかったため、汚れの除去には水の使用を避け、やわらかい羊毛の小筆

とケミカルスポンジ、練りゴムでドライクリーニングを行った。小筆で盛り上げ部分の凹凸から埃等の付着物を払い落としした後、ケミカルスポンジと練りゴムを使用して汚れを除去した(図3)。

2. 絵具層 浮き上がり接着

水の使用を避けるため、エタノールで溶解するヒドロキシプロピルセルロース(セルニー日本曹達(株))を接着剤として使用した。浮き上がり箇所に2~5%エタノール溶液を小筆や注射器で塗布、注入して接着、強化した。

3. 支持体ベニヤ板の接着

絵具層が安定した後、作品から額の木板を取り外した。釘は錆びて腐食していたため引き抜くことが出来ず、木板を少しずつ切断しながら取り外した。

接着に先立ち、ベニヤ板の変形部分の下に湿らした吸収紙を差し込んで加湿した。接着剤はアクリルエマルジョン(PrimalAC2235)を使用した。また、メチルセルロースを少量混ぜて体質を持たせると共に、乾燥が緩やかに進むようにして、作業性の向上を図った。接着剤をベニヤ板裏面と木枠に塗布したのち、上から押してベニヤ板の変形を戻しながら木枠に接着した。画面にポリエステル紙と吸収紙を当てた上にエアークリップシートを入れ、変形部分より大きな木板(厚み10mm)を乗せて圧着した。ベニヤ板の端部分には重石を追加した(図6)。

4. 裏蓋の取り外し

裏蓋のベニヤ板は、多くの小鋸と接着剤で木枠に固定されていた。小鋸は錆びて引き抜くことが出来ず、全部で3層のベニヤを1層ずつ引きはがして取り除いた(図7)。支持体のベニヤ板裏面には中棧が取り付けられていた。中棧は天地方向に通して3本、左右方向は天地方向の中棧の間に差し込むように分割して取り付けられていた。上側の中央2箇所の中棧は、制作当初から取り付けられておらず、支持体のベニヤ板を押すと動く状態であった。

木枠との接着にはおそらく木工用ボンドが使われており、木枠と中棧に残ったベニヤ板の繊維と接着剤はノミ等で削り取った。

支持体のベニヤ板裏面の左側、下部、右下には冠水跡がしみとなっており、黒いカビが生じていた。カビは刷毛で払いながら掃除機で吸引し、エタノール水(エタノール7:精製水3)で拭き取った後、過酸化水素水(3%)で殺菌、漂白した。

5. 支持体ベニヤ板の補強

中棧のない中央部分に2本、ベニヤ板の割れ部分に1本、中棧を追加した。アクリルエマルジョン(PrimalAC2235)で接着後、補強としてL字型のステンレス製金具を取り付けた(図8)。

6. 絵具層 剥落部分の充填、補彩

支持体のベニヤ板が安定した状態になった後、剥落部分に水性の白色充填材(STUCCO PER RESTAURO, ZECCHI)を筆と注射器で注入し(図10)、周囲の色調に合わせて水彩絵具で補彩を行った。

7. 額 新調

木枠の旧釘穴はエポキシ樹脂系の木工パテで充填し、角の欠損箇所(右辺上下角)には薄板を埋めて厚みを整えた。額の木板は厚み15mm、幅45mmの四隅面取りの無塗装赤松材を組み、汚れ防止のために荏の油を刷り込んだ後、作品の木枠

側面にステンレス製の木ネジで取り付けた。木ネジの頭は、目立たないように額の色に合わせた紙を生麩糊で貼付けて隠した(図11)。

裏面保護のために、ポリカーボネート製の透明コルゲート板を裏蓋(縦方向2枚継ぎ)として取り付けた。ステンレス製の吊り金具を木枠に取り付けた(図12)。

修復後の所見

木枠から外れて反り返っていたベニヤ板が、平らな状態で木枠に固定されたことにより、絵具層の状態が安定し、浮き上がりや剥落が生じる危険が軽減された。絵具層が接着、強化されたことで、保存や移動、展示を安全に行えるようになった。

ベニヤ板の裏蓋をポリカーボネート板に取り替えたことで、重量が軽減され取り扱いが容易になった。



図1. 修復前 額装 表



図2. 修復前 額装 裏



図3. 修復中 ドライクリーニング(ケミカルスポンジ使用前後)



図4. 修復前 支持体ベニヤ板の変形と剥離 木枠から外れて浮き上がっている

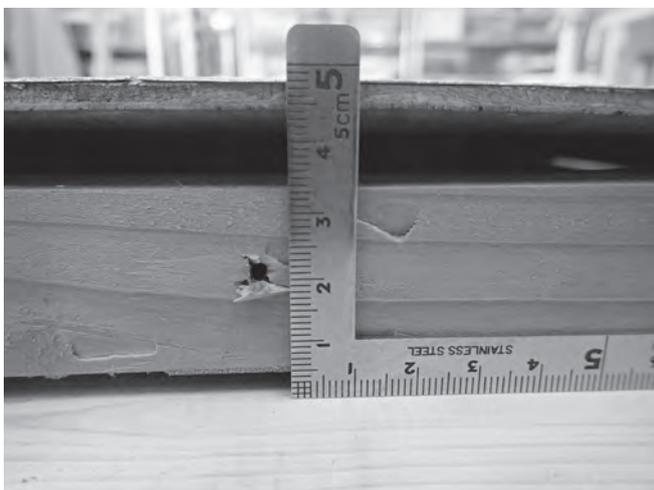


図5. 修復前 支持体ベニヤ板の変形と剥離(部分)



図6. 修復中 支持体ベニヤ板の接着作業



図7. 修復中 裏面のベニヤ板取り外し後 下辺を中心に冠水のしみ痕に黒カビが生じている



図8. 修復中 中棧補強



図9. 修復前 絵具層剥落部分 充填前

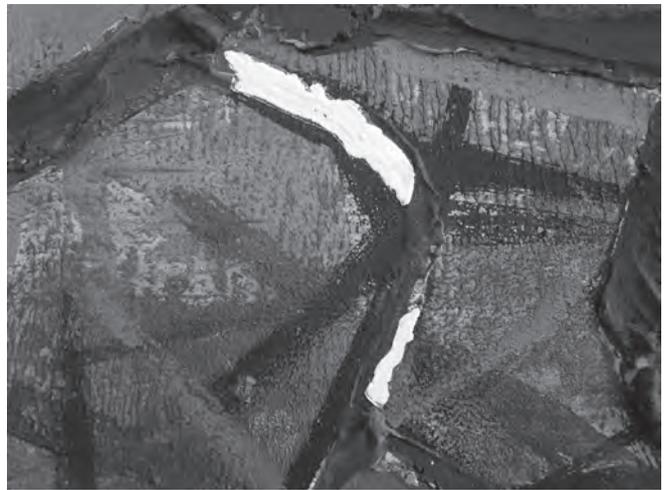


図10. 修復中 絵具層剥落部分 充填後

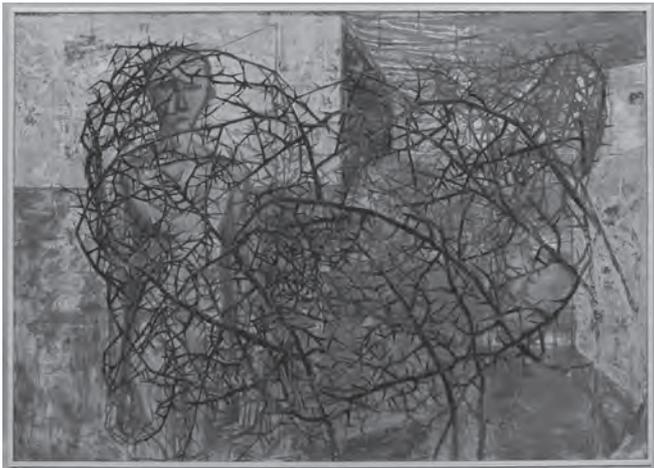


図11. 修復後 額装 表

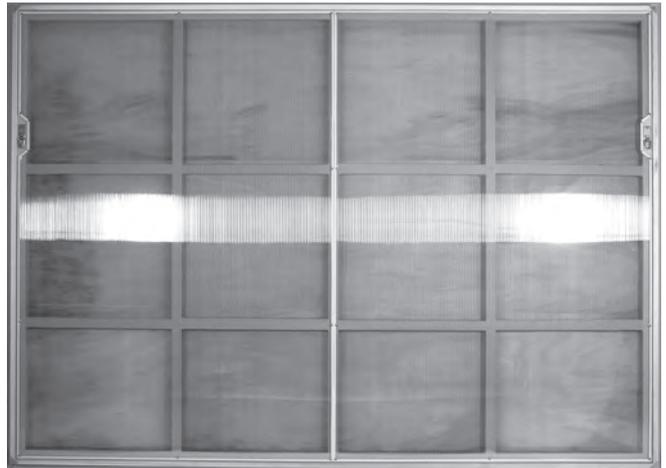


図12. 修復後 額装 裏 ポリカーボネート板の裏蓋を取り付けた

修復報告 2

伊藤由美

作 者：阪本文男

作 品 名：雪稜

制 作 年：1955 年頃

材 料：油絵具、カンヴァス

寸法(mm)：	修復前	作品	733 × 999
		棒縁付き	760 × 1025 × 40
	修復後	作品	733 × 1008
		棒縁付き	760 × 1034 × 40

修復前の所見

絵具層は油絵具特有の粘りや光沢はあまりなく、全体的に脆弱である。溶き油を多く混ぜ、ペインティングナイフと筆の併用で全体的に薄塗りで制作されている。空の左寄りの部分に、絵具の剥落が複数みられる(図1、3)。中央付近の家の描写の稜線部分は、比較的厚い絵具層がみられるが、下層との固着が不良で絵具層間の層間剥離、剥落が数か所みられる(図4~8)。

画面上辺と下辺にカンヴァス下地が5mmほど露出しており、当初よりやや大きめの木枠に張り直されているのがわかる。カンヴァスは木枠の左右辺が画面に向かって左側に歪んだ状態で張りこまれたため、作品は矩形ではなく平行四辺形のように歪んでいる。上辺が画面向って左側に10mmほどずれている。修復前は上下辺、それぞれの実寸を計測しているが、修復後は変形した状態で作品左右の端を計測した。

裏面には埃の付着がある。裏面棒縁上に「雪稜 1953年頃」と記された紙片が貼られている(図2)。

修復処置

1. 調査

修復前の撮影、作品の状態調査を行った。

2. 棒縁の取り外し

カンヴァスのたわみを修正するため、木製の棒縁を取り外した。

3. 浮き上がり接着

絵具層の浮き上がり箇所にあくりル系エマルジョン型接着剤を用い、こてを使用しながら非常に低い温度で加温、加圧して接着した。膠水での接着を試みたが、描画に使用されたメディウムのせい、熱に弱いうえ水性接着剤では接着効果が出にくかった。

4. 裏面清掃、殺菌

裏面の埃を吸引力の弱い掃除機で除去し、エタノールで拭いて殺菌をした。

5. カンヴァスの張りの修正

カンヴァスにたわみが生じており、揺れによる絵具層の浮き上がりの原因となるので、側面張り代部分の固定釘の間を指で引っ張りながらステンレス製のガンステープルを打って、たわみを修正した。歪んでいた木枠を矩形に修正してカンヴァスを張り直すと、描写部分の周辺部にカンヴァス下地部分が露出するため、現状維持とした。

6. 充填整形

剥落箇所水性の充填剤を充填し、周囲のマチエールに合わ

せて整形をした。

7. 補彩

剥落箇所および充填箇所を溶剤型アクリル絵具で補彩した。

8. 棒縁の再装着と裏板装着

取り外した棒縁を元の位置にネジ止めした。木枠が歪んでいるが、変形は修正せずにそれぞれの辺に戻した(図9)。また、波板構造のポリプロピレン製板を裏板として装着した(図10)。

修復後の所見

本作品の保存上の問題は、絵具層の固着の脆弱さである。主にペインティングナイフで色面を彩色し、単純化した形の境を筆でなぞるといった技法であるが、筆で押し付けて描写するのは違い、ペインティングナイフの場合、固着力は落ちることが多い。さらに、溶き油を多く使用しているため油絵具が本来持つ固着力も低下している。そのため層間剥離、剥落が複数個所で起きており、剥離していない箇所も全体的に脆弱な画面となっている。カンヴァスのたわみは、絵具層の浮き上がりを助長するため、修復にあたっては、張りの修正を行った。また、裏板を装着することでカンヴァスのたわみの揺れを軽減させた。裏板装着は、埃除けや外的な衝撃からの保護以外にも、カンヴァスに当たる風圧を避け、揺れを防ぐ効果がある。

制作年に関して特定する記述などはないが、1955年頃として当館で登録されている。作者は高校時代から油絵を描き始めるが、その当時の作品は筆を用いて具象的な形を描きこんでいる。1954年に東京藝術大学に入学した頃から、ものを色面で捉えてゆく画風へ変わってゆく。1954年から1955年にかけて、本作品のように景色を色面で描写している作品を何点か残しており、1955年頃の作品にも雪景色の作品《雪の浜》がある。作品裏面には「雪稜 1953年頃」の紙片が貼られていたが、作家本人の記述ではないと想像できるうえに、前述の作品群との類似から、1955年頃の制作と再確認をした。

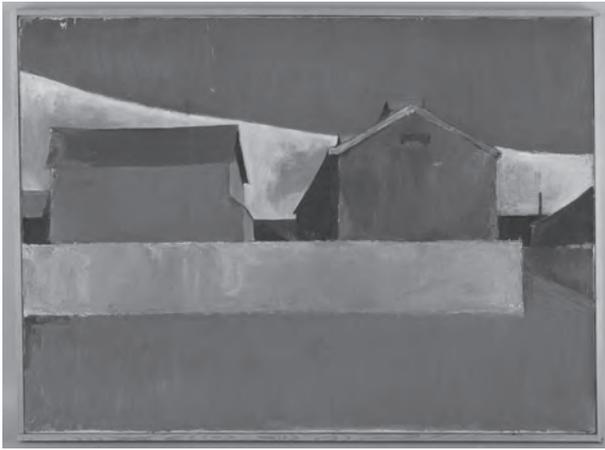


図1. 修復前 表 棒縁付き

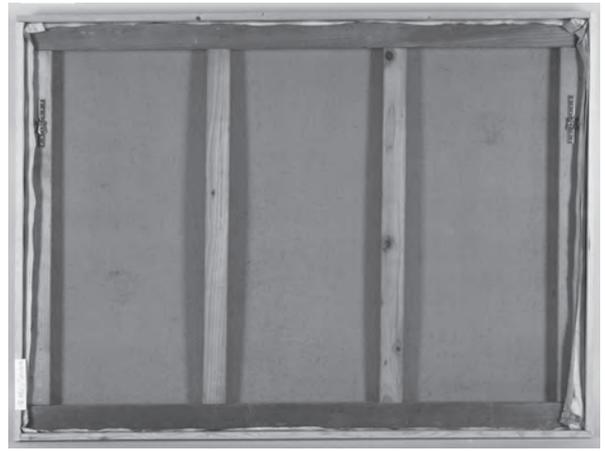


図2. 修復前 裏 棒縁付き

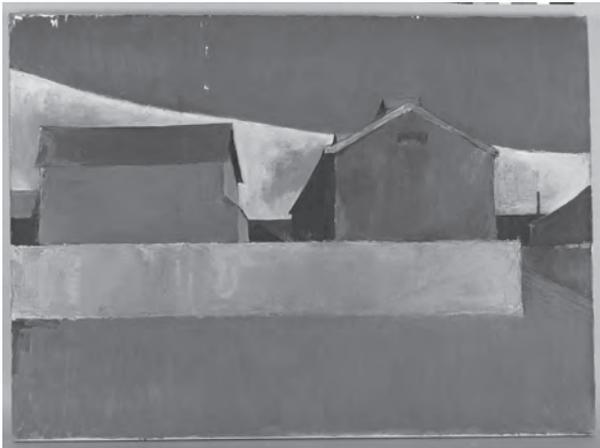


図3. 修復中 充填整形



図4. 修復前 剥落部分



図5. 修復後



図6. 修復前 剥落部分



図7. 修復前 絵具層の浮き上がり



図8. 修復後

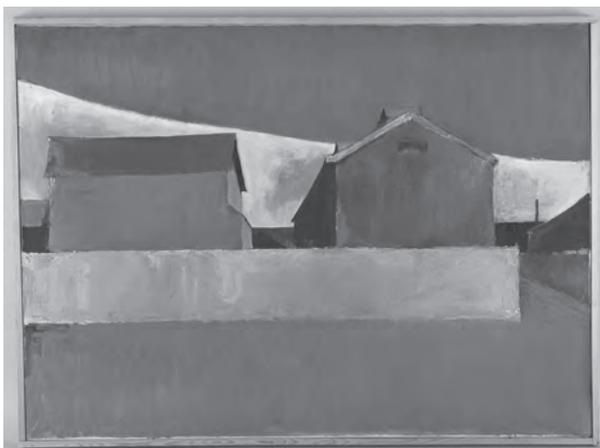


図9. 修復後 表 棒縁付き



図10. 修復後 裏 棒縁付き 裏板装着

2018 年度修復作品一覧

※1 表記のあるものは外部委託、ないものは当館修復担当研究員 伊藤由美が行った。
 ※2 「神奈川県まなびや基金」を活用した彫刻整備のページ参照

作者	作品名	寸法(cm) 縦・高×横・幅×厚・奥行	制作年	種別	修復担当	※1
渡辺豊重	SWING 86-01	※2 250.0×220.0×50.0	1986	彫刻	有限会社クリーン塗装	
堀内正和	敦子の首	※2 25.0×18.0×22.0	1946	彫刻	株式会社文化財ユニオン	
堀内正和	海の花C	※2 72.0×60.0×18.0	1952	彫刻	株式会社文化財ユニオン	
堀内正和	海の花A	※2 81.5×40.0×40.0	1952	彫刻	株式会社文化財ユニオン	
堀内正和	エヴァからもらった大きなリンゴ	※2 16.0×35.5×26.0	1966	彫刻	株式会社文化財ユニオン	
堀内正和	円筒をななめに通りぬけるもうひとつの円筒	※2 64.0×35.0×35.0	1970	彫刻	株式会社文化財ユニオン	
堀内正和	片側曲面四辺形(単面四辺形)	※2 42.0×29.0×15.0	1972	彫刻	株式会社文化財ユニオン	
朝倉 拱	黄衣	170.1×139.2	1948	日本画	増田絵画修復工房	
朝倉 拱	告発61	129.5×182.1×3.3	1961	日本画	増田絵画修復工房	
牛田雞村	早春譜	122.0×167.5	1936	日本画	瑤春堂有限公司	
恩地孝四郎	裸婦(立像)	65.3×45.8	1924	油彩画		
香月泰男	聖堂	91.0×48.0	1973	油彩画		
香月泰男	ニース	91.0×47.7	1973-74	油彩画		
国吉康雄	オガンキットの入江	91.3×56.0	1920	油彩画		
久保 守	古風な写場	65.7×81.0	不詳	油彩画		
阪本文男	雪稜	73.3×100.8	1955頃	油彩画		
広幡 憲	39×QG	31.5×40.3	1939	油彩画		
福沢一郎	鳥	116.8×91.2	1957	油彩画		
本多錦吉郎	中禅寺湖夜景	39.3×60.4	1880頃	油彩画		
村山知義	少女エルズベットの像	45.1×38.6	1922	油彩画		
山口長男	かたち	161.8×171.5	1951	油彩画		

美術館資料の保存と活用

—2018年度のアーカイブ事業について

長門佐季・西澤晴美

神奈川県立近代美術館では2017年度から新規事業として「美術館アーカイブ構築」に取り組んでいる。本稿では2年目となる2018年度の事業内容について報告する。

1951年に開館した神奈川県立近代美術館は、67年に及ぶ歴史の中で700回を超える展覧会を開催し、国際的な視点から多くの作家や芸術動向を紹介することで、近現代の美術史および文化史の新しい側面を提示してきた。それら過去の展覧会資料は段ボール箱で約400箱を超える量があり、劣化しやすいフィルム類も含まれていたため、早急な整理・保管が必要であった。本年は「神奈川県立近代美術館展覧会資料(1951-)の整理と活用」として、文化庁の「平成30年度我が国の現代美術の海外発信事業」に採択され、事業を進めることができた。

資料の整理とデジタル化

事業内容としては、昨年度までに展覧会別に分別していた資料を、段ボール箱からキャビネットに移動させた。そのうえで、脆弱な写真資料類のデジタル化、ガラス乾板やフィルム類の保存資材やケース類の入れ替え、資料リストの更新を実施した(図1、2)。



図1.キャビネットに収納した資料



図2.ガラス乾板の保存

資料のデジタル化は、展覧会の会場写真を中心に、劣化しやすい35mmフィルム約3,000コマ分について行った(図3、4)。今年度までに、鎌倉館で開催された1950年代初頭から1980年までの展覧会のうち、会場写真がフィルムで残されていたものについては、おおむねデジタル化を終えることができた。紙焼き写真については次年度以降に順次行う予定である。デジタル化によって、写っている作品や人物などを特定しやすくなるため、未解明な過去の展覧会の内容を推察する方法として有効である。



図3.「ポーランド現代ポスター展」会場 1975年

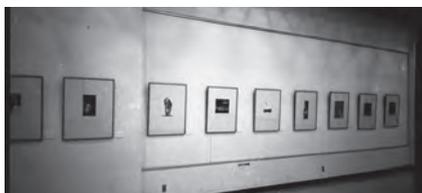


図4.「浜田知明・銅版画展」会場 1980年

研究会

また、事業の一環として次の通り研究会を開催した(図5)。

日 時:2019年1月18日(金)午後2時-5時

場 所:神奈川県立近代美術館 葉山 講堂

テーマ:「神奈川県立近代美術館アーカイブ」の活用に向けて

- (1) 報告「「神奈川県立近代美術館アーカイブ構築」の概要と今年度までの成果について」(長門佐季)
- (2) 資料紹介(三本松倫代、西澤晴美)
- (3) 講演「「空間から環境へ」展を中心に」
講師:岩崎 清(ギャラリーTOM副館長)
- (4) 意見交換
コメンテーター:三上 豊(和光大学教授)
有須千夏(筑波大学大学院)

講師の岩崎氏から当館資料の活用について示唆をいただいたほか、参加者の方々から事業の進め方や方向性について有益なご意見をいただき、議論を深めることができた。



図5.研究会

次年度に向けて

アーカイブ事業について当館ウェブサイトで情報掲載を始めた2018年4月以降、さまざまな問い合わせがあり、海外からの問い合わせに対する情報提供3件、アーカイブ資料の調査5件、画像利用5件などの活用があった。具体例としては、2018年6月から8月までドイツのプッフハイム美術館で開催された「久保舎己版画展——私のブリュッケ」展に際し、久保舎己が観覧した当館と三重県立美術館との巡回展「プッフハイムコレクションによる ドイツ表現派展」(1984年)の資料を提供したことなどが挙げられる。こうした調査研究への活用を促進するための取り組みを、次年度以降、強化していきたいと考えている。

本年度の最後に発行した当館アーカイブ紹介リーフレット(p.27「刊行物」参照)では、事業の指標として、旧鎌倉館を設計した建築家・坂倉準三の師であるル・コルビュジエが構想した「無限成長美術館」のコンセプトにならない、「無限成長アーカイブ」を掲げた。今後は、持続性のある開かれたアーカイブを目指し、次の3つの活動を軸に取り組んでいく。

- *蓄積・収集・・・美術館という場を核に人や歴史を繋いでいく。
- *整理・保存・・・多種多様な資料を適切に保存し未来に伝える。
- *研究・活用・・・データベースを構築し、ウェブサイト等を通じて国内外へ広く発信する。

次年度は、10月からウェブサイトでの一部資料の公開を開始するほか、鎌倉別館リニューアル・オープン記念展で、アーカイブ事業を紹介するパネル類と資料の特集展示を行う予定である。

調査研究活動

調査・研究報告

資料紹介

後藤秀聖氏寄贈の原田直次郎関連資料について

三本松倫代

2016年度、葉山館では「近代洋画・もうひとつの正統 原田直次郎展」(4月8日～5月15日。以下「原田直次郎展」)^(註1)を開催した。ミュンヘンの美術アカデミー留学時(1884-86)に同地で森鷗外と交遊し、「うたかたの記」(1890年)の主人公・巨勢のモデルともなった明治期の洋画家、原田直次郎(1863-1899)の回顧展として、画家の没後10年目に鷗外らが東京美術学校で開催した記念展(1909年11月28日)からおおよそ100年ぶりとなる個展である。日独における原田の仕事とその影響、活動の素地をなした原田家の文化的背景など、先行研究の成果に巡回各館の担当学芸員による独自調査を加えて、国際的な再考を試みた。

この展覧会の後、当館は2017年度に原田直次郎と兄の原田豊

吉に関連する8点の写真資料の寄贈を受けた。寄贈者の後藤秀聖氏が大阪の古書店で一括入手されたもので、それ以前の来歴は不詳だが、後述の調査の結果、岡山出身の古銭研究者、安藤嘉治彦(1874-1926)の旧蔵ないしは所縁の資料と推察するに至った。原田直次郎・豊吉兄弟に関して、展覧会后に初めて確認された情報を含む貴重なものであり、現時点で判る内容について推定の時系列で連番とし、調査・考察の内容を付して紹介したい。

以下、8点の資料を時系列でリスト化し、I. 原田直次郎・豊吉に関する資料、II. 安藤嘉治彦に関する資料の2項に大別して調査・考察内容を付す。

[リスト凡例]

掲載順序(番号)は書込みから推定される製作(撮影ないし複製)年月日の時系列とし、以下の項目を記載した。

- ・番号(図版no.)、製作年月日、資料名[暫定]、製作者名、写真館、寸法(イメージ/台紙、縦×横cm)、備考1、備考2
- ・図版番号のrは表面、vは裏面を表す。
- ・資料名は寄贈受入時の暫定として[]に入れた。
- ・/は改行を表す。
- ・技法はすべてゼラチン・シルバー・プリント。

番号(図版no.)	製作年月日	資料名[暫定]	製作者名	写真館	寸法(cm)	備考1	備考2
1(1r/1v)	1890(明治23)年8月	[原田笑人]	武林盛一	武林写真館	9.8×6.3; 台紙10.8×6.7	台紙貼り	青年1名の立像。 [表]印字・書込みなし [裏]筆で「呈/安藤大君/原田笑人/廿三年八月」の記入あり。「寫真師武林/東京一番町/S. TAKEBAYASHI/ICHIBANCHO/TOKIO」の印刷あり。
2(2r/2v)	1892(明治25)年	[原田豊吉]	不詳	[Erich Sellin & Co.]	14.5×10.0; 台紙16.4×10.8	台紙貼り	原田豊吉の胸像。 [表]イメージ下内に自筆署名「Toyokitzi Harada」を複製した印画紙(2.0×5.0cm)を貼付 [裏]筆で「複製/明治廿五年春 三十三」の記入あり。
3(3r/3v)	1895(明治28)年10月3日	[安藤少尉ほか8名]	不詳	泰昌照相	10.5×15.3; 台紙10.8×16.5	台紙貼り	軍人男性9名集合写真。 [表]印字・書込みなし [裏]筆で「明治廿八年十月三日写影/【以下、表面の人物の並び順で記載:後列左より】小崎曹長/友枝特務曹長/木郎軍医/安藤少尉/片山曹長【前列左より】桑野大尉/平岡大尉/内田中尉/関本少尉【改行】於宮口 安藤少尉記【印・安藤】」の書込み・押印あり。縦書漢字は印判、欧文は印刷で「泰昌照相/TAI CHANG./PHOTOGRAPHER, PORTRAIT GROUP/AND/VIEWS FOR SALE/NEWCHWANG./開在牛庄」の印字あり。
4(4r/4v)	1895(明治28)年11月	[原田龍藏]	中黒 實	記載なし	9.5×6.2; 台紙10.8×6.5	台紙貼り	幼児1名の立像写真。 [表]台紙下に「M. Nakaguro/SHICHOME/HONGO/TOKYO」の印刷あり。 [裏]筆で「明治廿八年十一月寫/原田龍藏/明治廿六年十月出生」の記入あり。台紙に「写真師/中黒/東京本郷四丁目(図案:花台と花入りの壺)」の印刷あり。
5(5r/5v)	1896(明治29)年4月	[原田一三ほか]	中黒 實	記載なし	9.4×6.1; 台紙10.8×6.5	台紙貼り	乳児1名、成人女性2名の集合写真。 [表]台紙下に左から「M. Nakakuro/東京本郷区/中黒」の印刷あり。 [裏]筆で「明治二十九年四月写/原田一三/明治廿九年一月出生」の記入あり。台紙に「寫真師/中黒實/東京本郷四丁目/M. NAKAKURO/MN【モノグラム】/PHOTOGRAPHIC/ARTIST./HONGO SHICHOME/TOKYO JAPAN/種板/永久保存致置候間何時/ニテモ焼増ノ御注文ニ應シ候(図案:桜をあしらった紋章付十字)」の印刷あり。
6(6r/6v)	1896(明治29)年11月	[歩兵第十聯隊第六中隊幹部之照相]	藤井石鐘	記載なし	14.8×10.4; 台紙16.5×10.8	台紙貼り、 保護紙あり	軍人男性5名集合写真。 [表]台紙下に左より「S. Fujii./HIMEJI JAPAN/播磨姫路元塩町/藤井石鐘」の印刷あり [裏]筆で「明治廿九年十一月写/In, Himeji/歩兵第十聯隊/第六中隊幹部之照相/小倉大尉 竹峯少尉/歩兵第四十聯隊ニ/転【旧字】補ス因テ紀念トス/K. Ando」の記入あり。台紙に「PHOTOGRAPHER/臺紙石橋製造(図案:鷲、草花)」の印刷あり。

番号(図版no.)	製作年月日	資料名[暫定]	製作者名	写真館	寸法(cm)	備考1	備考2
7(7r/7v)	1896(明治29)年 12月18日	[歩兵第十 聯隊]	後藤	獨立館	14.8×10.5; 台紙16.6×10.8	台紙貼り、 保護紙あり	軍人男性3名集合写真。 [表]台紙下に左より「Photographer/丸に鳥の紋章、 SUPERIORの文字/姫路市阪元町/獨立館後藤」の印刷あり。 [裏]筆で「明治廿九年十二月十八日/當歩兵第十聯隊軍 旗祭/因為紀念撮影/安藤生」の記入あり。
8(8r/8v)	1899(明治32)年 12月26日	[原田直次 郎]	気賀秋畝	玉翠館	14.2×10.0; 台紙16.5×10.7	台紙貼り、 保護紙	原田直次郎の肖像写真を模写した図版の複写。 [表]イメージ内下に「Naojiro Harada」の自筆署名の 複写を貼り込んで複写。台紙下に左より「S. Kiga SURUGADAI TOKIO GOKUSUIKWAN」の印刷あり。 [裏]台紙に「是亡父ガ最近ノ撮影ニヨリ門人正英ノ寫セ ル者聊紀念ノ為メ更ニ之ヲ寫真ニ附シ謹ミテ生前辱交ノ 君子ニ呈ス/明治卅二年十二月廿六日 原田龍藏」の筆 記文を印刷した紙(15.8×10.3cm)を貼付。年月日(上記太 字部分)のみ筆で記入。

I. 原田直次郎、豊吉関連資料について

資料1) 今回の一連の資料から、本資料の献呈対象である「安藤大君」は本論II章で紹介する安藤嘉治彦と推察される。原田笑人の詳細は調査中だが、直次郎の次女・福(とみ)の孫の喜多村安正氏より、原田直次郎の従甥にあたる「原田圭五郎ではないか」との推測が寄せられた。^(註2)

武林盛一(1842-1908、幼名武林亀藏)は、音無榕山(後の田本研造)に写真を学び、1872(明治5)年に札幌で最初の写真館を開いた写真師として知られる。森重和雄「幕末明治の写真師列伝 武林盛一」^(註3)によれば、武林は1884(明治17)年に上京、翌年3月ごろに麹町区一番町11番地に写真館を開業し、札幌の写真館を三島常磐に委ねて運営した。1890(明治23)年当時、東京の武林写真館には複数の写真師、助手、弟子がおり、この年に新館を増築して大川孝にその経営を委ねたが、一年と経たず大川が独立を希望したため鈴木真一の弟子・今井直を養子に迎えたという。

資料2) 原田直次郎の兄、原田豊吉は1861(万延元)年11月21日生まれ、1894(明治27)年12月1日(2日とする資料もあり)歿。1874(明治7)年にドイツに留学、地質学と古生物学を修め1883(明治16)年に帰国後、農商務省地質調査所と東京帝国大学理科大学に奉職したが、結核で病没した。豊吉の肖像写真2点をハイデルベルク大学のローゼンブッシュ関連未整理資料に確認した堀越叡が「ドイツの原田豊吉についての新資料」^(註4)のなかで、本資料と同じ図像(複写署名なし)の写真の裏面について「Erich Sellin & Co., Berlin W. Unter den Linden 19. II」^(註5)と報告している。なお、論題の新資料とはハイデルベルク大学の写真ではなく、シュターデのギムナジウムで発見した豊吉の成績表ほかについてをさす。1882(明治15)年の献呈が記されたミュンヘン撮影のもう1点に写る豊吉が長髪であることから、ベルリン撮影の写真について、豊吉がフライベルク鉱山学校で学んだのちハイデルベルク大学に向かう経由地としてのベルリンで1880(明治13)年の夏に撮影され、同年から1881(明治14)年にかけてカール・ハリー・ローゼンブッシュ(Karl Harry Rosenbusch, 1836-1914)の下で学んだハイデルベルク大学での聴講時に(学籍登録用として)使われたものと堀越は推測している。

ただし、2016(平成28)年の原田直次郎展で紹介した1883(明治16)年ウィーン撮影の豊吉肖像写真(同展出品番号I-03*)と

1882(明治15)年ミュンヘン撮影写真の髪型の類似、および本資料裏面の書込み(明治25年春)を検討すると、本資料は豊吉がロベルト・コッホの下で結核の治療を受けるために1891(明治24)年4月にベルリンへ渡り、翌年にかけて同地に滞在した時に撮影されたか、渡航前に日本で撮影した写真をベルリンで複写させ、ハイデルベルクのローゼンブッシュへ送ったものと思われる。

もう一つの根拠は、本資料と同一の肖像の下に署名を配した図版が1898(明治31)年刊行の松島剛著『中外地理学 内国部』(春陽堂)に「故理学博士原田豊吉肖像」として、松島が豊吉を追悼し経歴を紹介した文章とともに掲載されている点である。松島は同じ図版と文章(題名は「故理学博士原田豊吉君小伝」、著者名は「無人庵」)を翌年の『学窓余談』第2巻第4号(春陽堂、1899年5月)に再掲した。松島剛(1854-1940)はスペンサー『社会平権論』などの訳者としても知られる地理学者・教育者である。豊吉との親交の詳細は明らかでないが、豊吉の一周忌を前に1895(明治28)年11月に書かれたというその追悼文を1895(明治28)年12月刊行の『新地理学 日本部』(春陽堂)に初出したのち、自著への掲載を重ねている。故人の業績を偲ぶ遺影としては、大学進学以前よりも帰国後の活躍時の姿を選ぶのではないだろうか。

『新地理学』の図版は写真の再現性が極めて低いのに対し、『中外地理学』の精巧な図版には枠線の内外に「小川一眞製」、「K. OGAWA」の記載があり、1892(明治25)年に撮影された肖像に署名部分を貼り込んだものを原稿として製作(複写)したのが小川であったと思われる。本稿8番の原田直次郎の複写肖像写真と合わせて考えるに、肖像と自筆署名を組み合わせた図版は、遺影の形式として当時ある種の定型をなしていたのか、それとも原田家ないしドイツ由来の手法だったのだろうか。もっとも、豊吉資料は署名部分の印画紙(縦2×横5cm)が上から貼り付けられている。これが複写の原稿として作られたオリジナルなのか、一枚ずつ後から署名部分を貼り込んだのかは判っていない。

資料4、5) 原田直次郎の次男・龍藏は1893(明治26)年10月6日生まれ。三男・一三は1896(明治29)年1月4日生まれ。長男の大作は1891(明治24)年12月10日に生まれ翌年1月8日に夭折した。1881(明治14)年8月3日に渡航前の直次郎に嫁いだ妻・さだ(貞子、生年不詳-1923年1月6日歿)は大久保政親の次女と伝えられるが詳細は不明である。

中黒實の写真館の正確な所在地は不詳だが、当時の本郷4丁

目は菊坂と本郷通りを挟んだ現在の本郷4丁目1、4、36、37番と5丁目1～4番の一部にあたり、当時本郷6丁目31番（現在の本郷4丁目26番）にあった直次郎の自邸・画塾「鐘美館」の至近であることから、最寄りの写真館で撮影したと思われる。^(註6)本資料5については既に鍵岡正謹が「原田直次郎《騎龍観音》のモデル」として『岡山県立美術館紀要』（第7号、2017年）に詳細な考察を展開している。

資料8) 1901(明治34)年発行の気賀秋畝編『仏骨奉迎暹羅土産』奥付には気賀の住所が神田区駿河台西紅梅町9番地とあり、現在の紅梅通りと明大通りの角(千代田区神田駿河台2丁目2番)にあたる。これが「御茶ノ水橋角」と記される写真館、玉翠館の場所でもあろう。神田区裏猿楽町6番(現在の千代田区神田駿河台1丁目7番付近)の原田一道(豊吉・直次郎の父)宅からは至近の距離である。原田龍蔵は直次郎が没したときには6歳であり、水野正英が肖像写真から起こしたとされる肖像画(写真・複製画ともオリジナルは確認されていない)の下部に直次郎の署名を付した複製写真を、玉翠館に手配したのは一道ら原田家の人々であったと考えるのが妥当だろう。同じ複製写真は2016(平成28)年の原田直次郎展でも個人蔵の資料が紹介された(出品番号4-02)が、同資料の裏面に貼り付けられた挨拶文では、日付が空欄となっていた。当館所蔵の本資料には直次郎が帝国大学医科大学附属第二医院で没した日付(12月26日)が書き込まれていることと、門弟・大下藤次郎が12月4日付で「原田先生の高弟水野正英と申人先頃名古屋より上京」と書き記していることと合わせ考えると、直次郎が重篤となった時点で、会葬(12月28日、谷中・天王寺)の礼状としてこれらの印刷物を準備していたとの憶測も成り立つが定かではない。

II. 安藤嘉治彦関連資料について

資料3、6、7) 国立国会図書館所蔵の『官報』第3390号(明治27年10月13日)ならびに『陸軍現役将校同相当官実役停年名簿』(明治36年、45年ほか)などを調査したところ、歩兵第10連隊に所属する安藤姓の陸軍歩兵少尉として岡山の平民・安藤嘉治彦が該当した。安藤は1894(明治27)年10月11日付で少尉に任官、中尉(明治30年10月25日)、大尉(明治33年11月12日)、少佐(明治40年11月13日)を経て1911(明治44)年11月22日に予備役となっている。

歩兵第10連隊は1874(明治7)年に姫路(大阪鎮台姫路兵営)に創設され、同年12月18日に軍旗を拝受。西南戦争に参戦後の1888(明治21)年に大阪第4師団編入、1894～95(明治27-28)年に日清戦争参戦。1898(明治31)年に大阪第4師団から姫路第10師団に編入される。1925(大正14)年に岡山へ転営し再編、1945(昭和20)年の敗戦によって廃止となる。

遼東半島の営口で資料3が撮影されたのは日清戦争の参戦時である。安藤所属の歩兵第10連隊は第2軍に序列、1895(明治28)年4月に姫路を出て宇品港から海を渡った。11月19日に遼東半島撤去の命令に接し、大連港から乗船して1896(明治29)年1月2日に復員を完了している。

資料7が撮影された軍旗祭は陸軍の連隊が軍旗を拝受した記念日に行われる祝典で、軍旗を営庭に安置して神酒・供物を供し、一般公開して拝観させるとともに余興などが催されたという。姫路の写真館・独立館ならびに写真師の後藤については未調査に留ま

る。丸に鳥とSUPERIORの文字を組み合わせた紋章は他館所蔵写真の台紙にも確認され^(註8)、印画紙のメーカーマークと思われる。

なお、安藤嘉治彦は陸軍在籍時より古銭研究者として活動しており、岡山県玉島町で1927(昭和2)年10月31日に発行された『玉島人物志』に以下の記述がある(139-140頁)。

安藤嘉治彦

安藤嘉治彦は鞆彦の長男なり。明治七年七月三日を以て玉島町大字阿賀崎に生る。二十年阿賀崎尋常小学校を卒業し、廿二年九月陸軍幼年学校に入學す。廿六年陸軍士官学校に入學し、廿七年七月同校を卒業し同年十一月歩兵少尉歩兵第十聯隊附に任じ正八位に叙せらる。日清開戦するや二十八年五月金州半島を守備し、翌年戦功に依り勲六等瑞寶章を授けられ、三十年臺灣に在り、十月歩兵中尉に任じ、三十三年十一月歩兵大尉第十聯隊中隊長に進む。翌年三月臺灣守備の戦功に依り金員を下賜せられ、同十一月勲五等に叙し瑞寶章を賜ふ。日露大に戦ふや、三十七年五月十八日神戸港を出帆し、同月二十四日日清國盛京省南尖に上陸し、爾來拆木・鞍山站・瀋陽・沙河・奉天等の各戦に参加し、三十九年三月神戸港に凱旋したり。同年四月功に依り勲四等旭日小授賞功五級金鷄勲章を授け賜ふ。四十年十一月陸軍歩兵少佐に任じ歩兵第二十聯隊附仰付られ、四十一年三月從六位に叙す。而して在職十九ヶ年、四十三年より豫備役に編入せられ、翌年一月正六位に叙せらる。大正十五年三月十二年病歿す。年五十三。圓通寺に葬る。履歴書に據る嘉治彦の父鞆彦古泉癖あり。積年收藏する奇品極めて多し。而して嘉治彦も亦好古愛翫の癖あり。關西第一の古泉を以て目せらる。明治三十七年一月其蒐集する所を紙に印し遊仙堂泉譜四卷【註:安藤遊仙は雅号】を成せり。其第一卷は歴代錢と同開珎【原文は珍】神功開寶等背文錢・古刀布・古文錢・繪錢の類を載す。第二卷は寛永錢・文久錢・天保錢の類・金銀銅貨・外國錢、第三卷は鐵錢・符合錢・手替歴代錢、第四卷は清錢なし。大正七年九月東洋錢貨年表を出版し、續いて一大著あらんとし中道に歿せしは惜むべし。

1918(大正7)年9月1日発行の『東洋錢貨年表』奥付にある著者・安藤嘉治彦の住所は「大阪市南區間屋町二百六番屋敷」となっている。発行所の虎僊樓商店は大阪市南區の古銭鑑定売買・古金銀売買・古銭書販売として複数の古銭専門書誌を刊行しており、安藤が序文を寄せた本の広告なども記載されている。また、嘉治彦の父鞆彦は玉島町の町政施行後、初代町長(明治30年12月-44年2月)を勤めている。『玉島要覽』(昭和12年4月15日発行。発行は玉島町と玉島商工会)には以下の記述がある。

安藤嘉治彦 阿賀崎の出、士官学校卒業後日清及び日露の役に参加し戦功を樹て三十九年、勲四等旭日小授章を授けられ、後少佐に任じ、四十三年豫備役に編入、翌年正六位に叙せられ、大正十五年三月歿、年五十三。その父鞆彦は玉島町長たりし事あり古銭癖があつたが、嘉治彦も關西第一の古銭通を以て目せられ著書もある。

浅口郡玉島町(現・倉敷市玉島阿賀崎)の安藤家と同郡大島村(現・笠岡市西大島)の原田家は水島灘に沿って15キロほど離れており、

資料1の原田笑人をはじめ両家の関係は不詳に留まる。館蔵資料の更なる調査は、今後の明治美術・文化史研究の一課題と考えている。

註記

- 1) 埼玉県立近代美術館（2月11日～3月27日）、岡山県立美術館（5月27日～7月10日）、島根県立石見美術館（7月23日～9月5日）巡回時の共通の副題は「原田直次郎展 西洋画は益々奨励すべし」。
- 2) 喜多村氏より教示と複写資料の提供をうけた『大島人物誌』によれば、原田圭五郎は吉備郡総社町赤木朴齋の次子として1868（明治元）年3月30日生まれ、1886（明治19）年に東京慈恵会医学校を卒業。1921（大正10）年5月16日歿。直次郎の父・原田一道の異母兄にあたる原田元齡（医師）の子・周の養子となり大島の原田家を再興、清廉篤実な医師として郷人に慕われたという。直次郎からみて従甥となるが、撮影された1890（明治23）年には直次郎27歳、圭五郎23歳。ただし、『玉島人物誌』（玉島高等女学校白華會編著・発行）にある安藤嘉治郎が1874（明治7）年生まれなので、「笑人=圭五郎」が6歳下の安藤を「大君」と呼んだか、また医学校卒業後4年近く東京に残っていたのか、岡山から東京を訪ねた折に撮影したか定かでない。むしろ、笑人と大君の称号は親交の表れかもしれない、また喜多村氏より画像を提供された原田圭五郎の相貌は原田笑人に近い印象を受けた。なお、一道と元齡については鍵岡正謹「原田直次郎一父一道と兄豊吉の「資料」紹介一付、《騎龍観音》の「モデル」余滴」『岡山県立美術館紀要』第9号、2019年、1-13頁も参照されたい。喜多村氏より2019（令和元）年7月に提供された、氏作成の『大島人物誌』注釈および家系図と、鍵岡論文の注釈には相違がある。
- 3) 「幕末明治の写真師列伝」第70-78回、一般財団法人日本カメラ財団ウェブサイト。http://www.jcii-camera.or.jp/business/research-photographer_biographies.html（2019年9月最終閲覧）
- 4) 堀越勲「ドイツの原田豊吉についての新資料」『地質ニュース』219号、地質調査所、1972年11月、27頁。
- 5) 小川一真（1860-1929）については吉野（岡塚）章子『小川一真研究：撮影・印刷・出版 近代日本と写真』（2016年度筑波大学博士論文）などの詳細研究がある。小川は1884（明治17）年に麴町区飯田町に開業した写真館・玉潤館のほか複数の写真製版所をもち、豊吉が歿する1894（明治27）年は二度目の渡米から帰国して網目版印刷を手掛けている。
- 6) 日本写真協会から1952（昭和27）年に刊行された「日本写真界の物故功労者顕彰録」（『夜明けまえ 知られざる日本写真開拓史 I. 関東編 研究報告』東京都写真美術館、2007年に再録）では、中黒實について「東都本郷弓町の写真師。弓町に写真館を新築したのは明治三十年代のことである。」との記載あり。
- 7) 大下藤次郎『我が家の消息』は島根県立石見美術館所蔵の大下自筆資料、未刊行。引用は鍵岡正謹・橋村直樹編「原田直次郎 年譜」『原田直次郎 西洋画は益々奨励すべし』（青幻舎、2016年、186頁）による。
- 8) 京都大学附属図書館所蔵（維新特別資料文庫）の森寛齋写真（京都寺町四条北・松平写真館）の台紙など。Cf. 京都大学貴重資料デジタルアーカイブ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00021524>（2019年9月最終閲覧）

* 本調査にあたり喜多村安正氏より多大なご尽力と貴重な資料を賜りました。記して御礼申し上げます。



図. 1r



図. 1v



図. 2r



図. 8r

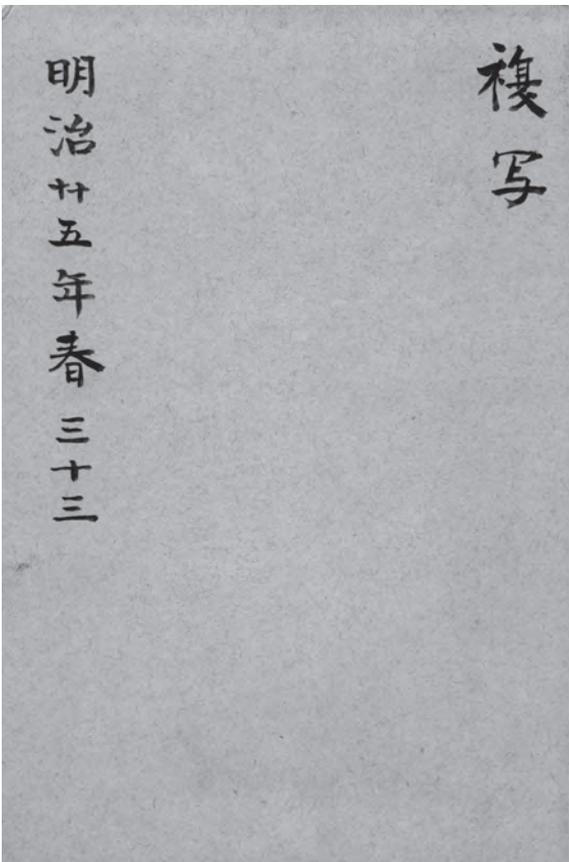


図. 2v

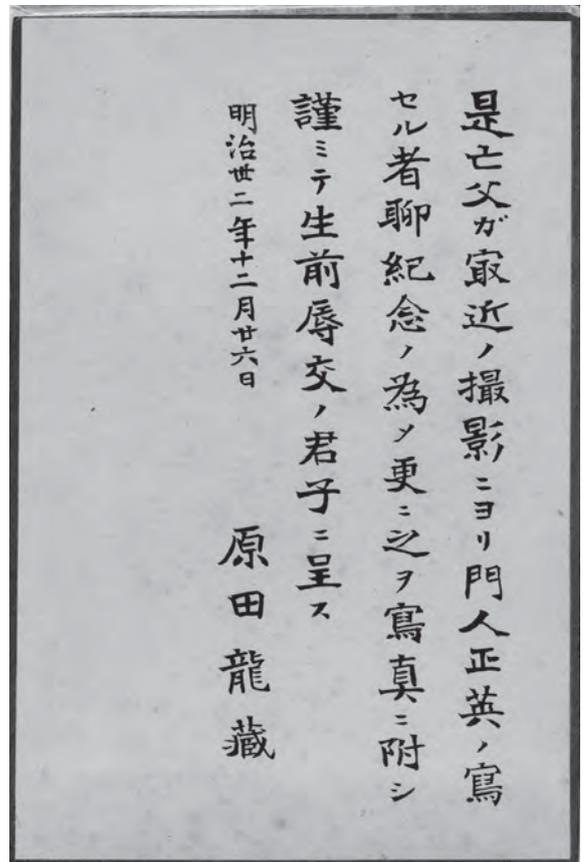


図. 8v



图. 3r

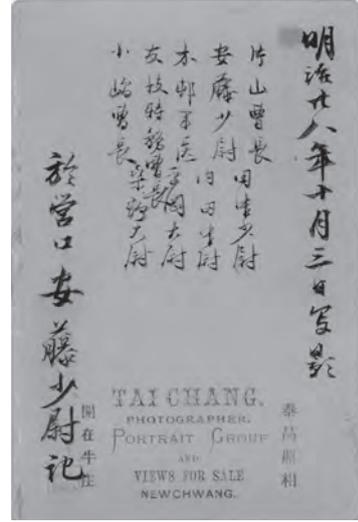


图. 3v



图. 4r

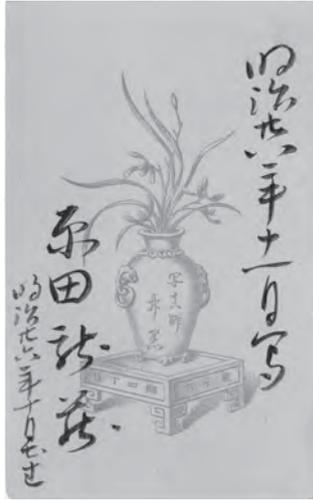


图. 4v



图. 5r



图. 5v



图. 6r



图. 6v



图. 7r

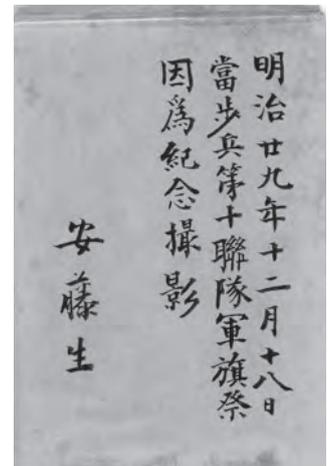


图. 7v

戦前・戦中期の佐野繁次郎

橋 秀文

はじめに

佐野繁次郎(1900-1987)は、洋画家である。また、書籍の装幀・挿画、さらにパピリオ化粧品のコマーシャル・デザインなどの分野でも活躍した。当館では、1993(平成5)年9月から12月にかけて鎌倉別館で佐野繁次郎遺作展を開催した。その前年に御遺族から佐野の約40点の油彩画や約760点の素描、3点の彫刻、さらに約20点の書籍やポスターなどの資料の寄贈を受けたことから開催した展覧会であった。これらは、1944(昭和19)年ころから住み始めた熱海の自宅に残された作品類である。それらを整理すると、油彩画は戦後のもののみで、資料類もほとんどが同様のものではなかった。展覧会の準備を進めていくなかで、佐野の戦前・戦中を紹介するのが極めて難しいことを痛感させられた。結局、1993年の遺作展は、戦後の作品のみの紹介となった。

佐野は、装幀・挿画の世界でとても評価の高い画家である。遺作展のあとの1999(平成11)年には、世田谷文学館で「川端康成生誕100年記念 横光利一と川端康成展」が開催され、横光利一の装幀・挿画を多く手掛けた佐野と文学者横光との関係に光が当てられた。以後、2005(平成17)年に、東京ステーションギャラリーと静岡の常葉美術館で「佐野繁次郎展」が、そして、2007(平成19)年には、神奈川県立近代美術館 葉山で「佐伯祐三と佐野繁次郎展」が開かれた。この折、佐野の芸術の全貌がほぼ明らかにされたように思われた。あれから12年経ち、今回は、佐野の芸術活動について見直しをはかろうと思っている。特に1932(昭和7)年9月の第19回二科展に出品された《裸婦》(図1)が当館に収蔵されたことの紹介も兼ねて、戦前・戦中期の佐野の創作活動について再検討してみたい。

文学か美術か

佐野は、1900(明治33)年に、大阪船場の墨間屋「古梅園」の長男として生まれた。彼は、近所の大阪市立久宝小学校に入学、卒業し、学歴はそこで途絶えている。その上の旧制の中学には進学しなかったようだ。そして1915(大正4)年の15歳頃に大阪の丸善で油彩道具とイーゼルを母親に買ってもらっている。またこのころ、2歳年上の洋画家佐伯祐三と出会ったという(註1)。佐伯のほうは、同時期、大阪府立北野中学校(現在の北野高校)に通っ

ており、卒業後、上京して川端画学校などに通い、最終的に1918(大正7)年、東京美術学校西洋画科に入学する。佐伯は、1923(大正12)年に東京美術学校を卒業後、同年11月に日本を出発し、1924(大正13)年1月にフランスに到着している。

佐野に話を戻すと、小学校を卒業してからのはっきりした履歴が認められない。1920(大正9)年、佐野が20歳の頃には、東京に住んでいたと自身回想している。西村伊作の弟の大石七分が建てたアトリエ付きの家に住んでいたことが知られており、佐野の留守中に佐伯が訪ね、そこにあったバーナード・リーチ作の椅子を欲しかったという(註2)。こうした話から当時の佐野の生活ぶりをどのように想像すればいいのだろうか。絵を本格的に描いていたわけでもなく、学校に通っていたわけでもない。そして、佐野は小学校を卒業してから1929(昭和4)年二科展に初出品し入選する30歳近くまで、親の仕送りで暮らしていた。つまり、すねかじりであったということである。1931(昭和6)年12月の文芸同人雑誌『作品』(第2巻第12号)に掲載されたエッセイ「夜や更けて」では、以下のように記載している。

僕は勝手なことばかりして三十いくつになつてこんな身の上になつて仕舞つてすねをかぢつて繪を描いているのだが、繪は少し欲が出てなんとかしてみたいと思つているのだがそれともうなることか、全くよく自分でわかつて考へてやつているには違ひないが他愛ない氣もする。(註3)

実際には「夜や更けて」を書いた年は、佐野にとって創作活動の面で評価されることが多い実り豊かな年であった。4月には装幀した横光利一の『機械』(白水社)が刊行され、9月には第18回二科展出品作の油彩画《休日》で梶牛賞を受賞している。そして20歳代の10年間に、佐野は絵を描いたり、戯曲や小説を創作したりして、己の才能を試す時期が続いていたのである。大正から昭和初期にかけて、このような青年が少なからずいたように思われる。画家になろうか文学者になろうか迷う芸術青年が存在したわけだ。それまで戯曲などを書いていた佐野は、1929(昭和4)年には、執筆活動をしながら、9月の第16回二科展に初入選を果たしている。この移行期には、1928(昭和3)年8月16日の佐伯祐三の死が、佐野の生き方や芸術観に何らかの影響を与えていると思われる。出会った頃から兄貴分的存在であった佐伯から何かとアドヴァイスを受けていた佐野にとって、佐伯の死は、想像外に大きな

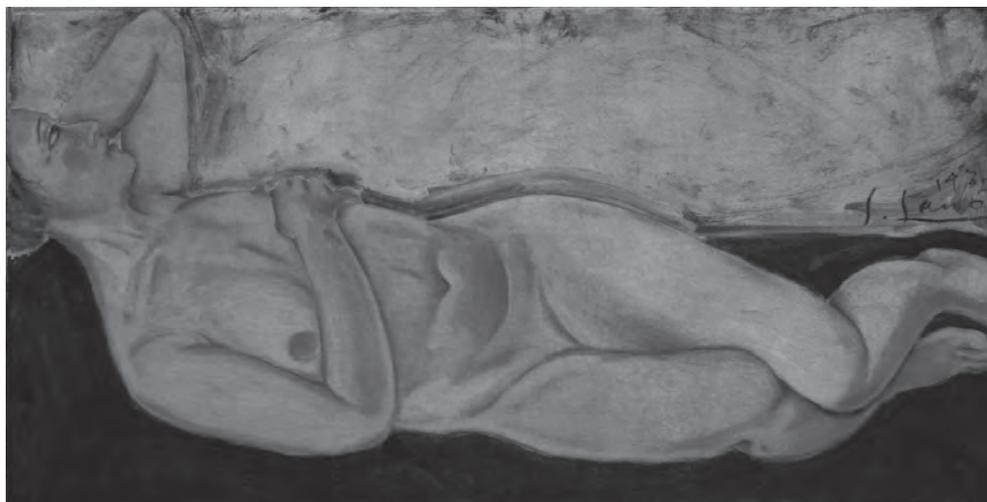


図1. 佐野繁次郎《裸婦》1932年、当館蔵

出来事であった。一つ例を挙げると、佐伯が1926(大正15)年にパリから帰国した際に、佐野は佐伯に会っているいと悩み相談をしている。そのなかで仕事のこと、特に装幀のことを佐伯に相談していたことをうかがわせる文章がある。1928(昭和3)年11月号の『三田文学』(第3巻第11号)に追悼文を載せた箇所、佐野は、装幀について次のように記載している。「……顔を合やすと、自分の事より真先に僕のことを尋ねた。―「本の圖案は仲々難しいが、何時でも描く」これも度々言つた。―その度、僕は依然、自分の不甲斐なさを愧じた……」(註4)とある。おそらくこの頃、佐野に本の装幀の仕事の話があったのだと思われる。今のところ佐野の初めての装幀の仕事が確認されているのは1930(昭和5)年になってからのことで、1926(大正15)年に佐伯に相談してから4年後ということになる。悩む佐野に佐伯は「本の圖案は仲々難しいが、」自分だったら「何時でも描く」と言い、翌年の1927(昭和2)年5月に、中河與一著『恐ろしき私』(1927年6月発行、改造社刊行)の装幀を行った。佐野は佐伯のこの装幀を見て、どれだけ刺激を受けて、励みともなったことか。佐野は佐伯から、装幀の仕事を行う上での姿勢または心構えのようなものを傍で見て学び取ったものと思われる。

二科展初入選

佐伯が亡くなったときに、佐野が知人として追悼文を最初に書いたのは、『三田文学』である。1928(昭和3)年8月に亡くなってその年の11月『三田文学』に「佐伯祐三を憶ふ(追悼)」を掲載している。そして翌年2月雑誌『美之國』(第5巻第2号)に「レストランの繪」という追悼文を寄せている。この絵は佐伯の《黄色いレストラン》(大阪中之島美術館蔵)のことである。ここでは、佐伯の思い出話ではなく、作品批評が行われている。佐野は佐伯の絵全体から美しい音を感じ取ったというのである。

また、1929(昭和4)年、雑誌『皿』創刊号である8月号に、佐野は「佐伯のハイカラ」という三つ目の追悼文を書いている。この雑誌は、東京のボントンというレストランの宣伝雑誌で、文藝春秋社の編集者が編集を請け負っていたといわれている。佐伯のハイカラとは何か、と自問した佐野は次のように結論付けている。

佐伯が労働者やパリの裏町を描いたことから、それを社会意識の下になされたこととして、又、佐伯のあの精力主義から、佐伯を所謂野獸派畫家として、その素朴、野生を特に指摘する畫人、文人が尠くないが、僕は佐伯には、寧ろ反對の、灰汁ぬけ、ハイカラをその正體として感じるのだ。僕は一見こそ多少小汚なくはあつたが、佐伯こそ、實は日本人中稀れにみる、本當の體、心の底からの灰汁ぬけした、ハイカラの男だつたと思つてゐる。(註5)

そして、この年の9月に佐野は第16回二科展で初入選を果たしている。大正末から昭和初期にかけて、文学や絵画、演劇、音楽などいろいろなものに関心を示す青年が多かった中で、先述したように、佐野も同様に様々なジャンルに顔を突っ込むといった、そのような生き方をしていたようだ。例えば、9月号の雑誌『皿』の消息で編集者が次のように記している。

佐野繁次郎二科に入選す。彼毎月三田文學へ小説戯曲を發表して好評噴々たる新人。「畫と文學で有島生馬だね」と言へば

本人我と我が身をつねつて見て「一體之は夢ぢやないかしら」。(註6)

このように二科展に初入選した当初は、文学に美術にと道が開けたようで、佐野も夢心地であったであろうが、次第に画家への道を歩んでゆく。この時期、あらためて佐伯の死と向き合った佐野は、佐伯の言葉をかみしめるようになったと思われる。つまり、「僕は繪かきは小説を讀む必要はないと思ふ。―君、小説家が文章をつくらうとすること、繪かきが繪を描かうとすることは、違ふだらう。」(註7)といった佐伯の言葉に画家としての強い信念、生一本のものを感じ、佐野は徐々に絵画の方に力点を置くようになっていったようだ。

画家として本格的な活動をスタート

佐野にとって絵画の本格的な仕事は、1929(昭和4)年秋あたりから始まった。絵の表現にしても具象系、半抽象系、キュビズム系など様々なものに関心が向かうなか、佐伯の画風にも影響を受けたらしく佐野の描いた『婦人サロン』の表紙(1930年6月)(註8)には、佐伯の最晩年作である《ロシアの少女》(大阪中之島美術館蔵、1928年)の影響が色濃く映し出されている。それはほとんど模倣といってよい。佐野は佐伯の真似事からスタートして、徐々に彼本来の個性を開花していくのである。

さらに佐野は文芸同人雑誌『作品』創刊号である1930(昭和5)年5月号の表紙(註9)を担当しているが、そこではグラフィックデザインを前面に押し出した作風となっている。また『三田文学』では、1928(昭和3)年7月号から1930(昭和5)年5月号にかけて佐野は演劇評、小説、戯曲、エッセイなどの文章を載せていたが、翌年1931(昭和6)年になると1月号から半年間、表紙をモダンな作風で飾ることになる(図2)。そして、よく知られているのが、1931(昭和6)年4月に白水社から刊行された新感覚派の旗手横光利一の『機械』の装幀である。その表紙のために描かれた油彩画(鶴岡市蔵)が残されている。この作品は油絵具ばかりではなく、破損しているがゴムなどもコラージュされている。さらに『文學時代』1931(昭和6)年1月号表紙では女性の裸体から半抽象的な表現が認められ、繊細かつ斬新な現代的感覚が横溢している。なぜ具象と抽象が同居しているのかと疑問に思えるが、特にデッサンの場合、一見具象的な裸婦といっても、現実に則しながらどんどん抽象的な形態にも向かっているわけである。全くの抽象画ではないが、美しい線や形態を追求した結果の表現といえよう。



図2 『三田文学』1931年1月号、
県立神奈川近代文学館蔵

モダンな表現の変容

また、この時期の佐野の裸婦デッサンがモダンな感覚を有していると周囲から認識されていたことをよく示す事例として、1934(昭和9)年の堀口大學の詩集『ヴェニウス生誕』(裳鳥会刊行)の装幀にまつわる逸話があげられる。堀口は、繊細で洗練されたモダ

ニズムの文学者である。この詩集を出版しようとした刊行人が、棟方志功を鼠眉にしていたことから、装幀・挿画に用いようとしたのを堀口が「ゲテモノ」という言葉を使って猛反対し、結局、別冊として上梓することで事態は収拾された。大きく扱われてはいないが、棟方の代わりに本来の書籍の装幀に採用されたのが、佐野の繊細な線描の裸婦デッサンであった(註10)。ただ、佐野の戦前・戦中の裸婦デッサンに限ってもモダンな美意識がよく表れているのは間違いないとして、戦中から戦後になっても変わりなく繊細で美しい裸婦デッサンを描き続けたかという点、戦後1950年代前半に油彩で描いた裸体画《ニュー》の連作をみると一見破天荒な線と形態で、以前の佐野の作品とかなり異なる表現であることに気づく。しかし、この《ニュー》の連作にしても、一見泥臭く見えるが、佐野独特の力強くモダンな感覚があふれているのも確かである。それは同時期に挿画・装幀でも多用した裸婦デッサンにも同様のことが指摘できる。ここにも、佐伯祐三の遺言とも言うべき先ほど紹介した「佐伯のハイカラ」が佐野の美意識を支えていった。つまり佐野は佐伯が「一見こそ多少小汚なくはあつたが、……實は日本人中稀れにみる、本當の體、心の底からの灰汁ぬけした、ハイカラの男だつた」ことを意識し、佐野本人もその美学を実践しようとしていったように思われる。こうしてみるとあらためて佐伯祐三の人生観ないし芸術観が佐野に及ぼした影響力が絶大であったことが理解できよう。そしてさらに、『ヴェニス生誕』で佐野の裸婦デッサンが棟方志功の芸術と対極にあるとみられていたのに、戦後の佐野の絵画では、棟方の芸術に一脉通じる泥臭く土俗的な生命力が認められるようになったことに驚かされる。どうしてそのような結果に至ったのかを考えると、やはり、「佐伯のハイカラ」の美意識が背後に働いていたのではないかと思うのである。そして、『ヴェニス生誕』の裸婦デッサンから戦後の裸婦デッサンへの佐野のモダンな表現の変容が認められる。

第19回二科展出品作《裸婦》

ところで、戦前・戦中の佐野の油彩画の中で、その所在が確認されているものはじつに少ない。装幀・挿画に創作活動の時間を多く費やしたことから油彩画の作品数が少ないということもあるが、二科展に出品した作品のほとんどが展覧会出品後、所在不明となっている。「佐伯祐三と佐野繁次郎展」(2007年)では、大阪中之島美術館が所蔵する作品《女》(図3)を1932(昭和7)年の二科展出品作《裸婦》と推定して出品した。当時の展覧会目録に《裸婦》のタイトルが載りながら図版は出ていない。しかしながら、2018年度に当館が収蔵した《裸婦》(図1)(註11)は、画面右中央の年記や作品の裏に貼られた作品シールの《裸婦》のタイトルなどから1932年の二科展出品作の《裸婦》と断定するに至った。以前、二科展出品作と推定した大阪のものは、同時期の別作品と思われる。《女》と題されたこの作品のモデルは、当館蔵の《裸婦》と同じモデルと思われる。油彩画では、デッサン画の繊細さとは異なる迫力のある女性像を創作している。モディリアーニや佐野の師である小出楯重などの裸婦をも思わせもするが、佐野の人物像は以後、さらに逞しさを備え、大胆な線を生かしながらもモダンな感覚を失うことなく、新たな表現が追求されていく。

戦中の佐野

佐野の戦前の大きな出来事の一つが、フランス経験である。1937(昭和12)年8月、37歳になって渡仏する。この年の7月7



図3. 佐野繁次郎《女》1932年、大阪中之島美術館蔵



図4. 佐野繁次郎装幀、横光利一著『旅愁 第一篇』1940年、白水社、当館蔵

日、盧溝橋事件が起きる。日中戦争(支那事変)の始まりである。この時期はまだ一般市民の間では戦争の悲惨さということはあまり実感を伴わなかったようだ。佐野は、パリではアカデミー・ジュリアンとアカデミー・グラント・ショミエールでデッサンなどを学んでいる。おそらく、若い日に美術学校に通うことがなかったことが、佐野に、あらためて、絵の基礎を学ぼうという気持ちにさせたのであろう。この渡仏の折、彼はアンリ・マティスに師事している。当時マティスと親しかった画商で美術評論家の福島繁太郎からマティスを紹介されたものと思われる。

佐野は、フランスに私費で渡り、一年たったところで一時帰国している。そして、翌年10月に再び渡仏し、1939(昭和14)年の夏には、ニューヨークに寄って帰国した。

因みに、1930年代にフランスに渡った日本人画家たちの多くが、ゴッホ終焉の地、オーヴェールのガシェ博士の家に訪問する、いわゆるゴッホ詣でを行う。佐野も1939(昭和14)年4月24日にガシェ家を訪れていることが、同家に残る芳名帳のサインで分かる(註12)。

佐野は、帰国した年の1939(昭和14)年の二科展に出品した《アトリエ》(鶴岡市蔵)を基に、その画像を翌年の横光利一『旅愁 第一篇』(図4)の装幀に使用している。この装幀は、以前担当

した横光の『機械』とともに戦前・戦中の佐野の装幀の代表作となった。《アトリエ》自体は、マティスの1911(明治44)年に制作された《桃色のアトリエ》(プーシキン美術館蔵)の影響が大きい。佐野にとってのマティスというのは、同時代というよりも学ぶべき過去の作家であったことが分かる。

1939(昭和14)年にドイツはポーランドに侵攻し、翌1940(昭和15)年9月に日本はドイツ、イタリアと三国同盟を結ぶ。1941(昭和16)年12月8日には、太平洋戦争がはじまる。この年の秋に佐野は、二科会の会友となるが、翌年の二科展終了後、退会している。この辺りの事情がよくわからない。戦中ということも考慮しなければならないのかもしれない。佐野は、二科会にこだわりを持つことがなかったのか。戦後、二科会の創設に参画していることをみると、団体展に全く関心をなくしたわけではなかったのであろう。この時期の佐野の動きをさらに調べる必要がある。そして、戦後の1951(昭和26)年に、パリのアンリ・トロンスユ画廊で個展を開催している。おそらくこれも福島繁太郎の肝いりによるものと思われる。佐野は戦後という世の中の新しい時代に、本人の芸術にも一区切りつけ再スタートしようという気持ちでいたのか、さらに半抽象的な新しい表現に取り組んでいた。その成果は、当館所蔵の《生活》(図5、1957年)や《生物》(1958年)に結実していった。



図5. 佐野繁次郎《生活》1957年 当館蔵

結び

佐野繁次郎の戦前・戦中の生きざまの様々な局面を辿ってきた。彼の初期のころは、昭和初期の青年期に、芸術に目覚めた若者の一人として、親族の支援を受けながら文学者になるか、美術家になるか岐路に立ち悩みながら自立していくという当時の芸術家像の一典型を見せていた。^(註13) 二科展に入選したことで、画家になる決意を固めたのであろうが、兄のように慕っていた佐伯祐三から画家として専念するように言われた言葉も佐野の背中を後押ししたようだ。

1932(昭和7)年作《裸婦》と大阪中之島美術館所蔵の《女》が偶然にも公の場に表れたことは、戦前の佐野の油彩画家としての真価を問ううえでとても貴重な作例といえる。なぜならば、それまでは、戦前の油彩画の作といえば横光利一旧蔵(現・鶴岡市蔵)の《機械》と《アトリエ》の2点のみが知られ、佐野がいかに横光利一専属の装幀・挿絵画家であるようなイメージが先行していたからだ。今後、さらに二科展出品作が再発見され、佐野の戦前・戦中の油彩画の成果をより一層検討することで、今まで以上に佐野の戦後の創作活動が彼の生涯を通して改めて正確に位置づけら

れることを願っている。

註記

- 1) 佐野繁次郎「自画像」『美術手帖』1953年8月号、55頁参照。佐野は回想のなかで「佐伯は僕の三つ四つ歳上で、その頃の僕には立派な年長者だった」(佐野繁次郎・談「あれやこれや」『アート・トップ』1976年4月号、70頁参照)と述べているように、実際には佐伯祐三と二歳違いでありながら、佐野が佐伯を自分より精神的にもずっと歳上のように思っていたことが分かる。
- 2) 前掲文1953年8月号、55頁参照。また、佐野繁次郎「佐伯祐三を憶ふ(追悼)」『三田文学』1928年11月号、110-111頁も参照のこと。
- 3) 佐野繁次郎「夜や更けて」『作品』1931年12月号、15頁を参照。
- 4) 前掲文1928年11月号、113頁も参照のこと。
- 5) 佐野繁次郎「佐伯祐三のハイカラ」『Ⅲ』1928年8月号、9頁。なお、佐野のこの追悼文に関しては、拙文「知られざる佐野繁次郎の佐伯祐三評」『神奈川県立近代美術館年報2008』神奈川県立近代美術館、2010年、59-60頁も参照のこと。
- 6) 編集子「消息」『Ⅲ』1929年9月号、32頁。
- 7) 前掲文、1928年11月号111頁。
- 8) 『佐野繁次郎装幀集成—西村コレクションを中心として』〔編〕西村義孝、みずのわ出版、2008年、70頁の006番『婦人サロン』2巻6号の表紙の画像を参照。
- 9) 1930年第1巻第1号『作品』の表紙、1931年第3巻第1号『文學時代』の表紙の画像は、当館で2007(平成19)年に開催された『佐伯祐三と佐野繁次郎展』図録の129頁を参照。さらに横光利一『機械』の装幀の画像は、同図録の130頁を参照。
- 10) この装幀の顔末に関しては、山田俊幸「棟方志功の時代を読む」『棟方志功展』町田市立国際版画美術館、1998年、12-13頁を参照。
- 11) 《裸婦》のキャンバスの裏に貼られていたシールには「東京市赤坂区福吉町一ノ甲五(佐野)繁次郎 裸婦」とある。()の処は破れて見えないので補った。素材・寸法・制作年は、油絵具・キャンバス、68.0×130.5cm、1932年。
- 12) 佐野繁次郎のガシェ家訪問については、『ファン・ゴッホ 巡りゆく日本の夢』〔編〕園府寺司、コルネリア・ホンブルク、佐藤幸宏、青幻舎、2017年、234頁参照。
- 13) 昭和初期の芸術家として画家であり、小説家の道も歩もうとしていた富澤有為男が、芥川賞を受賞してから文筆活動に力を入れていったといった例が浮かぶ。佐野の青春期の創作活動については、拙文「佐野繁次郎と『三田文学』」『三田文学』2005年、夏季号：第82号、88-90頁も参照。なお、佐野は二科展初入選あたりから、画家として専心し、以後、文学者になることはなかったが、多くの文章を残したことも確かである。西村義孝によると佐野の寄稿文を162編収集したと記している。西村義孝「神保町彷徨(1) 佐野繁次郎を探して」『かんだ』かんだ会、2012年、206号、12-15頁。

* この研究報告を行うにあたり、1991年度に佐野繁次郎の作品・資料をまとめて当館に寄贈して下さった故鹿海信也氏と鹿海武氏にお礼を申し上げます。また、写真を提供して下さった大阪中之島美術館と県立神奈川近代文学館に感謝の意を表します。

調査研究の発表・執筆等

1. 当館開催展覧会にともなう調査研究・発表

展覧会図録への発表：計4件 (pp.5-16 参照)

外部媒体への発表：計17件

2. 収蔵作品及び館内活動に関する調査研究・発表

朝木由香「上田薫 展覧会歴」「上田薫 主要文献」『上田薫 画集』求龍堂、2018年8月、pp.144-147

橋 秀文「木下柰太郎の詩集『食後の唄』と『木下柰太郎詩集』の挿画について」『神奈川県立近代美術館年報 2017』神奈川県立近代美術館、2018年11月、pp.46-49

靱山昌夫「1937年の『ソヴィエト連邦建設』に見る大粛清の影——ロシア革命への言及に着目して」『神奈川県立近代美術館年報 2017』神奈川県立近代美術館、2018年11月、pp.50-55

長門佐季「「神奈川県立近代美術館アーカイブ構想」の概要と今年度までの成果について」、三本松倫代・西澤晴美「資料紹介」平成30年度我が国の現代美術の海外発信事業「神奈川県立近代美術館 展覧会資料(1951ー)の整理と活用」研究会、2019年1月18日(葉山館)

長門佐季・西澤晴美「神奈川県立近代美術館 展覧会資料(1951ー)の整理と活用」文化庁 平成30年度我が国の現代美術の海外発信事業「我が国の現代美術の戦略的海外発信に向けた関連資料の整理」成果報告会、2019年2月23日(国立新美術館)

長門佐季「作品解説 松本俊介」『たいせつな風景』28号、神奈川県立近代美術館、2019年3月、p.12

ほか1件

3. そのほかの調査研究・発表

三本松倫代「越ちひろ」『VOCA 展 2018 現代美術の展望—新しい平面の作家たち』2018年3月、p.44

伊藤由美「ジョルジュ＝アンリ＝ルオー《町外れ》修復報告」『姫路市立美術館研究紀要 第16号 2017年』姫路市立美術館、2018年4月、pp.21-31

鈴木敬子「写真を利用したインクルーシブ教育の実践報告」2018年画像関連学会連合会合同年次大会、日本写真学会、2018年6月20日(千葉大学)

渡邊美喜編「十果会小史」『第40回記念十果会図録』高島屋、2018年7月、pp.32-39

橋 秀文「追悼 浜田知明先生 誠実に生きることがそのまま作品に表れた芸術」『新美術新聞』美術年鑑社、No.1481、2018年9月1日、p.2

水沢 勉「玉堂／ソングライン」『玉堂清韻社報』第7号、浦上家史編纂委員会、2018年10月、p.4

水沢 勉「Essay 迷宮の迷宮—「芸術」の現在」『神奈川大学評論』神奈川大学、第91号、2018年11月、pp.2-4

三本松倫代「オープンディスカッション、または大喜利」2018年度アーカスプロジェクト OPEN STUDIOS 関連プログラム、アーカスプロジェクト実行委員会、2018年11月23日(アーカススタジオ)

靱山昌夫『イリヤ・レーピンとロシア近代絵画の煌めき』東京美術、2018年12月

橋 秀文「享楽人またはフマニストとしての木下柰太郎」『国際シンポジウム—都市と表象文化』都市と美術研究所、2019年1月22日(早稲田大学)

水沢 勉「特集 知られざる創作版画 藤牧義夫 「セカイ」を「うつす」—藤牧義夫について」『版画芸術』阿部出版、No.183、2019年3月、pp.52-57

橋 秀文「北原白秋と木下柰太郎の詩歌集の挿絵について」『早稲田大学美術史学会春季例会』早稲田大学美術史学会、2019年3月2日(早稲田大学)

ほか7件

外部資金の活用

1. 外部資金を活用した調査研究

「ポーランドと旧ソヴィエト連邦の視覚デザインとその周辺領域の比較研究」平成 30 年度科学研究費助成事業（基盤研究 C：研究代表者 靱山昌夫）

「戦後日本の前衛美術のクロス・レファレンス的研究 1945-1955」平成 30 年度科学研究費助成事業（基盤研究 C：研究分担者 西澤晴美）

「シュルレアリスムの受容と発信：瀧口修造による共同制作の実践」平成 30 年度科学研究費助成事業（基盤研究 C：研究分担者 朝木由香）

2. 外部資金を活用した展覧会・事業

「神奈川県立近代美術館 展覧会資料（1951- ）の整理と活用」文化庁「平成 30 年度我が国の現代美術の海外発信事業「我が国の現代美術の戦略的海外発信に向けた関連資料の整理」

「国立民族学博物館コレクション 貝の道」公益財団法人野村財団、2018 年度上期芸術文化助成

「堀内正和展 おもしろ楽しい心と形」公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団 2018 年度芸術活動＜美術部門＞助成金

2018 年度 MULPA 事業 講演会「美術がもたらす『心』への作用」川畑秀明氏（慶應義塾大学文学部教授）、公益財団法人かながわ国際交流財団

2018 年度 MULPA 事業 ワークショップ「多文化ユース・フォトセッション in 三浦半島」大藪順子氏（写真家）、公益財団法人かながわ国際交流財団

「神奈川県まなびや基金」を活用した彫刻整備

2014（平成26）年7月、神奈川県は橘川雄一氏より、神奈川県立近代美術館における彫刻作品の整備を目的とした3,000万円の寄附を受け、神奈川県教育委員会の管理する「神奈川県まなびや基金」に組み入れた。この彫刻整備は寄附受入から5年間のうちに行うことが条件となっており、2018年度は彫刻作品の修復と野外彫刻のキャプション整備を行った。

「神奈川県まなびや基金」は、神奈川の県立学校などの教育環境向上のための自主財源確保を目指して2009年度に創設された基金で、寄附金やその運用益金を財源としている。

・ 彫刻作品の修復

渡辺豊重《SWING 86-01》の修復

鎌倉別館の庭園に展示されている同作品が経年で劣化していたため、一時撤去ののち修復を行った。まず、本体底部分の腐食剥離部分を除去し、新鋼材を使用して溶接にて張替えた。下地をポリパテで処置した後、全体を電動工具で研磨し、再塗装を行った。

作者	作品名	寸法 (cm) 高×幅×奥行	制作年	種別	素材	修復担当
渡辺豊重	SWING 86-01	250.0 × 220.0 × 50.0	1986	彫刻	鉄	塗装： 有限会社クリーン塗装 底部ステンレス加工： ファクトリーアートスケープ

堀内正和の彫刻作品6点の修復

2017年度に寄贈された堀内正和の彫刻作品35点のうち、経年で劣化していた6点について、作品の洗浄と損傷に応じた充填、接着、研磨、補彩を行なった。また、一部の作品については防錆剤を塗布し強度を高めた。

作者	作品名	寸法 (cm) 高×幅×奥行	制作年	種別	素材	修復担当
堀内正和	淳子の首	25.0 × 18.0 × 22.0	1946	彫刻	セメント	株式会社文化財ユニオン
	海の花 C	72.0 × 60.0 × 18.0	1952	彫刻	樹脂	
	海の花 A	81.5 × 40.0 × 40.0	1952	彫刻	石膏	
	エヴァアからもらった大きなリンゴ	16.0 × 35.5 × 26.0	1966	彫刻	石膏	
	円筒をななめに通りぬけるもうひとつの円筒	64.0 × 35.0 × 35.0	1970	彫刻	石膏	
	片側曲面四辺形（単面四辺形）	42.0 × 29.0 × 15.0	1972	彫刻	樹脂	

・ 葉山館に設置されている野外彫刻のキャプションの整備

2017年度にデザイン・製作された野外彫刻のための陶製のキャプションを用いて、葉山館庭園に設置されていた野外彫刻作品のキャプションと作品説明そして注意喚起のサインを21点デザイン・製作し、設置を行なった。

デザイン：柿木原政広、山口崇多(10inc.)

制作：CRIOS

設置：株式会社 東京美術工芸社



李禹煥 《項》（鉄・石、1985年）展示風景
（左下：新たに設置された作品キャプションと注意喚起のプレート）
撮影：永禮賢

講師派遣・外部委員等就任

1) 講演会講師等派遣(当館主催の学校連携プログラム以外の講師派遣)

実施日	会場	内容	主催/共催	派遣者
2018年11月23日	もりや学びの里内アーカススタジオ	オープンスタジオ関連企画「オープンディスカッション」	アーカスプロジェクト実行委員会	三本松倫代

2) 外部委員等就任

職員名	団体名	職名
水沢 勉	群馬県立館林美術館	作品収集委員会委員
	広島県立美術館	美術館評価委員会委員
	鎌倉市	鎌倉市教育委員会美術工芸作品収集選定委員会委員
	平塚市	平塚市美術館協議会委員
	葉山町	葉山町教育委員会委員
	福岡市	福岡アジア美術館美術資料収集審査員
	公益財団法人かながわ国際交流財団	理事
	公益財団法人ポーラ美術振興財団	助成事業選考委員
橋 秀文	東京国立近代美術館	美術作品修理業務企画審査員
	平塚市美術館	平塚市美術品選定評価委員会委員
	山口蓬春記念館	美術館評価委員会委員
	横浜市	横浜市美術資料価値評価委員会委員
	世田谷区	世田谷区立世田谷美術館美術品等収集委員会委員
	神奈川県民共済生活協同組合	夏休みに描くクレヨン画コンクール審査員
梶山昌夫	湯河原町	湯河原町美術品等選定委員会委員
	神奈川県	神奈川県美術展審査員
	神奈川県女流美術家協会	神奈川県女流美術家協会展審査員
	公益財団法人かながわ国際交流財団	みんなで“まなびほぐす”美術館—社会を包む教育普及事業作業部会委員
長門佐季	東京国立近代美術館	美術作品評価委員会委員
	横須賀美術館	美術品評価委員会委員
	東京都	東京都現代美術館美術資料収蔵委員会委員
	神奈川県	神奈川県美術展生徒部門審査員
	一般社団法人照明学会	美術館・博物館照明技術指針作成委員会委員
伊藤由美	東京藝術大学	非常勤講師
	愛知県立芸術大学	非常勤講師
	一般社団法人文化財保存修復学会	監事
三本松倫代	茅ヶ崎市	茅ヶ崎市美術品審査委員会委員
	神奈川県	文化財保護ポスター展審査員
	公益財団法人かながわ国際交流財団	みんなで“まなびほぐす”美術館—社会を包む教育普及事業作業部会委員
	公益財団法人日本美術協会・上野の森美術館ほか	VOCA展2018推薦委員
高嶋雄一郎	公益財団法人かながわ国際交流財団	みんなで“まなびほぐす”美術館—社会を包む教育普及事業作業部会委員
西澤晴美	神奈川県	カナガワビエンナーレ国際児童画展審査委員
鈴木敬子	千葉大学	非常勤講師
荒木 和	東洋美術学校	非常勤講師
吉田有璃子	神奈川県	カナガワビエンナーレ国際児童画展審査委員

運営・管理報告

概況

1. 沿革

昭和26年11月17日	神奈川県立近代美術館として開館
昭和41年3月31日	収蔵庫及び常設展示室並びに附属棟を増設
昭和44年3月31日	学芸員室を増設
昭和49年8月1日	神奈川県立近代美術館組織規則(昭和49年神奈川県教育委員会規則第9号)により、管理課、学芸課の2課を置く
昭和59年7月28日	別館を開館
平成3年10月30日	本館の改修工事完了
平成13年7月5日	PFI事業契約の締結
平成15年6月1日	神奈川県立近代美術館組織規則の改正により、管理課、企画課、普及課の3課体制となる
平成15年10月11日	葉山館を開館
平成28年1月31日	鎌倉館の一般公開を終了
平成28年3月31日	鎌倉館を閉館
平成28年12月22日	鎌倉館の建物を(宗)鶴岡八幡宮に譲渡
平成29年9月4日	鎌倉別館、改修工事のため一時休館 (～令和元年9月までの予定)

2. 所掌事務

県民の近代美術に対する知識及び教養の向上を図るため、近代美術に関する資料の収集、保管及び展示並びにこれに関する調査研究、情報提供等を実施する。

3. 施設の状況

平成30年4月1日現在

ア 土地		面積
県有	(葉山館分)※生涯学習課管理	15,034.86㎡
	(鎌倉別館分)	4,937.00㎡
イ 建物		延床面積
	(鎌倉別館分)	1,599.00㎡
借用	(葉山館分)	(有償分) 7,111.51㎡

収入・支出の状況

(平成30年度実績)

収入

科目	金額(円)	内訳
教育総務費使用料	6,968	鎌倉別館電柱等 土地使用料
社会教育費使用料	53,222,700	観覧料収入
社会教育費事業収入	5,473,634	図録等売払収入
社会教育費受講料収入	87,000	県立社会教育施設公開講座
社会教育費立替収入	1,986,232	レストラン他光熱水費
教育費雑入	1,134,832	図書館複写料金、助成金、 古紙売払収入
計	61,911,366	

※収入・支出とも近代美術館執行分のみ

PFI事業の概要

1. 事業内容

鎌倉の地における開館以来半世紀が経過する中で不足してきた機能を補うため、既設館と連携する新館を葉山町に建設し連携することで、これまでの高い企画力を受け継ぎ、展示・収蔵機能の充実など、生涯学習時代にふさわしい機能を備えた美術館を整備することとした。その整備に当たっては、PFI法に基づき事業者が新たに葉山町に新館を建設・所有し、維持管理業務・美術館支援業務・備品等整備業務を行うとともに、既設館についても維持管理業務を行うこととした。事業者は、平成15(2003)年4月に開始した維持管理業務・美術館支援業務が終了する30年後の令和15(2033)年3月末をもって県に施設を無償譲渡する。事業者の主な業務は次のとおり。

- ア 葉山館建設業務：葉山館 新築工事、バスベイ・歩道整備工事など
- イ 維持管理業務：葉山館 建築物修繕、建築設備保守管理(修理を含む)、清掃、警備、受付・監視など
鎌倉館及び鎌倉別館 建築設備保守管理(修理を含まない)、清掃、警備、受付・監視など
※鎌倉館の業務は借地期限の平成27年度までとする。
- ウ 美術館支援業務：美術情報システムの整備及び運用支援、独立採算による付帯施設(レストラン、ミュージアムショップ、駐車場)運営

2. 事業者

株式会社 モマ神奈川パートナーズ
所在地：横浜市西区みなとみらい2-2-1

支出(人件費含まず)

科目	金額(円)	内訳
維持運営費	19,360,628	維持管理
美術館事業費	57,279,347	展覧会開催費、教育普及事業、 調査研究事業
美術作品整備費	35,828,024	美術作品購入・修復、 鎌倉別館改修に係る関連経費
特定事業費	389,103,356	PFI事業費
県立社会教育施設公開講座事業費	310,000	
計	501,881,355	

関係法規

神奈川県立近代美術館条例

昭和42年3月20日

条例第6号

(趣旨)

第1条 この条例は、神奈川県立近代美術館(以下「美術館」という。)の設置、管理等に関し必要な事項を定めるものとする。

(設置)

第2条 近代美術に関する資料の収集、保管及び展示並びにこれに関する調査研究、情報提供等を行い、県民の近代美術に対する知識及び教養の向上を図るため、美術館を三浦郡葉山町一色2,208番地の1に設置する。

(職員)

第3条 美術館に、事務職員、技術職員その他の所要の職員を置く。

(観覧料の納付等)

第4条 美術館に展示している美術館資料を観覧する者(以下「観覧者」という。)は、別表に定める額の観覧料を納めなければならない。ただし、公開の施設に展示している美術館資料の観覧については、この限りでない。

2 前項の規定にかかわらず、特別な企画の展覧会を開催する場合の観覧料は、神奈川県教育委員会(以下「教育委員会」という。)がその都度別に定めることができる。

3 教育委員会は、第1項本文及び前項に規定する観覧料を収めた者に観覧券を交付するものとする。

4 観覧者(別表備考2に規定する者を除く。)は、入館する際に、前項に規定する観覧券又はこれに代わるものとして教育委員会が認めたものを提出し、又は提示しなければならない。

(観覧料の減免)

第5条 前条第1項本文及び第2項の規定にかかわらず、教育委員会は、次の各号のいずれかに該当する者については、観覧料を減免することができる。

(1) 教育委員会が開催する行事に参加する者

(2) 教育課程に基づく教育活動として入館する高校生(学校教育法(昭和22年法律第26号。別表備考において「法」という。)第1条に規定する高等学校及び中等教育学校の後期課程並びにこれらに準ずる教育施設に在学する者をいう。別表において同じ。)並びに児童及び生徒の引率者

(3) その他教育委員会が適当と認めた者

(観覧料の不還付)

第6条 既に納付された観覧料は、還付しない。ただし、教育委員会が災害その他特別の事情により還付するのを適当と認めたときは、この限りでない。

(資料の特別利用)

第7条 美術館資料を学術上の研究のため特に利用しようとする者は、教育委員会の承認を受けなければならない。

(利用の制限)

第8条 教育委員会は、美術館の利用者が次の各号のいずれかに該当する場合には、その利用を制限することができる。

(1) この条例又はこの条例に基づく規則に違反したとき。

(2) 他の利用者に著しく迷惑をかけるおそれがあると認めるとき。

(3) 施設、美術館資料等を損傷するおそれがあると認めるとき。

(4) その他教育委員会が必要と認めるとき。

(委任)

第9条 この条例に定めるもののほか、美術館の管理等に関し必要な事項は、教育委員会規則で定める。

附則

1 この条例は、昭和42年4月1日から施行する。

2 神奈川県立近代美術館条例(昭和26年神奈川県条例第46号)は、廃止する。

附則(平成28年10月21日条例第77号)

この条例は、平成28年12月1日から施行する。

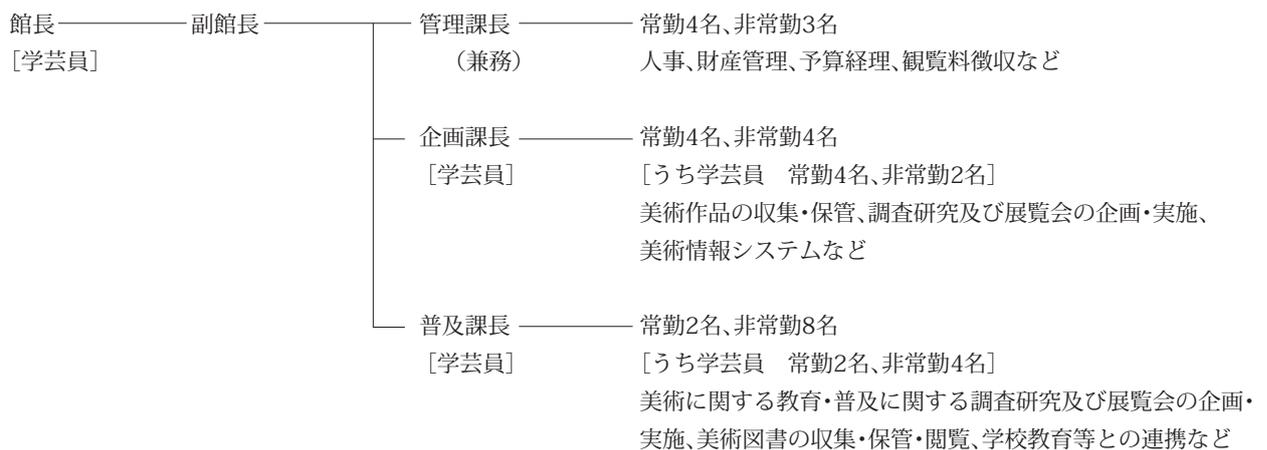
別表(第4条関係)

区 分	個 人	20人以上の団体
20歳以上65歳未満の者(学生及び高校生を除く。)	1人につき 250円	1人につき 150円
20歳未満の者(高校生を除く。) 学生(65歳以上の者を除く。)	同 150円	同 100円
65歳以上の者 高校生	同 100円	同 100円

- 備考 1 学生とは、法第1条に規定する大学及び高等専門学校、法第124条に規定する専修学校並びに法第134条第1項に規定する各種学校に在学する者をいう。
2 学齢に達しない者並びに法第1条に規定する小学校、中学校、中等教育学校の前期課程及び特別支援学校並びにこれらに準ずる教育施設に在学する者は、無料とする。

組織

葉山館の整備による組織の改編を行うため、神奈川県立近代美術館組織規則を改正(平成15年6月1日施行)し、従来の管理課・学芸課の2課体制から、管理課・企画課・普及課の3課体制となった。平成30年4月1日現在の職員配置状況は次のとおり。



職員数合計 29名

常勤 13名(再任用3名、臨任2名含む)、非常勤 16名(短時間勤務再任用2名含む)

[うち学芸員 常勤 8名(再任用1名、臨任2名含む)、非常勤 6名]

施設別配置状況

全員葉山館に配置

職員一覧

館長(非常勤)	水沢 勉		
副館長	吉田 浩		
管理課	課長(兼)	吉田 浩	
	主査	岩野 幸司	
	主査	松島 隆志	
	管理業務主任専門員	石井 渉	
	管理業務主任専門員	児玉 祐一郎	
	管理業務専門員	山崎 崇	
	非常勤事務補助員	小野 和子	
	非常勤事務補助員	二藤部 映	
企画課	課長	長門 佐季	
	主任学芸員	橋 秀文	
	学芸員	西澤 晴美	
	臨時学芸員	朝木 由香	
	臨時学芸員	土居 由美	
	非常勤研究員	伊藤 由美	
	非常勤学芸員	荒木 和	
	非常勤学芸員	渡邊 美喜	
	非常勤事務嘱託	平戸 誠一郎	
普及課	課長	靱山 昌夫	
	主任学芸員	三本松 倫代	
	主任学芸員	高嶋 雄一郎	
	非常勤学芸員	鈴木 敬子	
	非常勤学芸員	高原 茉莉奈	平成30年12月31日まで
	非常勤学芸員	八木 めぐみ	
	非常勤学芸員	吉田 有瑠子	
	非常勤学芸員	芦刈 歩	平成30年10月14日から
	〔美術図書室〕		
	図書業務専門員	山中 久美子	
	非常勤司書	藤代 知子	
	非常勤司書	小川 さよ子	
	非常勤司書	大野 寿子	

年報 2018(平成30)年度

発行日：2019年12月24日

編集：神奈川県立近代美術館

葉山館 〒240-0111 三浦郡葉山町一色 2208-1 電話 046-875-2800

鎌倉別館 〒248-0005 鎌倉市雪ノ下 2-8-1 電話 0467-22-5000

制作：有限会社リーヴル

ANNUAL REPORT 2018

Edited and published by The Museum of Modern Art, Kamakura & Hayama, 2019

Produced by Livre

© 2019.12 The Museum of Modern Art, Kamakura & Hayama

